
ウルトラマンティガ legacy of mythology

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンティガ legacy of mythology

【Nコード】

N6345W

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

光であり人である・ウルトラマンティガ。かつて闇の巨人だった彼は、いかにして光の戦士へと変遷したのか。

明らかにする超古代文明の悲劇、光が生まれる奇跡、ティガの地で始まる伝説。神話は受け継がれ、新たな時代へと紡がれるウルトラマンティガの伝説を織りなす最後の欠片。

光あれ

光あれ。無の中に光が生まれた。光は影を生んだ。二つは常にとともにあり、向き合う宿命にあった。そして、二つがそれぞれの道を歩み始めた時、悲劇は起こった。

太陽に照らされる青い星、地球。そこには大いなる文明を築いた人類がいた。自然とともにあり、その恩恵を抱き、大地と海と風と共に生きる人がいた。だが、文明の進んだ彼らにもわからないものがあつた。それは、神である。

神。宗教的な響きを持つこの言葉。世界を、人類を創造し、見えぬけれども存在し、この世を見下ろす存在。それは人格を持つものでなくともよい。大いなる力を持ち、人とは違う上位の概念、大いなる存在。それが、神である。世界の中に生きながら、必ずいるであろう上位シフトの存在である神に到達できないことは、次第にこの世界は何か、人類とは何か、疑問がやがて不安に変わりだす。誰の手の上にいるのか。運命とは何か。進んだ文明を生きる上で、必然の思考の壁である。そんな彼らの前に神が姿を現す。キリエル人である。

キリエルはどこから来たのかはわからない。一人なのか、集団なのかはわからない。なぜなら彼らには体がない。肉体という器を必要とせず、物質という縛りから抜け出した不思議な存在。物質と自然を調和させた文明を持ちながら、神の存在を認知しない人類にとって、あらゆるものから自由なキリエル人は、まさに神のごとき存在だった。

「我々を敬え。我の言葉に耳を傾けよ。さすれば、約束された一つの未来へキリエルが導こう」

多くの者がキリエルの言葉に耳を傾け、その運命を委ねていった。

彼らが導くたつた一つの未来に歩んでいく。しかし、キリエルの導く未来に人々は疑問を持ち始めた。キリエルが救済するのは、キリエルを信じる者のみであった。信じる者には、守護と安寧を与える。だが、キリエルを疑う者、或いは拒絶する者には、絶望と破滅を与え見放す苛烈さが課せられる。

また、キリエルという神を名乗る存在が現れた頃から、神に対をなす存在が現れ始めた。文明を破壊し滅亡に引きずり込み、心を荒廃させ墮落させる者達だ。世界を創造し、人々を救済するものを神だとするのなら、それと対をなすのは、邪なる考えを抱く神、邪神と言えるだろう。邪神は、全てを無に帰し、世界をどんな彩りにも染めることの出来ない黒一色の世界、闇に世界と人を引きずり込み始めた。しかし、キリエルは自らの信奉だけを求める、救世主とは名ばかりの偽善と詭弁をふるう存在でしかなかった。

そんな絶望の中、いや、絶望の中にいるからこそ、人々の心に本当の救いを求める願いが生まれた。

「我々をこの絶望の底から引き上げる救世主を」

「暗黒の未来を照らす、光よ」

人々の願いが世界を、星を満たし、祈りの声が宇宙に響いていた。そして、彼らはその声に応えるように星にたどり着き、天空より舞い降りた。それが光の巨人であった。光は、闇からの使者である怪獣たちを退け、滅びの道から人類を解き放つ救世主であった。人々の信頼は、光の巨人へと移っていった。キリエルは激しい嫉妬と憤怒にかられた。

「後から来たお前たちが、救世主として君臨するなどおこがましい。すぐに立ち去れ」

傲慢なる意思で言い放つキリエル人に、光は淡々と意思を伝えた。「我々は救世主ではない。救いを求める祈りに応え、それに沿う行

動を示しているにすぎない。人類の選択には干渉しないし、強要もしない。我らは光に過ぎない」

その聡明な言葉で、キリエルの欺瞞は決定的となり、人々の意思が離れていったことで、思念を糧にする彼らは霧散していった。こうして人類は、滅びの瀬戸際で踏みとどまることができたのである。

光の巨人は、滅亡への様々な尖兵を退け、人々から闇の影を取り払っていった。光は救世主であらうとはせず、ただ祈りに応える形を貫いた。それでも、人々は光を崇め、敬意を払い、彼らの心と行動への憧れを込め、光の巨人を模した石造を建築した。光はいくつも存在し、形も定型ではなかったが、それぞれの目や心に映る巨人の姿を形に起こし、何体もの石像が生まれていった。

だが、そこから光の意思と人類の意思が乖離していった。光は信仰を求めずただ祈りに応える存在である。しかし、偶像と言う形で光の存在を独占しようとする心が人類に生まれていった。偶像を作ることで各々の心に光を独占したい心が生まれた。独占は我欲を刺激し、さらなる光への渴望を呼び覚まし、人体を光のエネルギーへ変換し、石像と組み合わせる技術に手を伸ばした人類は、光の巨人の力を手にする巨人となった。

巨人達は、ある者は光の巨人の遺志を継いで闇と戦う存在となった。だが、一方では心が強大な力に呑みこまれ、その力に溺れていった。考えの違う巨人たちはやがて人類の心をむき出しにして強大な力を行使し、巨人同士の争いが勃発した。恐ろしいほどの強大な力のぶつかり合いは、大地を荒廃させ、天を暗雲に包み、海は凶暴な牙をむいた。光によって滅びの歩みをかろうじて止めた人類は、あろうことが自分達の選択で再び滅びへの道を転がるように突き進んでいった。闇は息を吹き返し、再び怪獣たちを世に放ち、破壊と巨人たちの戦いを激化させていた。彼らはさらに滅びの花・ギジェ

ラを撒き散らし、人類は快樂と墮落の中で滅びを選んでいった。

光の巨人は、もはや手を差し伸べはしなかった。己の意思とは関係ない意思と力で滅亡するのならともかく、自分達の選択の結果、滅亡に向かう人類を救済するような行為は彼らの選択肢にはなかった。

「我々は、人の選択まで干渉はしない。祈りに応える存在である我々は、君らが滅びを願う心に立ち入らない。これが別れの時だ。だが、もし人類が未来に向かって歩みを進めようとする強い心を持てた時、その時はまた君達に力を貸す日が来るかもしれない」

そう言い残し、光の巨人たちは天へ帰っていった。再び人類と光が出会う時を予言しながら、滅亡への戦争を繰り返す人類に背を向けて去っていったのだ。

巨人たちの争いはとどまることを知らなかった。力に酔い溺れていった彼らは、相手を倒すことでさらに恍惚な感情の虜になっていった。いつしか、彼らの心には闇が忍び込んでいった。そして、闇の存在に心を委ねることで破壊的な力を得た者たちが現われた。巨人の力に加え、すべてを破壊し滅ぼす力である闇の力を解放させた彼らは、圧倒的な力で巨人たちを屠り、ほとんどの地上の文明を破壊し尽くした。

その恐ろしき闇の巨人は四人。名は、「破壊のダラム」、「欺瞞のヒュドラ」、「愛憎のカミール」、「虚無のティガ」と呼ばれた。

闇の遊戯

光が去り、闇の覆われ尽くそうとする世界。文明は荒廃し、海や山に生物の姿はなく、荒涼とした大地には沈黙だけが存在する。その大地に、空から巨大なものが落下してきた。クレーターを形成し、土ぼこりが舞う中、姿を現したのは巨人であつた。光の巨人を模した石像に、人体を光に変えるシステムを使用して石像と一体となることで、擬似的な光の巨人となつたものである。巨人は息も絶え絶えに、痛むのか胸を抑えながらふらふらと立ち上がった。巨人は足元もおぼつかず、倒れこみそうになるのをこらえながら、大空を睨みつけるように見据えている。すると、彼が見据える空から、空気の壁を破つて音速を超えて飛来する物体が、巨人の腹部を貫くように激突した。巨人は再び吹き飛ばされ、立ち上がることはできないが、それでも立ちひざの状態で闘志を示しながら、飛来した物体の姿を見据え、絞り出すような声で呟いた。

「ティガ……」

ティガと呼ばれた者は、手負いの巨人を無表情に、そして感情さえないかのように見下ろしていた。その姿は漆黒の姿で塗りつぶされ、彼が闇に属する巨人であることは一目同然だつた。ティガは、倒れ込みそうな巨人に近づきながら、抑揚のない声で話しかける。「立てよ。これじゃ、俺の心は満たせない。立ち向かってこい。もっと命懸けで俺にかかってこい」

ティガの言葉に、巨人はわずかに心の中に恐怖を感じた。闇の巨人は4人いる。彼らは破壊や欺瞞、愛憎などの感情を肥大化させ、それだけを行動理念にする闇に魅せられた者たちだ。その中でも、このティガと言う戦士は、異常な強さと行動理念を持っていた。どれだけ戦っても、心の昂りも興奮も得られず、ただひたすら感情も

なく、表情もなく、心を満たすことのないまま敵を葬り続けていく。本人は心を満たそうと戦い続けるが、どれだけ敵を屠っても決して心が満たされることのない「虚無」に突き動かされる、人間性が死んでいる戦士なのだ。人ではない心を持つ人の形をした戦士。恐怖はそこから生まれるのだ。

ゆつくりと歩み寄るティガに対し、巨人は全く勝ち目がないのを知った上で立ち向かっていった。勇気ではない、恐怖ゆえの行動である。闇雲に飛びかかる巨人をけだるそうに交わすティガは、すれ違いざまに相手の腕をとると、手元に引き寄せて相手の顔を何度も殴りつけ、さらにつかんだ腕を躊躇なくねじり上げ、腕を破壊してしまった。痛みには耐えかねてその場に倒れ込む巨人を、ティガは物でも蹴る様に蹴りつける。次第に動かなくなっていく巨人を見下ろすと、距離をとると腕をし字に組んで、どす黒い波動を動けない標的に浴びせた。波動が直撃した巨人は、体から光を失っていき石像と言っただけの「物」になった。光となった人のエネルギーを闇で奪えば、残るのはただの物である石像であるのは自明の理である。

ティガは、石像を無言で見下ろしている。あれだけ相手を傷めつけながら、彼の心は全く満たされていないのだ。その場に立ち尽くすティガの周りに突風が吹き荒れた。風がやみ、静かになったその場にティガ以外の気配が現われている。

「相変わらず、強さは半端じゃねえな」

「ヒュドラか。見てたのか」

いつの間にかティガのそばに立っていた巨人は、黒みがかった体に紫の線が刺青のように体に突き刺さっている。その禍々しさから、彼もまた、闇の巨人であることが分かる。彼は、「欺瞞のヒュドラ」と呼ばれている。周りを欺き、自分だけを信じる。自分こそが絶対であり、周りは信ずるに値しない。仲間であっても、疑いの目で見ることによって自分を守りながら近づく巨人である。

「俺は帰り道さ。それにしても、あれだけ相手を散々いたぶって、まだ満足できねえのか。ほんとに怖いね」

「人を嗅ぎまわったり、策を講じないと安心できない、小心者のお前に言われたくないな」

「言ってくれろぜ。おい、この石像はもらっていいか」

「好きにすればいい。どうセルルイエの礎にするんだろ。俺は、先に帰る」

ティガはそう言い残して飛び上がり、マツハのスピードで飛び去っていった。残ったヒュドラは、敗れ去った巨人の石像を抱えあげながら飛び立った。

「それにしても、愛想の悪い野郎だ。何やっても心が満たされないなんて理解に苦しむぜ。カミーラは、何であんな野郎に首つたけなのか、不思議でならねえ」

二人の巨人が向かう、彼らの住処であるルルイエ。昔は一大文明を誇って、栄華の極みにあつた海の都であつた。しかし、闇の進行やそれに伴う怪獣やギジエラの出現、そして巨人同士の戦争により、人命や文明はおろか、島自体が破壊し尽くされほとんどが水没し、死の街と化してしまった。通常の子供の精神の持ち主であれば、その荒れ果てて生命の息吹を感じられないルルイエに住む気など絶対に起こらないのだが、荒みきつた心の彼らにとっては、至って住み心地がよいのだろう。

そのルルイエに蠢く影がある。一人は、血のように赤い模様が体に浮かぶ、屈強な体つきの巨人、彼の名はダラム。彼は、無限にあふれ出ると思える剛力で、あらゆるものを破壊することのできる力を持っている。破壊のダラム世呼ばれる彼は、口数の少ない寡

黙な巨人で、その考えは他人には全くわからない。彼は、岩を切り崩し、それを持ち運んでは器用に組み合わせ、その剛力で巨大建造物を作っていた。

本来、破壊をその行動原理にもつ彼を、建築という全く反対の行為に使役しているのは、若い女性の姿をした人物であった。

「ダーラム、しっかり組み立てなきや駄目よ。せつかく神殿を立てても壊れちゃったら意味がないんだから」

闇の巨人に対して言う言葉にしては、あどけなさすら感じられ、天真爛漫さが全身に溢れているその女性の名はカミーラと言った。

4人の闇の巨人の中で唯一の女性である彼女は、もっとも人間らしさがある様に思えるのだが、実際は違う。彼女の精神構造の基本は、愛憎にある。愛と憎しみ。人と関わりを持つ上で並立する二つの感情。この感情があまりにも激しく、愛する者には盲目的につくし独占しようとし、憎しみの対象は苛烈なまでに排除し抹殺に走る。そんな両極端な激情を持つカミーラだからこそ、ダーラムは黙々とわがままを受け入れるし、そうさせる怖さがカミーラの笑顔の影に隠れている。

「あーあ、早くティガ、帰ってこないかな。きっと、このルルイエ神殿を見たら、びっくりするわ」

「マイフレンド、ティガ……。そこまであいつに夢中になる理由はあるのか」

「特別な理由なんてないわよ。あたしと一緒にいてくれて、色々な所にいける。それだけよ。あたしが好きだから、それでいいでしょ」

「あいつは、誰も受け入れない。空っぽの心だ。お前のことも、目に入っていない」

「ふん。必ずあたしが彼を振り向かせるんだから。こんなに愛しているんだもの、きつとできるわよ」

極端すぎる感情が独占欲にまで波及するカミーラの言葉にうんざりしたダーラムは、再び仕事に戻り黙々と働き続けている。こんなたわいのない会話をする二人がいるのが、暗雲に包まれた文明の墓場と言うのが奇妙な組み合わせであり、不気味さを搔きたてる。そんなルルイエに、ティガとヒュドラが接近してきた。世界を破滅に導いた決定的な要因である四人がルルイエに揃った。

ティガは、その姿を巨人の素体となった若者の姿に変え、ヒュドラもまた抱えていた石像をダーラムに投げ渡し、細身で爬虫類の様な不気味さが際立つ男の姿になった。降り立った二人の許に、満面の笑みを浮かべたカミーラが駆け寄る。彼女は、ヒュドラを無視して素通りし、ティガの胸に飛び込んで抱きついたきた。

「お帰りなさい。ずっと待ってたんだから。あの巨人、ティガがやったの」

「ああ」

「さすがね。そうそう、見て見て。ティガがいない間に、神殿もここまですべきあつがてるのよ」

「ああ、そうだな」

「疲れているでしょ。神殿の奥で休むといいわ」

全く心がこもっていない生返事を繰り返し、ティガは神殿の奥にある旧都市の跡地に向かった。戦争や地殻変動などで荒れ果て、地下に陥没してしまった。その上に、ルルイエを彼らが建てるのは、自分たちが時代の覇者であることの証明であった。人類は滅びても、

やがて新たな生物が新しい世界になっていく。その世界を征服し、自由にすべてを操ろうと言う考えが彼らの脳裏にあるのも確かであるが、それだけではないのはいずれ明らかになる。

神殿の奥に姿を消したティガの姿を見届けたヒュドラは、唾を吐き捨て、忌々しい表情を浮かべながら神殿の柱に座りこんだ。

「まったく、見てられねえな。あんな気のない返事しか返せない奴に、どうしてそこまでぞつこんになれるかね」

「あなたは黙ってなさいよ。疑って自分が生き残ることしか考えられない臆病者のくせに」

「カミィラ、その辺にしとけよ。調子に乗りすぎだぜ。女だからと言つてやさしくするほど、俺はでかい器じゃないんだ。八つ裂きにするぜ」

「出来るならやってみなさい。出来るかどうかはあなたが一番知っているはずでしょ」

「ちつ。わかったよ。けどよ、あいつのあの愛想のなさは何とかならないものかね。話をするといライラするんだよ」

「それはあなただけ。私もダラムも何とも思っていないから。少ししたら、話があるから集まって。お楽しみがあるから」

カミィラはそういうと、海辺に向かった。暗い海に美しさはないだが、彼女はそこが一番好きだった。なぜかはわからないが、広い海を見ていると無意識の内に、心の中の激情が収まり調和されていくのだ。カミィラは胸元から作りかけの彫り物を取り出し、熱心にそれを削り、何かを作ろうと苦心していた。装飾品のように見えて、道具のように見える物を、カミィラは楽しそうに笑顔を浮かべなが

ら手を動かして作っていた。

「急がないと、ルルイエの完成に間に合わないかも。ティガ、喜んでくれるよね。新しい手作りのスパークレンス」

表の様子のことを全く考えず、ティガは地下に広がる廃墟を見つめていた。栄華を誇った文明が怪獣の進行で破壊され、その後に見られる光の巨人によつて救済を受けるも、巨人の力に酔った人間の手で再び混とんの時代を迎え、闇による破壊と墮落、そして巨人同士争いによる自滅、そんな人類の歴史の縮図がこの廃墟に詰まっている。この歴史は、ティガ地震が辿った歴史でもあった。ティガは、空っぽの心で自分の記憶を辿っていた。

巨人になると、年齢も常人とは変わってしまう。初めて巨人になったのもいつだったか、記憶が定かでは二あ。覚えているのは、自身の肉体を光に変える小型マシンを使つて、石像と一体になる事を始めたことだ。巨人は、かつて現われた光の巨人のイメージを具現化したもので、色々なタイプがあった。石像と融合する人間の間には相性が存在するらしく、彼もまた数体のタイプとの融合を繰り返した。そして、もっとも融合の相性が良かったのが、Type TIGAと呼ばれたモデルの石造だった。かつて、ティガと名づけられたか名乗ったかした光の巨人の姿を模した石造だった。この頃から、彼はティガを名乗る様になった。

ティガは巨人として、怪獣達を屠り、人々を守る役目についた。素体と石造の相性やレベルが高いのか、彼の力は図抜けていた。怪獣相手の戦いは全く苦戦することなく、いつもあっさり決着がついた。そんな戦いを繰り返す内、彼の心に「物足りない」と言う考えが生まれた。絶大な力を持つがゆえに弱い相手に力を発揮できない口惜しさ、勝利の達成感が慢性化することでのフラストレーション。彼にとつて戦いは、人を守ることを見失い、戦いそのものが目的となつていった。彼の心に闇の存在が手を伸ばした瞬間である。

やがて、兵器化した巨人たちの戦争が起こった。巨人同士の戦い

は、最初の内はティガの心にわずかな満足感をもたらした。しかし、それもすぐに飽きが来た。さらなる虚無感が彼を支配した。虚無感から逃れようと、さらに戦いにのめり込むティガの前にやがて敵はいなくなつた。残つたのは荒れ果てた大地と生命のない海、汚れきつた空気、そして3人の闇の巨人だつた。

ヒュドラは敵を欺き味方を疑うことで、戦場を翻弄し敵を自滅させとどめを刺しての上がってきた。ダラムは、巨大な剛力の行き場を破壊と殺戮に向け、彼の歩いた後には瓦礫と屍しか残らないと言われた。そして、カミーラは愛憎の戦士と呼ばれるほどの激情家で、憎しみの対象となつたあらゆる巨人や文明を徹底的に破壊する魔女であつた。しかし、ティガに対しては盲目的ともいえる愛情を示し、彼を独占しようとするその様子は、全く危険がない所か人間らしさが漂っていた。しかし、彼ら三人の存在は、昔のティガであれば恐ろしさや憤りを感じたであろうが、闇によつて虚無を植え付けられたティガは、三人とともに闇の巨人として世界を席卷し、この星を破滅で塗りつぶそうとした。

決して満たされる事のない虚無と言う苦しみにティガは生きていく。苦しみと言う感覚が失せるほど、長年彼は虚無に生きてきた。満たされる喜びを失い、満たされない口惜しさも失い、感情さえ無となり、生きている意味を半ば放棄しているような状態にある。

そんな空っぽの心で、自身の半生そのものであり、行く末を暗示しているかもしれない廃墟をティガは感情を動かすことなく見つめていた。

「ティガ、カミーラが呼んでる」

振り返ると、そこにはダラムがいつの間にか後ろに立っていた。人間の姿の彼は筋肉が隆々とした体を持ち、顔には無精髭を生やしており、如何にも好戦的な姿をしているが、戦いのない時の彼は朴訥として口数の少ない男である。寡黙で余計なことと言わない彼は馬が合い、ダラムも「マイフレンド」と言つて、ティガを理解

している。

「わかった。今行く」

そう言っ外に向かうティガに、珍しくダーラムが要件以外の事を話しかけてくる。口数の少ない彼にしてはなかなかないことだ。

「マイフレンド。お前、カミーラをどうしたい」

「意味がわからない」

「あいつ、お前に本当に夢中だ。だから、怖い。あいつのもう一つの顔、知っているはず」

「俺にどうしろと」

「俺には関わりはない。だが、お前に関わることだ。お前が始末をつける」

「あいつや、その行為が俺の心を満たしてくれるならな」

二人が神殿を出ると、会談にカミーラとヒュドラが待っていた。カミーラの手には古ぼけた紙が握られており、全員が揃うとその紙を広げて見せた。それは、かなり前に書かれた地図の形で、特殊な継続方法で作成された精度の高い物である。

「ねえ、これを神殿の奥で見つけたんだけど、意味がわかる」

「地図だろ。馬鹿にしてんのか」

「そういうことじゃなくて、ここに書かれている内容を見て気付くことはないのって言っているの、ヒュドラ」

「北に島がある」

「ダーラムが正解」

ルルイエで製作されたと思われる地図のかなり北の海に、小さな島が存在することが、この地図で示されている。まだ、この4人の中でその島を訪れたことのある者はいなかった。

「ほう、北の海にこんな島があったとは。でかい大陸にはよく巨人や怪獣狩りに行っていたが、こんなちっぽけな島は見たことがない」

「何かね、この島はまだ闇が進行していないって気がするの。何て言うかな、ささやく声がするって言うか」

「何だ、その根拠のない話は」

カミィラとヒュドラが言い争っているのよそに、ティガはその地図を食い入るように見つめていた。空虚な心ながらも、その目は何かに執着する様な目つきだった。黙って地図を眺めていたティガは、ゆっくりと声を発した。

「俺が、この北の海の島に行く」

「また、心を満たすための遊戯か、マイフレンド」

「少しは面白いことがあるかもしれない。それでいいか、カミィラ」

「ティガが行くって言うならいいわよ。決定ね」

「ちっ、これじゃ出来レースじゃねえか」

闇の巨人たちによる、地獄の遊戯のルールが決まった。ティガが

この北の島に行き、怪獣なり生き残った巨人の痕跡を持ちかえる。その数を賭けにしようと言うのだ。破壊や殺戮を何とも思わない彼ら、いや、命の値段が著しく暴落した破滅の手前にある世界だからこそかもしれない発想であった。

話が決定し、ティガは地図で島の位置を確かめると、錆ついた鉄器でできたスパークレンスと言う変身のための道具を掲げ、闇の巨人へと変身した。そしてルルイエを飛び立ち、北へ向かって飛び去った。

「さ、ティガが帰るまで、ルルイエの建築を急ぎましょう。ダーラム、工事はお願いね。あたしは、早くこれを作り終えないと」

カミールは、また海岸に行つて、ティガに渡そうと考えている手製のスパークレンスを製作の続きに取り掛かつて行つた。ヒュドラは、ティガが飛び去った空を見ながら、苦虫をつぶしたような顔で見つめている。

「あの野郎は、どうも腹の底が知れねえ。もっとも、俺は誰も信じちゃいないがな。どれ、」あいつがどういう戦いや行動をするか、見てみるか」

ヒュドラは変身すると、ティガに気がつかれないように別の進路から尾行を始めた。ヒュドラの行動を見ていたカミールは呆れたように溜息をついた。

「ほんとに器の小さい男。人を疑う癖に、人を裏切ることに無頓着なんだから。ティガとは全然違う」

北の防人

ティガは、音速を超えて北へと飛行している。眼下には生命の気配のない海、頭上には暗雲が立ち込め昼でも薄暗い空が広がり、その風景は虚無の心を持つ彼の心象風景そのものであった。地上で目につく物と言えば怪獣や、あちこちに自生し脳内麻薬をばらまき続けるギジェラ、瓦礫の片隅で細々と滅亡を待つ墮落した人類がちらほら目につく程度だ。殺風景な光景は、満たされない心を持つティガにとっては、余計にイライラさせる原因でもある。

「つまらん。こんな世の中、面白くもなともない。せめて、これからいく北の地には、面白いことや骨のある奴がいてくれないと、頭がおかしくなる」

何にも感情を動かされず、心が満たされない空虚で覆われていること自体、すでに彼の心は異常性に満ちているのだが、ティガにはその自覚はない。闇に魅せられ、魅入られるとはまさにこのことを言うのだろう。病んだ心を抱えながら、ティガは一気に赤道を超え北上を続ける。

出発前に見たカミラの地図によれば、北にある島は群島で、大小様々な島からなるらしい。巨人や怪獣達の戦いによって気候が激変し海水量が増した今は、ほとんどの大地が水没して、飛び石の様に島が点在し、そこに小さな国があるようだ。どうやらそこは闇の勢力には入っておらず、自立を謳う最後の国と言う話もあるらしい。いわゆる抵抗勢力であるが、それなら腕の立つ奴もいるだろうと言うのがティガの今のもくろみであった。抵抗勢力を潰すことより、刺激が欲しいだけでティガは旅に出たのだった。そんな思惑を抱えながら飛行していると、眼下には小さな島が連なって海上に顔を出している。場所としても、そろそろ目的地の勢力下にある島に入ってもいい頃だった。ティガは高度を下げ、地上の様子を見渡してい

た。

ティガは、突然軌道を変えて身を翻した。何故かはわからないが、考えるよりも、理由を見つけるよりも先に体が反応した。そのティガの脇をかすめるように、威力はそれほどではないが光の弾丸が通過していった。反射的に体を動かしていなければ、直撃して威力が低いと言っても墜落させられただろう。しかし、一息つく暇もなく追撃の攻撃が地上から放たれてくる。それを交わしながらティガは地上に向かって高度を下げていく。射撃の精度からいっても、相手はなかなかの腕のようだ。

「この攻撃が自分の居場所を俺に察知させるとわかっていての攻撃か。腕に覚えがあるようだな、面白い」

ティガは地上に向かって加速しながら降下し、敵の近くに着地した。その重量による衝撃で、地面が陥没し砂塵が突き上げられる。

そして土ぼこりの中に、ティガは相手の姿を見た。銀色の体に赤いプロテクターを装着し、体に黒い線を走らせているが、全身が黒いティガとは違いその色が一部である所に、彼が闇に抗う者であることを感じさせる外見であった。輝く青い目は、冷徹な心で物事を射抜くような鋭さを感じさせる。間違いなく、彼もまた光の巨人を模して生まれた巨人なのは確かである。巨人はじつとティガを見据え、冷静な口調で話しかけてきた。

「お前の噂は聞いている。ティガだな」

「そうだが、俺の名はお前にとって価値があるのか」

「ないな。お前が闇の巨人である事実、これまで重ねた所業、それだけあれば、お前を排除するのに十分だろう」

「面白い奴だ。これほど物事を単純に考え、そして本質を突く頭を持った奴がまだいたとはな。名を聞きたくなってきた」

「名は、アナータ。私には善も悪もない。ただ、己の使命を果たす覚悟のみがある。光にも闇にも属さない無我の存在」

無我の存在と言う言葉にティガは心の琴線が触れた様な気がした。アナータは我を持たない存在と言う。何をしても心を満たすことのない虚無の自分と何かが通じるかもしれない存在、直感的にティガは相手をそう捉えた。本当にいつ以来かわからない、心躍る何かの心の奥底から湧きあがってきた。しかし、ティガはそれが何なのかまだわからずにいた。今はただ、目の前にいる自分と同じ匂いのする相手と戦いたい一心だった。ティガは構えをとりながら相手を誘う。

「なぜかは知らないが、俺の心がワクワクしてきた。来いよ、アナータ。俺を排除したいんだろ」

「闇に心を奪われし狂戦士。その邪心、ここで散らして見せる。そして、聖地には決して通さん」

「言ってくれるね。散らせるものなら、散らせてみる」

ティガは、気分が高揚するに任せて相手に殴りかかる。アナータは重心を低くし、身をかわずともせず、拳を突き出した。互いの腕が交差し、相手の顔を拳が打ち抜く。二人の体を衝撃で後ろに吹き飛び、再び二人に間合いが生まれる。

「どうしてよけなかった」

「よければ隙が生まれる。その隙を逃す様な素人には思えなくて、試してみた。いい拳だ」

「試しただと。舐めた真似をするな」

激昂したティガが、アナータに襲いかかる。アナータは構えを取らず、自然な体の動きで攻撃をかわしていく。完全に相手の動きを見切っているからこそその技である。全く当たらない攻撃にいらつきを覚えたティガは、体を沈ませて低い位置から蹴りを繰り出した。さすがにこれ avoidance することができなかったアナータは空中に吹き飛ばされる。しかし、我を持たずすべてを流れに身を委ねる彼らしく、衝撃を利用して空中を飛びまわり、体に打ち込まれた力をほとんど受け流した。そして、上空から地上に向かって光弾を放つてくる。流れるような攻撃に、ティガは必死に身を翻すが次第に避け切れなくなり、体に数発着弾しまった。ダメージはそれほどではないが、ティガの心に及ぼした影響は大きい。虚無のティガの異名に似つかわしくない激しい焦燥感が心の中に湧き立ち、抑えきれなくなってきた。

「クソつたれが。ちょこまかと動き回りやがって、俺の一番嫌いなやり方だ」

ティガもまた空中に飛び上がり、空中戦に入る。音速を超えて飛びまわり、何度も接触して火花を散らす、致命傷を与えることは互いにできない。二人は、高度を上げて雲の中に入る。互いの姿が視界から消え、目の前は白と黒の闇に汚染された雲が広がっている。すると、いつの間に後ろをとったのか、アナータはティガの背後からつかみかかり、手足の自由を奪って捕獲してしまった。そして、二人の体を勢いよく降下させていく。

「我をなくせば、気配を消すことも容易。だが、虚無に怒りやいら立ちを覚えたお前の心は面白いほど読みやすい」

凄まじい勢いで二人は降下し、激しい衝撃とともにティガは大地に叩きつけられた。ティガから飛び離れて敵の様子を見守っている。濛々とまこき起こる砂煙の中、まだティガに動く気配はない。アナ

「タが気配を探ろうと一步踏み出した瞬間を狙って、ティガは手刀を相手の胸に差し込もうと不意打ちを仕掛けてきた。完全に虚をつかれた形になったアナータは、防御しきれないタイミングではなかった。仕留めた、そう思ったティガの視界に、予想していなかった横からの攻撃が襲いかかった。わき腹に鋭い痛みが走り、体が吹き飛ばされる衝撃が走った。痛みの素にティガが目移すと、そこには鋭い牙を顎に備えた怪獣が、その牙を深く食い込ませながらこちらを睨みつけていた。ティガは必死に蹴りを入れてようやく怪獣を引き放すと、間合いを広くとって相手の出方を疑う。怪獣の胸には巨人同様のカラータイマーが備わっており、アナータのそばでじつと指示を待つかのように座り込んでいる。

「お前の相棒か」

「そうだ。名はガーディー。我々は二人で一つの防人だ。お前は、私一人を持て余しているようだが、これで結果は見えつつあるな」

「どうかな。さっきは相当やばそうだったぞ。怪獣一匹増えたところで、俺の不利にはならない」

「我々の連携に勝てた者はいない。あるのは敗北のみだ」

言葉がいちいち気に入らず、心に怒りが満ちてきたティガは、数の上で不利な戦いを避けようとはせず、さらに前のめりになっていく。ガーディーは、真正面から来る敵に向かって牙をむき出しにして疾走する。ティガは、軽くガーディーをいなすとアナータに攻撃を仕掛けようとしたが、すでに相手は視界から消えている。いつの間にか空中に飛び上がったアナータは、見事な制度で蹴りを放ってきた。しかし、ティガも百戦錬磨の経験を誇る。とっさに両腕で防御を固め、相手の攻撃を凌ぎ切ると、相手の両足をつかみ力の限り振り回し放り投げた。アナータは大地に激突し、かなりのダメージ

を負った。さらに追撃を加えようとティガが走り出した時、態勢を立て直したガーディーが足に噛みついてきた。鋭い牙が足に食い込み、思わずティガは倒れ込んでしまった。ガーディーはさらにわき腹に攻撃の焦点を変え、さらに牙で体を切り裂いていく。これほどまでに戦意があり、猛々しく、賢く、主人に忠誠を使う怪獣をティガは知らない。その脅威はティガの心に、怒りとともに恐怖が芽生えかけた。こいつは、今までに会ったことのない、とてつもない脅威。自分を脅かし、放っておけば命にまで喰らいついてきかねない。ガーディーは、ティガの心に決定的な何かを植え付けた。

これ以上の傷は致命傷になりかねない、本能的に理解したティガはガーディーに蹴りを入れ、顔面に何発も手刀を入れた。やがて、ガーディーの額が割れ鮮血がほとばしり、痛みに耐えかねてガーディーは牙を話した。自由になったティガは、なぜか間合いを取らず、傷の痛みを無視してガーディーを殴り、蹴り続ける。その姿は、いつもの様に虚無の心を満たそうと遊戯に見ゆだねるのとは違い、自分にはないものを心に宿しているガーディーへの恐怖、怒り、嫉妬が混ざった感情的な攻撃である。悲鳴を上げるガーディーに容赦することなく拳を振り下ろすティガに、アナータが体当たりをしてきた。ガーディーを守る様に距離を作り、ティガを攻撃する。ガーディーにより重傷を負ったティガにとっては、アナータの攻撃は非常に苦しいものだった。的確に攻撃を加えられ、次第に追い詰められて勝機が薄くなっていく。アナータは勝利を確信し、最後の一手を加えようとする。

「これまでだ、ティガ。虚無の心に感情が入り込んだ時点で、闇の力が弱まったようだ。光と闇、善と悪、どちらにも属さない私には、そんなことはありえない。終わりだ」

「そうかい。殺す時は無駄口を言うもんじゃない」

ティガは、もう動けないかと思われた様子からは信じられない素

早い動きで相手の腕をとり、ねじり上げながら背中中に廻り込むと、腕にエネルギーを発生させ至近距離から、高速の弾丸・ランバルトグリームを発射した。背後をゼロ距離から撃ち抜かれたアナータは吹き飛ばされ、そのまま動けなくなった。エネルギー残量が乏しくなり、生命活動の危険域に達した彼のカラータイマーが激しく点滅を始めた。とどめを刺すべく、ティガは再びエネルギーを溜め、腕をし字に組み、ゼペリオンダークネスを発射した。タイミング、照準、エネルギー量ともに完璧だった。いや、はずだった。熱線の軌道上に何かが立ちはだかったのだ。ガーディーだ。主人、いや、相棒を守るために傷ついた体に鞭打ち、ティガの攻撃から自らが盾となって立ちはだかったのだ。ともにゼペリオンダークネスと食らって、無事にいられるはずがない。多くの怪獣や巨人をこれで仕留めてきたティガの最強の技である。ガーディーの皮膚は一部は肉ごと吹き飛ばされ、大部分は真っ黒に焼け焦げている。衝撃で牙が抜け落ち、額の傷からはまだ血が流れている。間違はなく瀕死の重傷。命は長くはもたないの是一目了然だ。しかし、そんな状態にあってもアナータを守ろうとその場を動かず、唸り声をあげてティガを威嚇する。次第に呼吸が荒くなり、苦しそうな声に変わっていくが、それでも相棒を守り抜くという意思がこもる目の光は、ティガの心を射抜き、その視線の前にティガの心は再び感じたことのない感情に支配されていた。呼吸が浅くなり、目の光も薄れていく。しかし、不動の態勢を保ち、鋭い目つきでティガをにらむ形相を保ったままガーディーは命を失い、肉体が石化していった。恐らく、アナータの相棒として選ばれ、巨人と同じ方法で生み出された怪獣だったのだろう。

「ガーディー、すまん。死にぞこないの私のために命を投げ出すとは。だが、お前の行為も虚しく、私の命もこれまでの様だ。だが、お前の死にざまに報いる最期を私も遂げよう」

慟哭の中、アナータは立ち上がり、持てるエネルギーすべてをか

けた攻撃を仕掛けてきた。巨大なエネルギーの塊が腕に収束し、ティガと左右対称の構えで熱線・ホーリーショットを放ってきた。ガーディーの壮絶な最期に心を奪われていたティガだが、アナータの攻撃にとっさに反応し、デラジウムバーブレスを発射した。どちらも負傷していたが、傷の深いアナータが押され、ティガと自分のエネルギーがまともに直撃した。爆発が起こり、倒れ込むアナータ。手応えを感じたティガは、完全な勝利を確信した。

しかし、アナータはまだ死んではいなかった。風前の灯火の命を燃やし、必死でガーディーの元に近寄ろうとしている。何度も倒れても、その都度起きあがって進み続け、ようやく友の許にたどり着き、亡骸を抱き寄せ、静かに語りかけた。

「長い間、ご苦労だったな。お前のような友を持てたことが、私の一番の幸福だ。役目は終えた。さあ、天へ向かおう」

その光景は、ティガには理解不能のものだった。強い絆で結ばれた仲間。命を預けあえる信頼。互いを命がけで守りあう勇氣。死してなお共にあるとする友情。闇に染まり、虚無の心に狂うティガには持ち得ないものを彼らは持ち、見せつけられた。これまで出会った中でも、いや、このような相手と会ったことがなかった彼にとって、アナータとガーディーは、あまりに鮮烈な記憶となった。

ティガは、いつもであれば仲間を倒した証として持ち帰るための石像の一部をとろうと手を伸ばしたが、それ以上のことはできなかった。初めて感じる心の中の何かが手を動かさないようにしていた。

「まあいい。中心地はここではないし、あいつは確か聖地という言葉葉を口を滑らせて話していた。本命は北にあるようだ」

ティガは、自分でも理解のできないもやもやを抱えながら、北への旅を再開した。そんなティガの行動を遙か上空、成層圏の高度から見下ろす者がいた。ヒュドラだ。ゲームを楽しみたく、また相

手を信用できない彼は、ティガが自分の目の届かないところでゲームをするのが気に入らなかった。それで、決して悟られない高度で監視していたのだが、いつもと違う様子のティガにヒュドラも気がついていった。

「あいつ、いつもなら石像に興味も持たずにあっさり破壊するくせに、こういう風の吹き回しだ。それにしても、腕のたつ奴がいたものだ。北に向かえばどんな奴がいるのか。何にしろ、奴を監視していたのは正解だな」

欺瞞の目は、遙か上空からあらゆるものを射抜くように、粘着質に見つめ続けていた。

ユザレの里

闇に覆われていく世界で、唯一残された人の街、ユザレの里。ここでは、代々特定の女系の血筋に当たる女子が巫女となり、ユザレの名を継承し、里の権威的な面での首長として納めてきた。巫女である以上、彼女たちには霊的な役目が負わされてきた。気候を読む術、天変地異の予知、国の未来、そして光との交信。光の巨人が降臨した時より、代々の巫女は光の巨人とコンタクトをとり、彼らの意思や、存在の本質を理解したことで、決してその力を誇示せず、人が生きるための力として利用してきた。その生き方が、闇に染まる世界から独立した流れで今日まで来ることができた。しかし、その結果は、ユザレの里は地上に残された最後の文明となってしまう。その街の中心にある議場では、この里の未来に関わる重大な議案について討論がなされていた。

「もはや、この星は死滅してしまった。まともに生きている生物は怪獣という有様。文明と言う文明は跡形もなく崩壊し、恐らく痕跡は残さないだろう」

「あれだけ世界中に広まり戦争を繰り広げた巨人も、あの闇の巨人によってほぼ壊滅です。いずれ、奴らがこの里に気付くのも時間の問題でしょう」

「問題は目に見えないところから来ている。それが問題だ。怪獣を生み出す源、ギジエラを放って人類を墮落させた存在、そして闇の巨人を背後から悟られずに裏で糸を引く者がいる。そうですね、ユザレ」

ユザレと呼ばれた女性は、ベールで覆われた顔を上げた。ベールの隙間からのぞく顔立ちは、20台と思われる若々しさを持ちなが

ら、年長者の様な威厳を保ち、性別を超えた美しさを輝かせている。誰でもその顔をまともに見れば、一瞬で心を奪われると同時に、浄化されてしまうような神々しさを備えた不思議な女性であった。ユザレは議事録を一読すると、落ち着きを払った声で話し始めた。

「光の巨人が空に帰る際に言い残した話が代々のユザレに伝えられています。光があれば闇がある。光である我々と対をなす存在はやがて訪れる。いや、もう訪れている。そして、滅亡の花を手にした人は闇を選んだ。闇は常にそこにいる。闇は滅びへ誘う。選択するのは人の意思。滅亡の闇、未来への光。選ぶのはあなた方。光の巨人たちは、去り際に闇の存在に言及しています。この星を覆った出来事や現象も、光と対をなす闇の存在によるものでしょう」

「闇の巨人もまた然り、と」

「いえ。これは私見ですが、彼らは人に過ぎません。人間性を失い闇に魅入られた人の心が闇の巨人として具現化したもの。闇の力を弄ぶれつきとした人間です。光の巨人が言い残した闇はもっと深い存在です。人の心に入り込み滅亡を願う概念は、まさに光の巨人と対をなすものです。私には、時々そのビジョンが見えます。暗黒の海の中にある門をこじ開け、世界に顔を出そうとする闇の邪神の存在が」

ユザレの言葉は、宗教的な信託にとどまらない。彼女の発言は、れっきとした政治の言葉であり、その言葉に導かれてこの里は栄えてきた。彼女は、科学もまた重要視する。科学も宗教も根は同じ、目指すところも同じであるという思想である。彼女の信託と広い見識は、滅びへの抵抗への象徴となり、多くの国から信奉された。そして、この星を守る警備団長と言う肩書きがいつの間にか与えられていた。

闇による滅びが近いという彼女の言葉は、事実として記録され、こ

の後の里の有様にダイレクトに影響してくる。その未来を占う議題が表に出始めてくる。

「方舟計画は順調ですが、問題があります。エネルギー源がもう枯渇しているんです。時の流れに抗うには膨大なエネルギーで人々を包み込まなければなりません。巨人のエネルギーを使ってぎりぎり間に合うかどうか。また、船出の時は無防備になります。そこを襲撃されれば方舟は沈没します」

「そうですか。では、揺り籠の方は」

揺り籠と言う言葉に、議場にいた者全員に緊張感が走った。誰も触れたがらない、触れてはならない問題だとその場にいたものが考えていたからだ。しかし、ユザレ自らその話題に触れた以上応えなければならぬ。

「こちらは問題ありません。技術的にも確実性、安全性は保障できる状態です」

「それだけ聞ければ結構です。ハッ。しばし、お待ちを」

ユザレの顔色が急に変わり、彼女は目を閉じて瞑想状態に入った。議会中にこのようなことになることは滅多になく、全員彼女に注目し凝視している。ユザレはゆっくりと目を開け、口を開いた。

「アナータとガーディーの命の灯が消えました」

「なんですと。彼ら揃って倒されたということは、闇の巨人が来たのですね」

「はい。一人がこちらに近づいています。もうすでに結界に接触する所です」

議場は騒然となった。予想していたこととはいえ、彼らの想定より早過ぎる事態だった。そんな中、一番年長でユザレの側近とも言える男性が一喝した。

「うるたえるな。まずは落ち着け。いずれ来るとわかっていたことだ。とにかく相手は一人なら、何とかなるかもしれん。サトウとドウアンに対処させろ。しかし、命を粗末にするなと伝える。為すべきことは、まだ先にある」

議会は緊急解散し、それぞれの持ち場についていく。ユザレもまた、安全な場所へと席を移すが、彼女が去り際に漏らした呟きは、誰の耳にも入ることはなかった。

「闇の巨人なのに、どこかが違う。いえ、彼は変わり始めている。あなたなの、私が待っていた人は」

ティガは、とうとうユザレの里の近くに到達していた。まだ闇が到達していない里とはどんなところなのか、虚無の心と陰惨なルイエしか居場所のない彼にとっては、興味がわいても仕方がなかった。虚無を満たすもの、そこに彼は強い欲求を抱き始めていた。自分を満たしてくれる存在を目指して、ティガはさらに加速させた。

その時だった。彼の体に電撃が走り、何か強い力で弾き飛ばされてしまった。どうやら、結界が張られているらしい。

「気の利いた戸締まりだな。ただ居住区を守るためには頑丈すぎる。やはり何かがある」

ティガは、何度も結界を破ろうとするが、生半可な防御ではなく、どうしても先に進むことができない。

「力任せが無理なら、何か利用できないか」

押し黙って、ティガは手段を考えた。なんとしてでも先に進み

たい、この地にあるものをみたい、むくむくと虚無の心を刺激するものがあふれ出る。すると、考え込むティガの耳に、何かが飛び込んできた。ティガは、その音に気がつき、そのもとを探りにいった。しばらく飛行すると、音の正体がわかった。いつのまに姿を現したのか、怪獣が一頭徘徊していた。いや、結界を目指している。

そう思えるほど、進行方向が結界を、その先の里をさしている。ティガにはその怪獣の外見に見覚えがあった。

「ゴルドラスか。一体何をしている」

闇の巨人とともに、世界を滅ぼした怪獣たち。光の巨人の降臨前から人類を脅かしてきた闇の眷属たち。彼らには、ある程度種類分けができ、ゴルドラスもその一種であった。

ティガにとっては、怪獣などとるに足らない存在であった。邪魔なら消す、それくらい軽い存在である。いつものティガなら、相手にしないか、抹殺するかであったが、今の彼には別の考えがあった。

「確かあいつの能力は……。利用できるな」

ティガは息を潜めてゴルドラスの様子を見張っていた。彼のある行動を待っているのだ。前進を続けるゴルドラスは、やがてティガ同様結果に触れた。彼はじつと結界のある場所を睨みつけていると、やがて彼のまわりに不思議な場が発生し、体が包み込まれていく。それがゴルドラスの能力であった。この怪獣は、不思議な場を発生させ、時間や空間の制約をなくし、時を渡ることも離れた道のりを一瞬で踏破することもできる。今も、この場を発生させることで決壊を突破するつもりなのだ。そして現実には、能力は決壊を歪ませ、ゴルドラスの体が結界の内側に侵入していく。

ティガはこの時を待っていた。素早く降下するとゴルドラスが発生させた場に飛び込み、自分もまた決壊の内側に入り込む事に成功した。

結界の内側は外と違い、緑が豊かで空気が澄んだ荒廃する前のこの星の姿を保っていた。結界は上空にも伸びているらしく、暗雲などは全くなく青空と白い雲が浮かんでいる。そんな普通の環境など、忘却の彼方に消え去っていたティガは、その景色に息を飲み、しばし呆然としてしまった。

「これが、同じ星の環境なのか」

驚き、我を忘れそうになったティガを、ゴルドラスの鳴き声が現実を引き戻す。自分の能力を利用して行動に介入した物に、激しい怒りを見せている。我を取り戻したティガは、この怪獣と戦うしかないなと考えた。

「まったく、ギヤースカうるさい奴だ。この景色を楽しむゆとりはないのか」

思わず口に出た言葉であったが、虚無のティガから発する言葉にしては奇妙な言葉だった。虚無の彼が他の事に心を奪われるはずがないのだ。アナータとガーディがティガの心に与えた何かは、確実に彼の中で気がつかないまま変化をもたらし始めていた。

パワーはあるが動きののろいゴルドラスを、軽快な動きで翻弄する。一発は軽くても手数を増やして相手のスタミナを削っていく戦法の最適の選択で、闇雲に動くゴルドラスはさらにスタミナを消耗し息が荒くなっていく。

「どうした。逃げるなら、今の内だ。気が変わらないうちに決断しろ」

ティガの気まぐれな提案に、ゴルドラスは怒りをむき出しにして応える。背を向けるくらいなら前進して散る歩がましだと言わんばかりだ。

「やはり怪獣の知能などこんなものか。じゃあ、望み通りにしてやる。恨むなよ、それこそお門違いだ」

ティガは、正面からゼペリオンダークネスを発射し、ゴルドラスは塵一つなく消滅してしまった。ほぼゼロ距離からの着弾では仕方ないだろう。邪魔者を排除し、いよいよ里の奥深くへ歩を進めようとした時、何かが接近してくる音が聞こえた。その気配は、ティガに緊張をもたらし、素早い動きで何者かに向けて正対した。

待ち受けるティガに向かって飛来してくる何物かは、高速で地上に降下し、着陸の瞬間、大地が揺れ、土ぼこりが舞い上がった。次第に収まる誇りの中に、ティガは二人の巨人の姿を見た。一人は全身が深紅の色に包まれ、巨大なプロテクターを胸に備えた巨人。もう一人は、銀の体に青い線が鮮やかに走る青の巨人である。対照的な二人は、ゆっくりとティガに近づき、視線を決して外そうとしない。ティガは、この二人がただものではない事を知った上で話しかけた。

「二人も出迎えが来るとは。俺は大事な客と思われているらしいな」

ティガの皮肉に、赤い巨人が感情を押し殺して応えてくる。

「ああ、重要視されている。招かれざる客としてな」

「そうか」

「兄者、無駄口はこいつに隙を与えるだけだ。務めを果たそう」

「そうだな。闇の巨人よ、今からお前を排除する」

「出来るなら」

三人の巨人は一瞬で緊張を破り、空を震えさせ大地を揺るがす激しい戦いが始まった。

二人が出会うとき

ティガの前に立ちはだかった二人の巨人、赤い巨人のサトウと青い巨人ドウアンは、それぞれの能力を生かしながら、連携をとる。力と格闘術にすぐれるサトウはティガと接近戦に持ち込み、互角の戦いを演じる。さすがにユザレの里の最終防衛ラインを任せられるだけのことはあり、ティガのこれまでの相手とは一味も二味も違う。何より、守るべき里が近くにあることで、一層彼に強さを与えている。

二人の戦いを見守っていた青い戦士のドウアンは、精神を統一し不思議な場を形成すると、自分達三人がいる空間を不思議なバリアーで覆い始めた。広大な空間が半透明の膜で覆われ、一種の闘技場が形成された。

サトウの巨人な足から繰り出された蹴りがティガの腹部に命中し、吹き飛ばされるその体はドウアンによって形成された膜に衝突した。その瞬間、ティガの体を電撃が貫き、二重の苦しみが彼を襲った。

「くっ。何だ、この結界は」

不覚にも戦いに夢中で、いや、全く余裕がなくドウアンの行動に気がつかなかったのだ。いつの間にか、相手の懐深く入りすぎたようだ。

「ここは、僕の作った亜空間。さしずめ牢獄と言うこと。そして、君は囚人、僕と兄者が看守。この関係は絶対、勝負あったね」

「ここまでやるとは。不思議と面白くなってきた。これほど歯ごたえのある奴が生きていて、続けざまに会えるとは」

ティガは体の痛みを無視して、まずこしやかな真似をしたドウア

ンに立ちうかう。彼は、馬力はないが特殊能力とスピードに秀でていて、稲妻の様なスピードでティガを翻弄し、火炎や電撃で距離を保ちながら着実にダメージを与える。その動きに気を取られると、サトウの鋼の様な肉体から繰り出される技に捕まり、大地に叩きつけられる。予想以上にはるかに強い里の巨人たちに、ティガの肉体は限界を迎え始める。この亜空間は、彼らに力を与えても、ティガにとっては手枷足枷と言う戒めにしかない。万全ならまだしも、アナータとガーディーに負わせられた負傷がここで悪化し、ティガの戦闘力を奪っていた。倒れ込むも、体を半分ほど起こすので精いっぱい状況だ。サトウとデウアンは、勝負所を逃しはせず二人で並び立つと、互いの腕を交差させ、能力を複合させた光線を放ってきた。ティガはよけようとしたが、負傷と痛みで体を動かせず真正面から光線を食らい、そのまま結界に叩きつけられ、さらに結界からはじかれ里の上空に吹き飛ばされていった。二人も、自分達の力を把握していなかったわけではない。だが、ティガの耐久力を見くびっていた部分はあった。

「仕留めた、か」

「いや、兄者。あれだけ派手に技を食らっていながら、その割に手ごたえが小さい。逃げられたかもしれない」

「まずいな。手負いとは言え、奴は闇の巨人だ。里に入られると面倒だ。捕らえるなり、処分なりしないと」

「船出を控えている時期だ。急いで奴を探し出そう」

二人はいったん別れ、それぞれティガの行方を捜しに行った。彼らにはまだ大きな役目が残っているが、闇の巨人の存在は大きな障害となる。どちらも、焦りを感じていた。

議会の突然の解散により、ユザレは安全な場所に避難させられていた。そこは、非難場所であるとともに、巫女としてのユザレの収まるべき場所であった。地下に建設されたドーム状の建物は祈りを捧げ、万物の声を聞く祈りの場である。そして、祈りの場の外には、地球に残された最後の緑の森が広がり、澄み切った川が流れており、政治の場で疲れ切った彼女の心身を癒し、再び万物の声を聞くユザレの巫女の本来の姿に戻してくれる場所でもある。

この里も最後の決断の時が迫られている。そして、その決断を下し、民を従わせるのは自分だと彼女はわかつてはいた。恐らく、民も自分の意思に従うだろう。しかし、何の疑いもなく巫女としての自分の姿に導かれ、政治的な決断を課せられる民の事を思うと、やはりこれからの決断が怖くもあった。しかし、自分が恐怖を抱けば、皆は恐慌に陥る。結局、巫女としても政治家としても、自分は毅然としていることを求められ、本当の声は発せられないのだ。

一人になってそんなことを考えていたユザレは、疲れ切った心を森の中に委ねようと、祈りの場の外に出た。外に出ればすぐに川が流れ、ひんやりとした心地よい空気が流れている。日差しも程よく木陰で遮られ、優しい明るさに包まれる。森のざわめきは、議論の場で酷使された耳を癒し、その緑は過去な現実を直視しなければならぬ目を静かな世界に誘ってくれる。ここが彼女にとって、世界で唯一すべてから解放され、穏やかな気持ちになれる場所であった。ここにいれば、孤独であることも忘れられる。ユザレは岩に腰掛け、すべてを忘れて自然に身をゆだねていた。

どれくらい、何も考えずに森の空気に身をゆだねていただろう。どれだけの時間が過ぎたのだろう。解放された心に、森とは違う違和感のある物が入り込んできた事を、彼女の感覚はとっさに捉えた。何だろう、普段の彼女の生活にはほとんど感じることもない感覚。それが、川上から運ばれてくる。

「これは、血の臭い」

ユザレははつとその異物感の正体を察した。普段の彼女であれば、誰かを呼んで調査させるのであるが、何かがそれを押しとどめ、彼女をその場にじつとさせていた。長い間、予感していたもの、待っていたものが来るのかもしれない。巫女として、正体がわからないもののずつと心を捉えて離さなかった一つのお告げ、彼女の心を捉えて離さなかった何かが現われるような思いが、彼女の頭の中で渦巻いていた。しばらく川を見守っていると、人間が一人川から流されていった。全身にひどい傷を負い、傷口の流血がまだ固まっていないう。それはここまで吹き飛ばされたティガだった。人間体に戻り、一命を取り留めはしたものの瀕死の状態である。ユザレは、刹那の感情に任せて川に足を踏み入れ、次の瞬間にはティガを抱きとめて岸に引きずりあげていた。

ティガは暗闇の中で意識を取り戻した。最初に彼が感じたのは体中の激痛だった。何で体が痛いのか、一瞬わけがわからなかったが、二人の巨人との戦い、アナータとガーディとの死闘を思い出した。「俺は生きている」

サトウーとドウアンの攻撃で、ティガは死ぬのを覚悟していた。死を覚悟するのは初めてだった。いや、死の恐怖をどこかに置き忘れていた。長い間の戦いの日々で、心が麻痺し、いつの間にか虚無の戦士と言われるほど心が壊れていたのかもしれない。死を恐怖する、その事が彼の心に大きなうねりを巻き起こしていた。

次に感じたのは、悪寒であった。体が冷えきり体の震えが止まらなかった。温かいもの、火か何かが欲しい、そう思った時、自分が温かい布団に包まれている事に気がついた。それだけではない、自分が横たわる近くで火が静かに燃えて、体を温めてくれている。自分がどこにいるか気になり、目を少しずつ開けると、強い光が目

飛び込み、一瞬肝を冷やした。闇に心を犯された彼にとって、光は潜在的に恐怖を覚えるものだった。しかし、妙なことに光に次第に自分が慣れていく事に気がついた。本当に不思議だった。ティガは、どうも自分は自分ではない様な気がしてならなかった。

どこかで誰かが自分のいる場所に入ってきた気がする。自分の置かれた状況がわからない以上、少し探ってみようと思い、彼は目を閉じてまだ眠っているふりをすることにした。人の気配は一人で、ティガのそばに寄ってくると、薪をくべて火を起こして、部屋全体を暖めようとしている。そして、彼のそばに座り、こちらを見つめるような視線を感じた。タヌキ寝入りを決め込んで着る彼にとつては非常に相手の視線が気になるので具合が悪い。そう思っている彼の心を見透かしたのか、

「目を覚ましているのはわかっていますよ。どうぞ、目を開けて下さい。危害を加える気もありませんし、そんな力もありませんから」

と、女の声がした。彼のそばにいたのはユザレだった。目を開けたティガの目には、若く銀色の髪が特徴的な彼女の姿が映り、度肝を抜かれた。自分が女に救われたことも彼にとつては驚きだったが、それ以上に闇の戦士である彼がこの里の人間に救われるのは妙だと考えたのだ。

「何故助けた。それとも、俺は捕虜か」

ティガの疑問は当然だ。この里の結界を破り、戦士と戦ったのだ。戦いに敗れた以上、捕虜になるか、殺されるが常道だ。何故、こうやって助けられ、手当てまで受けられるのか道理が通らない。そんな疑いの目を向けるティガにユザレは、少しため息をつきながらも口元に、笑みを浮かべながら語りかけた。

「さあ、どうしてでしょう。いつもの私なら、誰かを呼ぶのでしょうが、なぜかあなたが川の上流から流れてきた時、人を呼ぶのではなく先ず助けたいと、すぐに助けなければならなかったからで

す。理由になりませんね。本当にどうしてでしょう」

巫女が闇の戦士に微笑みかける。他の物が見たら卒倒しかねない光景であったが、ユザレはそういうことは構うことなく、笑みを浮かべてティガを見つめていた。自分に笑みを浮かべる女などいるわけがない。カミィラの様な一方的な激情家は別にして、こんな普通の世界に暮らす女が闇の存在である自分に笑顔を見せるなど、彼には信じられないのだ。

「からかうな。見返りも無しに俺を助ける奴がいない。本心を言え」

「困りましたね。嘘は言ってはいないのですが……。わかりました。では、助けた見返りを求めましょう。それなら納得していただけますか」

「何だ、言ってみろ」

「アナータとガーディーの最期を教えてください」

ユザレは落ち着いた口調で言った。表情は少し固くなっているが穏やかな表情だった。ティガにとっては、他人の死に様などいとも簡単に笑いながら話せるはずだった。だが、言葉が出てこなかった。あの時の光景を思い出すと、急に胸が痛くなった。自分を睨みつけながら死んだガーディー、友の行為に応えんと最後の力を振り絞って自分と戦うアナータ。何故か、言葉が出てこない。彼らの目を思い出すと、何故感動など捨て去った心が熱くなってくる。体が小刻みに震え始め、何が何だかわからない気持ちになって、自分を驚掴みにする。それでも、憐みを受けたくない意地で、交換条件である彼らの死をユザレに伝えたが、彼の声はどこか力がなかった。ティガの言葉を、静かに最後まで聞き終えたユザレは、

「そうですか……。彼ららしい最期です。彼らは、強い絆で結ばれ

ていました。それが、力の源となり、彼らに南の海の守護を任せてきました。友を守るために命をかけて身を呈する者、その思いを受け止め無駄にすまいと限界を超えて戦う者。それが人の領域に生き、光を目指す者の姿です」

「人として生き、光を目指す……」

「闇の領分に生きるあなたには未知のものだったのでしょうか。その未知の領域に触れたあなたの心は、彼らの魂に恐れをなし、同時に理解しようとした……」

「俺が、光を理解しただと……」

ティガは信じられないし、怒りを覚えた。体がいつも通りなら、この女に首を締めあげるところだった。だが、今のティガは自分でも否定しようない変化が起きていた。怒りの矛先が自分なのだ。りか氏と指摘するユザレではなく、理解しつつある自分を責め怒っているのだ。彼は、その変化をわかっているようでいて、気がついていないのだ。

「あるいは、理解しようとする自分に気がつかないか、認めたくないのか。あなたは変わっていますね」

「馬鹿にしているのか」

「いいえ。むしろあなたの様な人が見てみたかった。闇を知り、光の本質に近づこうとする、新しい人の形を持つ人を」

ユザレはそつとティガの顔に触れようとする。彼は、狼の様な視線で彼女の手に今にも噛みつかんとするような表情を浮かべる。しかし、ユザレはティガを恐れず手を伸ばす。ティガは、怖かった。

自分を恐れない者、何も求めない者、疑わない者、無償の慈愛を注げる者、そんな未知が怖かった。だが、ユザレの目は一点の曇りもなく、その目を見ている内に自分の知らないものを触れたいという気持ちがいっつのまにか心を支配していた。

ユザレの手は暖かった。ティガの顔は冷たかった。それは、体が冷えているなどの問題ではない。光を見つめる者、闇に堕ちた者の差である。ユザレの温もりは、ティガに初めて安らぎを与えたのだ。ティガは、ユザレの祈りの場で3日を過ごした。神聖な場であるはずなのだが、ユザレは全く構おうとせず、傷が癒えるまでそこで休ませた。動けるようになると、森を案内しこの里は、星に残った唯一の緑が残った場所だと教えた。彼女がいない間、ティガはその森で過ごすことが多かった。機械で再生されたのではない、天然の緑や生き物たち。もうそんなものは記憶になかったし、思いを馳せることもなかった。その森の中で、ティガは安らぎと言うものを無意識に感じ、次第にそこに浸ることに抵抗がなくなった。戦いは破壊に明け暮れた生活は、彼の心を麻痺させ、何にも関心を持たず、感じず、虚無に彼を到達させた。仲間を信用せず、友情も感じず、激情に向き合わず、ひたすら自分だけの無の世界に生きてきた彼にとって、この里の巨人たちの戦い、ユザレとの出会い、そしてこの星の生命の息吹は、彼の心に何かを与え、呼び覚まそうとしていた。ティガは、大木の株に寄りかかりながら座りこみ、ボーっと空を眺めていた。

「俺は何をしてるんだか。第一、何しにここへ来たんだ」

自己嫌悪に陥りながらも、なぜかそれでもいいという投げやりな気持ちになっていた。短期間のうちに彼が経験したことは、それだけ変化を促していたのだ。虚無と言う彼の心だからこそ、様々な感情や心、行為、考えが染み込んでいったのだ。

森の中は気持ちよく、ついうとうとと眠りそうになった。その時、ユザレの声が聞こえてきた。しかし、いつもと違いどこか怒気を含

んでいる。何かかと思い、ティガは祈りの場のそばまで帰っていた。そこには、二人の男がユザレの制止を振り切り、祈りの場を抜けて川岸まで踏み込んできた。ティガは、巨人の特別な感覚で、彼らが里の入口で戦ったサトウとドウアンの兄弟だと察した。彼らはティガの姿を確認すると、ユザレの前に膝まづき非礼を詫びている。「ユザレ様、申し訳ありません。非礼は許されぬ物と覚悟はいたしております。ですが、こ奴を逃すわけにはいかぬのです」

「兄者の言う通りです。我々がここまで足を踏み込むことは許しが必要ならば出来ぬ事。ですが、こればかりは見過ごせませぬ。あなたの御慈悲の心は重々承知しております故、こ奴を助けたあなたの行為は咎めることはできません。ですが、里の今の状況はそれを許してはくれません。今は、闇の巨人も怪獣も通すことはできないのです」

「弟の言う通り。こ奴は闇の巨人の一人で『虚無のティガ』と言われる男。己の心を満たすため、満たされたいがために非道の数々を重ねてきた者。里にいてはならぬのです。こればかりは、あなた様の声は聞かせぬ。お許しを」

二人は、ティガに向き直るとブレスレットを使って巨人の姿となり、強引に彼をわしづかみにしようとした。目の前の敵にティガは闘争心を刺激され、鉄器のスパークレンスを掲げて巨人の姿になった。スパークレンスは、ティガの回復したのを見て、彼が力をなくして不安にならないように、ユザレが彼を信じて返していたものだった。彼は、それを使ってしまったのだ。闘争心に我を忘れた彼は、彼女の思いを裏切ってしまったのだ。

三人の巨人は、空中に舞い上がり猛然と戦い始めた。手負いの状態だった初戦とは違い、万全ならティガは二人と互角に戦えるはずである。序盤は、やはりティガの猛攻に兄弟達は圧倒されていた。

敗北すら覚悟させるものだった。しかし、時間が経過するに従って形勢は狂っていく。

変化に気がついたのはティガの方が先だった。次第に体が重くなり、技の切れやスピードがなくなっていく。攻撃の一つ一つが軽くなり、相手に決定打を与えられなくなった。兄弟達もティガの変化に気がつき、形勢を逆転させていく。ドウアンが稲妻でティガを撃ち抜いて動きを止め、サトウが重い攻撃をティガに打ち込んでいく。危険を感じたティガは、隙をついて上方をとり、渾身の力でゼペリオンダークネスを発射した。二人の兄弟も、合体光線を放ち対抗する。ティガは必死に力を注ぎ、押し返していく。兄弟も、打ちこみはするが熱線の威力はティガの方が熱量が高いうえ勢いがある。兄弟は必死に押し返そうとするも力が出し切れず、次第に高度を失い、大地に叩きつけられ、熱線が森を焼き払った。

爆風が吹きあがり、埃が舞う中、ティガは焦土に横たわる兄弟を見下ろした。しかし、ダメージも大きく、彼も着陸し、疲労困憊の様子で膝をついた。これだけの強敵相手に関わらず、勝った気がしない。いつもの虚無かと思っただが、どうも違う。何かが心にひかかり、その正体がわからない。逡巡する彼の耳にユザレの声が響く。だが、いつもの彼女の声ではなかった。

「ティガ、あなたは何と言う事を……。自分のしたことを本当にわかってるのですか」

ユザレの声は怒りを悲しみに見ていた。ティガは恐る恐る彼女の姿を探し、森にたたずむユザレを見放した。自分に対する怒りが浮かぶ瞳、その瞳から流れる涙が美しく優しかった顔を濡らし、安らぎを与える言葉が語られた口からは、ティガの行為を非難する言葉が浴びせられる。

「御覧なさい、この焼けただれた森を。干上がった川を。戦いに呑みこまれた結果がこれです。どうして、どうしてこんなことをしたのです。あなたは命の営みを、美しさを、優しさを感じたのではな

かったのですか。わかってくれると信じたから、力を返したのに」

ティガはその大地を見た。炭化した木々、焼け死んだ動物、水が蒸発しきった川。すべてが、己の手で為されたのだ。その行為の結果が沈黙のまま、ティガの目の中に飛び込んでくる。次第に、ティガの手足、やがて全身が震えだした。震える手でそつと土を救うが、焼けただれた大地は風に飛ばされていく。彼は、頭を抱えてもだえながら苦しみ、己の所業の意味を悟った。

「ウオオオオオオ」

天を割るような凄まじい叫び声が響き渡り、己の行為とそこに自分の姿を晒すことを恥じるように、ティガはその場を飛び立ち、超音速で結界を突き破るとユザレの里を飛び去っていった。

サトウーとドウアンは、傷ついた体を起こし人間の姿に戻った。

間合いを見誤り、森から至近距離で熱線のうち合いに持ち込まれた事を深く悔んでいた。

「ドウアン、この惨状は奴だけの所業ではない。我々の油断が招いたものでもある」

「わかっています。しかし、恐ろしい力だ。これが闇の力なのですね」

「ん、いや違う。お前はわからぬのか、奴の拳が以前と違っている事を」

「どういうことです」

「拳で奴の体に触れねばわからぬ事だ。とにかくユザレ様を安全な場所に連れて行こう」

兄弟は、体の痛みを耐えながらユザレの元に駆け寄った。ユザレはその場に泣き伏せていた。その姿を見て無事な事を確認すると同時に、兄弟はあと少し熱線の撃ちあいがずれていれば、大切な巫女を消滅させていたかもしれないと思い、背筋が冷たくなる思いであった。彼らはユザレの許に膝まづき、危険にさらした非礼を詫びる。「ユザレ様、申し訳ありません。危険にさらしてしまった上、貴重な森林を焼野原にしてしまったこの非礼と不手際、どのような罰で儲ける覚悟であります」

「兄に同じく、このような危険にさらした事への罰は、どんなことでも受けます。しかし、まずはユザレ様を安全な場所へお連れ致します。その後の御処遇は、兄弟二人でお待ちします」

頭を下げる兄弟の謝罪に、ユザレは涙を拭きながら冷静さを取り戻し、穏やかな口調で語りかける。

「頭を上げて下さい。あなた達の役割、そしてその行為と私は、このユザレが誰よりもわかっております。森に生きる生命にはかわいそうな事をしました。この世界で、必死に生き延びてきた命が一瞬で消えてしまう。恐ろしいことです」

「闇の巨人とは恐ろしいものです」

「ドウアン、それは違います。恐ろしいのは力に呑みこまれ、己を見失う人の心の弱さです」

「未熟な意見を申し、失礼いたしました。巨人の力は兵器そのもの、理性を奪いかねない。それは我々にも言えること、肝に銘じます」

「わかっていただければいいのです。それに、サトウー、あなたは何かを感じた様ですね」

「お見通しでしたか。恐れ入ります。あの者の拳、以前は邪な心に満ちていました。しかし、先程の拳は迷いの拳、虚無のティガと呼ばれる者の拳ではありません。どこに心が流れるかわからない危うさはありますが」

「そうですね、あなたにもわかりましたか」

「ですが、彼が我々の側につくとは考えられませぬ。彼の所業、そして力はいまだ闇の物。この里の目指すものとは相いれませぬ」

「わかっています、わかっていますが……。ティガ、あなたに訪れた変化を恐れないで。あなたが感じたものを忘れないで。自分の行為にあんなにも慟哭する姿を、泣き叫ぶ心を忘れることができない。私は、私は、何故かはわからないけれど、もう一度あなたを信じた
い」

修羅

巨大な岩が足でも生えているかのように動き回り、跳ね上がる。

ルルイエ神殿はもう完成間近となっていた。ダーラムは自身の剛力を用いて、巨大な岩を運び入れては、粉碎したり削るなどして神殿の壁や柱に作り替えていく。しかし、彼の作り出すものはすべて作りが荒く、歪さが漂い、神殿の外観も神が宿る場と言うより、どこか醜悪で邪悪さを感じるものとなっていた。寡黙な彼は、疲労を口にすることなく、一人で黙々と作業を続けていた。

落成間近の神殿の階段には、カミーラが腰かけながら自分の手元を見つめ、一心不乱に手を動かしている。ティガに送るためにスパークレンスは最後の仕上げを残すのみで、黒金のような質感が漂っている。それを磨くカミーラ実に楽しそうで、笑顔に満ちている。

何故、彼女は自分を振り返らないティガをここまで思えるのか。それは、ティガを愛する気持ちより、いつの間にか自分が愛されたい思いが強くなり、結果的に彼を振り向かせることが目的と化しているのだ。自分が愛する気持ちより自分が愛されたい思いが勝っている。一途なように見えて、そこには破綻が紙一重に存在する。そして、彼女の二面性である愛憎の激情が、彼女自身を盲目的に追い込み、自覚を持てない激しい思いに駆り立てているのだ。

「ティガ、そろそろ帰ってくるかな」

危険すぎるほど純粋な思いで、カミーラは北の空を見つめていた。すると、彼女の目に、ルルイエに向かって飛来してくる物体が目に見え始めた。音速で飛行する者の正体を、彼女は瞬時に察知した。「ティガだわ。やっと帰って来た」

カミーラは、黒いスパークレンスをティガに見つからないように服の裏にしまいこみ、階段を駆け下りていった。彼の帰りをどれだ

け喜んでいいのかは、笑みが絶えない表情や、あわてるあまり足がもつれそうになる行動からでも容易にわかるほどだ。ダーラムも、カミーラの様子が目に入り、ティガの帰還に気がついた。北に向かつて、ティガの着陸を待ち受けている。

しかし、ティガの様子がおかしい。陸地が近づいているのに一向にスピードを落とす気配がない。しかも、高度を落とすのが速く、海面に体を叩きつけてしまい、体のはじかれる様にルルイエに打ち上がった。痛みのせいなのか、倒れ込んだまましばらく体が動かないので、カミーラもダーラムも声を失ってしまった。やがて、ティガはゆつくりと顔を上げたが、視線が定まっておらず、どこを見ているのかわからない。しばらくボーっと何処かを眺めていたかと思うと、いきなり絶叫を上げ拳を何度も何度も叩きつける。まるで正気を失っており、冷静さを失っている。ダーラムは、力づくで押さえつけようとするが、それすら振り払うほどの暴れ方だった。

「マイフレンド、一体どうした」

ダーラムの声は全く耳に入っていない様子で、ティガの錯乱した様子は続いている。虚無のティガと呼ばれた面影はそこにはなかった。再び抑えかかろうとするダーラムに、突然上空から声が響いた。「よしな、ダーラム。こいつはどうも、妙な事を吹き込まれたかして、気が触れたようだ」

「ヒュドラ、お前も戻ったか」

上空からは、ティガを追い、そして監視していたヒュドラが、時同じくしてルルイエに到着し、今頭上から降下してきた。仲間を追っても疑惑を拭えない彼は、ユザレの里への遠征を敢行したティガを追い、その行動を見下ろしていたのだ。ヒュドラの口から、ティガの詳細が仲間に伝えられる。

「こいつ、どうかしてるぜ。北の国の門番らしい野郎と怪獣と戦っ

て、やっと勝ったところまではいいでしょう。だが、その後はなんだ。敵に感化されたか、石像も破壊せずそのままにしておきた。決めたよな、石像はこのルルイエの人柱にしちまって、二度と生き返らないようにするって。あの真似はなんだ、おい」

「……」

「おう、ティガ。てめえがだんまりを決め込んでも、俺は喋るからな。なあ、カミィラ、ダーラム。ここにいる闇の巨人最強と言われるこの男は、結界に囲まれた敵の陣地に入り込んで何日そこにいたと思う。3日だ。3日もあれば、あの程度の領土は落とせるはずだぜ。しかもだ、敵がいて負傷したなら話がわかるし、傷の一つや二つ負っているのが普通だぜ。だが、この野郎ピンピンしてやがる。だったら、どうして敵の陣地が落ちて、結界が崩壊しないんだ。ええ、どうか疑り深いこの私めにわかるように事情を話してみろよ、ティガ」

ヒュドラの追及は鋭く、核心を突く部分に迫ってくる。ティガにもその言葉は耳に入っているが、弁解できはしないし意思もない。むしろ、何も考えたくもないし喋りたくもない、ユザレに涙を流させ、生命の溢れる森を破壊し尽くした自分の行為に対する戸惑い、怒り、後悔で頭がいっぱいだっただけだ。

「マイフレンド、話してしまえ。今のうちに話せば笑い話になる。だが、口を開かないなら……」

寡黙なダーラムの口数が増え始める。心の底から何かが湧きあがりつつある証拠だ。闇の巨人に友情など、そもそもない。ダーラムの言うマイフレンドとは、魔道をいく者同士、道連れの意味だ。もし、道連れが他の道を選ぶとなれば、彼にとっては友も破壊の対象となる。

「ダラムさんも機嫌が悪くなってきたぜ。ほら、ティガ、言っちゃまえよ。どうせ、最初の戦いで怖気ついて、何も出来ないまま時間が過ぎて、逃げ出したんだろ。ゲームに負けたのがそんなに口惜しいかよ。何が最強の戦士だ、大した事ねえな。それとも、何か。あの結界の中の奴らとでも、仲良くなつて牙を抜かれたか。もし、そうだとしたら傑作だぜ。情にでもほだされたか。それとも、食い物に目がくらんだか、金でも積まれたか。ああ、こういうのもありだよな。いい女をあてがわれて、甘い言葉や色気で迫られて、いい思いをさせてもらう代わりに、見逃してくれと言われたんだろ。どうだ、凶星だろ、どんないい女だ。俺も会ってみてえな。もつとも、俺達の敵なら、すぐに殺すけどな」

ヒュドラにとっては、ティガを挑発するつもりで言った言葉だった。挑発に乗って感情的になる顔を見てやろう、そういう悪意と疑り深い彼の想像や妄想がティガの記憶に運悪く引かかった。

顔を伏せていたティガは急に立ち上がると、獲物に飛びかかる蛇のような勢いで、自分の腕をヒュドラの首にかけ、指をのどに食い込ませていく。そこにいた誰もが不意をつかれ、動くことができなかった。ヒュドラの足は地面から浮き上がり、ティガはさらに彼の首を力任せにねじ切らんばかりに締め上げる。ヒュドラは、まるで首をへし折られるような感覚を覚え、必死に逃げようとしたばかりと手足を動かすが、ティガはそれを決して許そうとはしない。

「ヒュドラ、お前、触れちゃならないところに触れたようだ……」

「ティガ、貴様は何のつもりだ……」

「うるせえっ」

ティガは、空めがけてヒュドラを投げ飛ばし、自身もそれを追いかける。散々な目にあつたヒュドラだが、空という己のテリトリ

ーに入ると、相手を上回る速度と機動性を見せる。ティガとの差をぐんぐん広げ、自分に優位なポジションを作っていく。

「ふざけた真似をしてくれたな、ぶっ殺してやる。絶対にだ、はったりじゃねえ」

「ヒュドラ、なぜだかわからないが、おまえに対する怒りが収まらない」

「てめえに怒りなんて感情がまだあったとは、傑作だぜ。もっとも、おまえが怒るほど、お前に対する恐れがなくなるんだよ。虚無のお前なら、どこか底知れない何かを感じたがな」

ヒュドラはあざ笑いながらティガの背後をとり、距離を保ちながらも隙を逃さず攻撃を仕掛ける。音速で巨人がぶつかり合うため、衝撃音が激しく鳴り響く。ティガの飛行速度も決して遅くはないが、やはり空という舞台は、ヒュドラに分がある。

「空に俺を連れだしたのが浅はかだったな。いつものお前ならあり得ないことだ。やはり、あの里で牙や爪を抜かれ、去勢でもされて手懐けられたか。それとも、やはり女の色仕掛けでたぶらかされたか。おまえを夢中にさせる女なら、相当のもんだ。やっぱり、虚無の男を惑わす妖艶なその顔を見たくなるぜ」

「ヒュドラ、それを言うなああ」

不用意にティガの心に踏み込んだヒュドラの油断が間合いにまで影響し、攻撃をティガに読まれ、接近したところを捕獲される。ティガは、敵を捕獲すると、片腕で背後から締め上げ、空いた腕で激しく拳を打ち込んでいく。背中だけではなく、腰や肩、首、後頭部を容赦なく打ち据える。初めは抵抗していたヒュドラは、次第に動きが鈍くなっていく。相手が弱ったところで、ティガはヒュドラ

の耳元に、怒りを押し殺した声をささやく。

「あいつのことを妖艶などと言うな。あいつはお前が思うような世界にいる人間じゃない。お前が語れるような奴じゃないんだ。そして、俺ですら……」

「ケツ、凶星だったとはな。虚無のティガが色気に惑わされるとは。だが、わかったよ。俺の疑念が解けた」

「今度は何がわかった」

「さつきから、俺はお前に殺されるのを覚悟していた。だが、お前のパワー、スピードが衰えていて、俺の体がびんぴんしている。そして、何よりもお前から殺意を感じられない。お前、巨人の力を満足に使いえなくなったようだな」

「バカなことをいうな」

「なら、現実つてものを見せてやる」

ヒュドラは、彼の言う現実を見せつけてきた。どちらかと言えば非力な彼が、ティガの腕を捻り上げ、自分の体を解放すると、嵐の様なラッシュをティガの体に打ち込んできた。そして、頭部めがけてスピンの利いた回し蹴りを入れてくる。ティガは一発も避けることもできないばかりか、全身に走る痛み of ひどさに、パワーダウンによる耐久力が低下している事に初めて気がついた。

「ま、まさか、こんな事が」

「お前、相当弱ってるぜ。力の源を失ったようだな」

ヒュドラは、力関係が逆転したティガを容赦なく痛めつける。テ

イガの反撃はことごとく交わされ、いとも簡単に受け止められる。次第に、ティガの心の中には死への恐怖が沸き起こっていく。殺される、そんな思いが心に到来する。

「すぐに楽にしてやるぜ、ティガ。気に食わねえから、さっさと消えろ」

ヒュドラは、全身のエネルギーを両腕に集中し、必殺技のヒューガストを繰り出した。計測不可能な風速の突風がティガを襲う。激しい風は真空波を引き起こし、ティガの体を切り刻んでいく。その姿を見て、ヒュドラはさらに歓喜の声を上げる。

「耐えたりしないで、一思いに死ねよ。我慢するなら、ゆつくり切り刻んでいく。そして、今度は俺があのに攻め込んで、お前のお気に入りを切り刻んでやるよ」

サデイスティックな彼が言った最後の不用意な一言は、ティガの心に怒りを生んだ。ティガは、全身で突風を受け止めながら、前進を始めた。己の体が痛めつけられるのも構わずどんどん前に進み、ヒュドラに近づいていく。そして全身全霊の力で近寄ってくるティガの形相に驚愕するヒュドラを捕まえると、二人一緒に竜巻の中に巻き込まれながら、ルルイエの地表に向かって降下していく。ティガは、ヒュドラの首を地表に対して垂直に立てながら、嵐に揉まれながら死のダイブを続ける。

「てめえ、放せ。このままだと俺はもちろん、お前だって無事じゃ済まねえぞ」

「そんなことはどうでもいい。あいつは、ユザレはお前なんか触れていい人間じゃない。俺ですら……」

「やめろおおおお」

二人は、竜巻に巻き込まれながら地表に激突し、ルルイエを瞬間的な嵐が襲った。二人の戦いを心配な面持ちで見守っていたカミールは、小さな体を吹き飛ばされそうになったが、ダーラムの巨大な手がそれを守り、突風をやり過す。やがて、風が収まり、濛々と舞いあがった砂埃が落ち着いていく。二人は、その砂塵の中に驚くべきを見た。

頭から大地に叩きつけられたヒュドラは、大地に頭を突き刺したまま石化してしまっていた。そして、その傍らから起き上がったティガの姿はさらに異形の物だった。その体は、ヒュドラの返り血を浴びたように一部を青く染め上げ、ヒュドラの物と同じ体色を備えている。恐らく、ヒュドラのヒューガストや彼が大地に叩きつけられた時に放出されたエネルギーのせいだろうが、やはり、その染まり方は血を浴びたように見えるため不気味ですらある。

ティガは、ようやく立ち上がったがまだ体はふらふらし、目もうつろな表情をしている。やがて、石化したヒュドラ、そして青く染まった自分の体を見てわなわなと震え始める。いくら触れてはならないものに触れた相手とはいえ、自分のした行為が信じられなかった。巨人を屠るなど何度も行ってきた行為なのに、ここまで恐ろしいと思ったのは初めてだった。自分のしたことを否定しようにも、血の様にべったりと体に染みついたヒュドラの色は、どんなにこすっても落ちることはなかった。

突然、ティガの首にダーラムの隆々とした筋肉が盛り上がる腕が撒きつき、がっちりと体も拘束した。無限とも思えるパワーを誇るダーラムの力の前では、ティガは為す術もない。

「ダーラム……」

「マイフレンド、ヒュドラを殺すのはお前の勝手だ。それは罪に問わない。だが、お前が北の地で何かにたぶらかされ、その結果がこれだとしたら話は別だ。俺達は、地獄への魔道を行く者同士。その関係は、旅の道連れ、共に地獄へ行くものだ。だからこそ、俺達は

裏切りを嫌う。仲間以外への心変わりは裏切りとみなす。お前は裏切った。もうマイフレンドではない。だから、消す」

ダーラムは、ティガの体を持ち上げると、山肌に向かって顔から叩きつけた。そして、痛み之苦しむ暇すら与えず、岩が剥き出しになった斜面にティガの顔を押し付け引きずりまわした。ティガは、苦悶の声を上げるが、力も俊敏性も失った肉体では抵抗できるはずがなかった。そのまま、神殿の裏側までいいように引きずられたティガは、荒野に倒れ込んだ。そこに、ダーラムは何度も足を振り下ろし、ティガの体を粉々に砕こうとする。破壊のダーラムの名の如く、その力は建造物だけではなく、相手の肉体にすら及ぶ。

「ティガ、お前の体もこのルルイエ神殿の人柱にしてやろう。闇で世界が覆われるのを、動けぬ体で見せつけてやる。後悔の念と口惜しさを永遠に味わうがいい」

闇で世界が覆われる。その言葉にティガは無意識に反応した。振り下ろされるダーラムの足を受け止めると、激痛に耐えながら自分の体を起き上がらせていく。そんな力など残っているはずもないのに、そしてその力の根源がわからないまま、彼は立ち上がり尚も戦おうとする。闇で覆われる世界。自滅していった文明、戦いで荒れ果てた自然、自分達が屠った巨人、そして必死で生き残ろうとするユザレの里の民と、自分に対して悲しみの表情を浮かべて涙を流したユザレ。それらを思うと、このまま闇に包まれていくのはたまらなく嫌だと、ティガは考えてしまった。絶対考える事のなかった感情、思いがティガを立ち上がらせた。

「ほう、まだ立ち上がれるか。苦しませずに粉碎するつもりだったが、まだ足りないようだな」

「何故だか知らないが、立ち上がってしまった。まだ闘えと、信じがたい俺自身の声がする」

「とうとう狂ったか、ティガ」

ダーラムは、ティガに掴まれた足を振りほどくと、重いパンチをボディに浴びせていく。衝撃が体を貫くが、ティガは例え威力がなくてもダーラムに反撃をしようと拳を繰り出す。決して敵うはずのない馬力の差に関わらず、決して手を休めない。誰のため、何のためかはわからないが、そうせずにいられない何かでティガを動かす。効きはしないものの、あまりに軽いティガの攻撃に逆にいらつきを覚えたダーラムは、渾身の一発を繰り出してきた。これで終わりにするつもりの一発だったが、手ごたえが全くなかった。それもそのはずで、ティガの体はダーラムの頭上にあり、自分の足のかかとをダーラムの脳天に振り下ろした。ダーラムにとっても予想だにしない攻撃だったが、ティガ自身も予想外の自分の体の動きに戸惑いを覚えていた。全く経験したことのないスピードが、ボロボロの体から発揮された事に、納得のいく理由が見つからなかった。

ダーラムは頭を振りながら立ち上がったが、静かなその佇まいには内に押さえつけた怒りがあるのを、ティガは察知していた。ダーラムがあの状態にあると何をするか、十分すぎるほど知っている。「大人しくしていれば、一思いに死なせてやることもできたものを。どうやら、お前の心はどこかに奪われているようだ。ならば、そんな心の迷いなど、二度と味わうことのないに済むように粉碎してやる」

ダーラムは赤熱した拳を大地に打ち込み、自身のエネルギーとマグマを同調させて、業火の波をティガに発射した。一度繰り出されると、ダーラム自身が解除しない限りこの状態は続き、上空に逃げることにも敵わなくなる。もはや、獲れる方法は一つしかない。ティガは炎の波に向かって前進した。体中ががあとという間に炎に包まれるが、決して疾走をやめない。足をマグマが焼くがそれに構うこ

となく走り続けながら、手にマグマをすくいとり炎を絡め込んでいく。そして、自身の体が焼き尽くされる寸前、最後の炎の壁を突き破った。

不意をつかれたダラムは、ティガの予想外の行動に体がから空きになった。その隙を逃さず、ティガは両手に纏ったマグマと炎の塊の拳を相手の腹部に命中させた。ダラムの体は浮き上がり、そのまま岩山に激突するが、ダラムはそれでも手の平をティガの顔に当て、握りつぶそうとする。

「ティガ、洒落た真似で俺の技を破ってくれたな。さすがは、マイフレンド……」

「どうしても、闇に塗りつぶされたくないところが俺にはある。例えば、お前であってもそれはさせられない」

「ちっ、裏切り者め……」

ティガは、さらに力を込め山を切り崩しながらダラムを押しこんでいく。やがて、両腕に抱えたマグマが噴出し始め、山を半分ほど吹き飛ばすほどの爆発を起こした。瓦礫に紛れてダラムの石像が半分ほど埋まり、岩を跳ね飛ばしながら立ち上がったティガの体は、ダラムの赤い色がやはり返り血の様に張り付いていた。仲間を裏切り、そして屠ったその罪の証は、永久に体から取れることはなく、彼の体に刻みつけられた。茫然とたたずんでいるティガの心に、胸を突き刺す様な声が聞こえてきた。あどけなさの裏に、氷のような冷たさを隠し持つ女の声……。

「ティガ、どうしてこんなこと」

カミーラの視線がティガを射抜くようにまっすぐ突き刺さってくる。黙ったまま話ができずにいる彼に、カミーラの言葉は追い打ちをかける。

「ねえ、どうして二人をこんな目に。あたし、ティガが帰ってくるの待ってたんだよ。帰ってくるあなたの姿を見た時、すごく嬉しかった。なのに、これは一体どういうことなの、話してよ」

「カミール……」

「あの二人の声も聞こえてたよ。ティガが黙っているなら、あたしは誰を信じればいいの。もし、あなたが、他の誰かに心を奪われるなら……」

「よせ、カミール」

「その女も、そんな人間のいるこの世界も、みんな壊してやるっ」

カミールのもう一つの一面が解放された。盲目的に相手にのめり込む半面、もう一面である周りへの排他的な感情が激情と巨人の力を伴い、極端すぎる程過激な言動と思想に彼女を駆り立てる。巨人の姿に変身したカミールは、愛憎入り乱れた感情をこめてティガに襲いかかる。すべてはティガの心も体も、存在そのものを独占したいがために。馬乗りになって、ティガの首を絞め続けるカミールは、愛憎と狂気に染まりきっている。ティガは必死に足を動かし、背中を蹴りあげて何とかカミールを振りほどくが、体に走る戦慄までは拭えなかった。

「どうしてあなたはあたしに振り向いてくれないの」

カミールは手に超低温の鞭を形成すると、ひたすら感情のままに振り回してくる。普段の彼女からは想像もつかない形相に、ティガは戦慄すると同時に、かつてダラムに忠告された言葉を思い出した。「お前、カミールをどうしたい」、「お前の関わることだ、お前が始末をつけろ」。その言葉の意味をわかつていたはずなのに、

真面目に取り合わなかった自分の行いの報いが来ているのだと思った。

ティガは、頭に振り下ろされた鞭を寸前で受け止める。あつという間に手が凍りつくが、それに構わずカミィラに叫ぶ。

「カミィラ、俺はお前達を裏切ったわけじゃない。本当だ」

「あの二人の石像を見せられて、その言葉を信じろとも言っの。あたしは、別に二人の事なんか関係ない。あたしを、あたしの事を振り向いてくれずに、他の誰かに心を動かされたあなたが許せないのよ。あなたは、何もわかっていない」

カミィラは鞭の自分の手元に戻すと、それを五分割し、指と連動させて細い糸の様にした。氷のワイヤーは彼女の指の動きに連動して不規則な動きを見せる。そして、再びティガを攻撃する。全く攻撃を読めず、ワイヤーが体を切り裂いていく。体の表面だけでなく内部まで切り裂く氷の地獄は、ティガを苦しめる。そして、五本の氷の糸はティガの全身を貫き礫にした。凍てつくような冷たさと痛みがティガに苦悶の声を上げさせ、拷問の様な苦しみを与える。

その姿を見つめるカミィラに表情はない。憎い相手が痛みに苦しみ、氷の冷たさで体を貫かれる。だが、苦しむティガの声を聞き、姿を見ていると、心の底から喜ぶことはできなかった。むしろ、彼の苦しみは自分の苦しみとなって跳ね返り、やがてどうにもならぬい怒りへと変わっていく。本当に自分がしたいことは何なのか。自問自答が彼女を苦しめる。

「こんなに苦しいのなら、何もかも消えてなくなればいい。あなたを奪った存在も、あなたも、あたしも、この世界そのものがなくなれば、苦しまずに済む。最初から何もなければ、こんなに苦しまなかったのに……」

「や、やめろ、カミィラ……」

「もういい。あなたを殺して、すべてを終わりにする」

カミールはティガの戒めを解くと、ワイヤーを収束し剣に変えた。ティガを殺す事で、自分の苦しみを終わりにし、奪われる苦しみも何もかも終わらせるつもりだ。彼女の姿を見たティガは、抵抗するつもりはなかった。自分の心がユザレを悲しませ、仲間を裏切る結果となり、カミールを苦しませた。その結果がこれなのだ。

「ツケがまわってきた、ってことか」

ふつと力なく笑い、顔を上げた時にはカミールが頭上に剣を掲げ、振りおろそうとしていた。しかし、あれだけ殺意をむき出しにしていた彼女の闘気が一瞬薄れ、隙が生まれた。その隙が、覚悟を決めたはずのティガに無意識の反撃を引き出し、次の瞬間、カミールの剣はティガの肩口を少し切った程度で止まり、逆にティガの拳が信じられない力でカミールの腹部を捉え、致命傷を与えていた。力を失い、がっくりと倒れ込むカミール。ティガは自分の震える手を押さえつけてカミールを抱き起こすが、すでに足元から石化が始まっている。

「カミール、何故躊躇した。俺を殺したかったんだろ」

「できなかった。何故かは知らないけど、あのまま剣を振り下ろせば、確実にあなたを殺せたはずなのに、手が止まってしまった」

「俺は、お前まで、殺してしまったのか」

「悲しむことないよ。あたし達は闇の巨人なんだから、こういうのがお似合いでしょ。これが普通よ。涙なんて、どこかに捨ててきたんだから。でも、あたし、何がしたかったんだろ……」

次第に遠のく意識の中で、自分が本当に望んだものを思い返していた。ティガの事が好きで、よろこばせたくて……。そう、彼を喜ばせたかったのだ。ただ、ティガに振り向いて欲しい一心で、ひたむきになってきた。喜ばせて、振り向かせて、その先にあったものは何。あたしが求めたたったひとつの物は……。

「あたしは、ティガに愛されたかっただけなのに」

言葉にならない声で、カミーラは呟いた。ティガに聞こえただろうが、聞こえていないだろうな。そう言えば、渡せずじまいだった、あたしが作った黒いスパークレンス。何ものにも染まらない黒。決して屈することのない力強い黒。それがあたしの気持ち。この気持ち、少しはわかって欲しかった。この気持ちは一体何だろう。こんな気持ちになれたのは、いつ以来。愛されることができるなら、またこの世に帰りたい。ティガにこの気持ちを伝えたい。遠い日に捨てたものを一緒に探したい。そう、ひか……を……。

最後にカミーラは大事なことを伝えようとしたはずだった。しかし、あまりに弱々しくなった彼女の声と、ティガ自身の嗚咽で、その言葉は永遠に届くことはなかった。ゆつくりと石化した彼女の体を横たえるティガは、彼女の顔を直視した。今までまともに見ようとしなかった彼女の顔は、石化した今も悲しげな表情に見える。ティガの胸元は、カミーラの色である金色に濡れていた。彼女の死もこれから永久に背負っていくことになるのだろう。すべては、虚無に身を任せ、恐怖も悲しみも妬みも、友情も忠義も優しさも顧みずに一人だけの世界で生きてきた自分のせいだ。そして、あまりにも大きすぎる代償を、拳を握りしめながら噛みしめていた。

「ヒュドラ、またネチネチした嫌みを言ってみろよ。ダーラム、その馬鹿力で絡んでこいよ。カミーラ、さっきの話の続きをしようぜ」

しかし、石像と化した三人は、何も答えてはくれない。ルルイエに、彼のまわりにあるのは沈黙だけだ。静寂に耐えかねたティガは

絶叫した。しかし、その声もまた風や波にかき消され、静かな空気が戻ってくる。大地に突っ伏し、渦巻く感情にどうすることもできないティガ。しかし、誰もいないはずのルルイエに、何かの気配が突然現れた。ハッと、我に返りティガは、三人が戻ってきたのかと思ったが、その様子はなく淡い期待は打ち砕かれ、逆に経験したことの無い得体のしれない気配がどこからかあふれ出てくる。その気配の出所を探るティガは、やがてルルイエ神殿からとてつもない波動が濁流に様に流れ出して来る。

「誰だ、そこにいるのは。隠れてないで、出てきたらどうだ」

その気配は、実体を出そうとはしないが、ティガがこれまで遭遇した事のない巨大な存在を感じさせるに十分だった。そして、その存在は突然ティガに語りかけてきた。

「隠れるだと。巨人ごときがおこがましい。我は、古よりこの世界を支配する神なり。巨人同士の戯言は十分に堪能させてもらった。もういい。この世界は終わりの時だ。光の巨人に一度は邪魔されたが、この星の主導権は我にある。滅びの時はきた」

ルルイエ神殿は、いつの間にか暗黒の旧支配者の巢窟と化していた。そして、暗黒の時代の到来を彼らはここに宣言した。

彷徨の果て

ルルイエ神殿から、その存在を宣言した邪神は、軟体生物のような滑りがあり艶めかしさとおぞましさを発散させる不気味な触手を、神殿内部から無数に伸ばしてきた。山肌の裂け目からは、黒い蒸気のようなものが噴き出し、わずかに残っていた植物を枯らし、辺り一面を死と静寂の世界に変えていく。超人であるティガでさえも、魂を引き抜かれそんな感覚になる。

「神殿の奥にこんな奴がいた気配はなかったはずだ。いつの間に入り込んだんだ」

「いつから居ただと。笑止。我は、太古の昔からこの世界にいる。そして支配した。我の世界に入り込んだのは人間だ。そして、住まうところに引き寄せられたのは、お前達だ」

「黙れ。俺達がこの島を選んで住むことを決めたんだ。それを裏で糸を引いていただと、ふざけるな」

「どこまでもバカな奴。哀れで愚かで、それがかわいらしくもあり惨めでもある。たかが、光の巨人を模倣しただけの存在が、闇の力を扱えるはずがないだろう。おまえ達の心にある邪な意志、その精神のもろい部分にちよっかいを出すだけで、あつという間に闇の巨人となり、すべてを滅ぼすのだからな。人とは面白き存在よ。だからこそ、滅ばねばならぬ。世界を滅ぼす存在になるのなら、我を滅ぼす存在にもなり得かねない」

邪神の言葉は、ズタズタになっているティガの心を、徹底的に追い打ちをかけ、破壊し尽くしてしまった。いつの間にか心に介入され、その結果、掌の上で踊らされていることも気づけないまま、

破壊と殺戮に手を染め、拳げ句の果てに仲間を手に掛け、返り血を全身に浴びた肉体をさらしている。もはや、自分の心すら信用することもできず、自分を支える手がかりを失ってしまった。

「俺の満たされない虚無も、カミィラ達の心も、おまえが裏で糸を引き、操っていたのか」

「操るだと。そんなことは必要ない。最初に心を押してやれば、勝手に坂道を転げ落ちるのだから、造作ない。お前達の行為は、お前達が勝手に、そして好き好んでやっただけなのだよ」

恐ろしい種明かしに、ティガは正気を失いそうだった。操られていたなら、自分の行いを割り切ることができる。しかし、すべてが自分の自由意志の結果であるという、弁解のしようのない事実を思い返すにつれ、今更ながらも抱えきれず、背負うことのできない数々の罪状が目の前に突きつけられてくる。自らの意志で墮落し、積み重ねた罪の重さや数に、ティガはもう限界に達し、狂ったように泣き喚き、拳や頭を大地に砕かんばかりの勢いで打ち付けている。「お前達には楽しませてもらったが、もう必要はないし邪魔だ。この世界はじきに闇に包まれ、静寂と無によって統治される。我が自ら出る幕すらない。闇の世界をこの神殿から眺めよう。この神殿も何も知らずによく造ってくれた。褒美として、もっとも過酷な場所の人柱にしてくれる。そこで、永遠の苦しみに浸り、闇に染まり続ける」

邪神は無数の触手を石像化した巨人たちに巻きつけ、神殿の中に引きづり込んでいく。悲鳴もうめき声もあげるわけでもなく、物と化した彼らは神殿の中に蠢く暗闇に消えていった。触手は、ティガのそばに横たわっていたカミィラにも絡みつき、ずるずると神殿へと引きづられて行く。その姿を見たティガは、反射的に手を伸ばした。初めて、彼女に対して正面から向き合ったのがこれが初めてで

あり、最後になるとは。皮肉どころか悲惨ですらある。その手が届けば救いもあるうが、それすら叶うことはなかった。ティガの足にも触手がまとわりつき、彼とカミールを引き離していく。為す術もなくカミールの石像も神殿の中に運び込まれ、重く鈍い音が響き渡り、彼らの肉体が暗黒の神のすみかの人柱となり、いつ終わるともしれない苦しみへの許にさらされた。

邪神は、まだ動くことのできるティガまでも仕留めようと、触手でとらえたその体を何度も大地に叩きつける。その拷問には一切の躊躇も妥協もない。あるのは、淡々とにじみ出る殺意だけだ。

体が叩きつけられる度に、体は悲鳴を上げ、激痛が全身を走り、心も体も粉々になりそうだった。早く死ね、ティガは自分を罵った。死ねば楽になれる。自分が屠った三人とともに人柱にでも何でもなつてやる。そうすれば、少しはあいつらの気持ちも晴れるだろう。そんな投げやりな気持ちで、体を相手の為すがままに委ねていた。

しかし、もう一方では、この苦しみや恐怖から逃れたい、死にたくないという、どうしようもなく惨めで情けない願望も湧きあがってくる。虚無の果てに得たものが、こんな情けない感情とは、興ざめである。しかし、彼は死よりもむしろ生きたいという思いが勝っていた。生きてどうなるものではないが、ここで終わりたくはない、やけくそに近い思いが力を与えた。

地面に振り下ろされた瞬間、手が伸ばせる所にあつた岩をつかみとり、足に絡みついた触手に何度も打ちつけた。自身の足にも痛みが走るがそれに構わず岩を撃ち続け、やっとの思い出拘束から逃れることができた。自由を取り戻したティガは、海に向かって飛び立ち、必死にルルイエから離れ、どこかに飛び去っていった。

ティガが去った後、触手は神殿の中に引き込まれていった。しばらくすると、ルルイエのある島全体が震えあちこちが崩れ去り、大地が割れ海水が島に流れ込み、神殿は次第に水没を始めていき、数十分後には完全に海に沈んでしまった。邪神は自身の住処を得、暗黒の海にすべてを持ち去ったのだ。後には何も残らない、闇がまた

らした無だけがそこにあった。

ティガはひたすら飛んだ。目的地などあろうはずがない。しかし、一人でいる事が無性に怖かった。誰でもいい、どこでもいい。揺るぐことのない確かなもの、偽りのないもの、自らを委ねられるものが欲しかった。それらを探して必死に飛び、ある場所で降り立った。そこはかつて文明の栄えた場所だった。だが、ティガの目の前に広がるのは、文明の残骸と、人気のない空っぽの街、そして、ここにも闘争に敗れた巨人たちの石像の破片が至る所に転がっている。

ここに来て何もなかったことなどわかっていたはずなのに、何の根拠もない「ここに来れば何か」という、調子のいい淡い期待を持つてここを訪ねた自分が、すでに常軌を逸しているのを痛感した。誰かがいるわけがない。ここだって、お前が破壊してこんな風にした所の一つだろ、ティガは自分を何度も罵った。

破壊し尽くした街ですら、彼の罪を突きつけてくる。ティガは、おぼつかない足で、大陸を歩き続けた。広大な台地にはかつて様々な生命が息づいていた。しかし、人々の愚かな争いと墮落の選択は、他の生命にまで影響を及ぼし、一頭の動物も、一本の草も存在しない。あるのは死を意味する沈黙のみだ。ティガは、そばにあった木を引き抜いた。元々は、樹齢数百年はあったであろう大木は、上半分が腐れ、下半分は炭化してしまっている。ティガの握力に耐えきれない木は、ボロボロと崩れさり、風に流されていった。

かつて、生命の事など気にもしなかった自分。緑豊かで命に溢れていたかつて森の事をティガはかろうじて覚えていただが、その生命の意味をこの死の静寂で認識させられつとはあまりに皮肉な現実、もう心は崩壊しつつある。

そんな時、はるか遠くで爆音が鳴り響いた。突然の事にとつさに音のした方向見たティガの目に入ったのは、小型の宇宙船だった。大きさからいっても、それほど人が乗れるものではない。だが、人数など今の彼には関係のないことだった。誰かがいる、それだけで

十分だった。自分の手で滅ぼした世界で生きている誰かに会いたい。その悲痛なまでの願望に動かされ、ティガは加速していく。しかし、力をなくした今の彼では、大気圏を脱出しようとする宇宙船に追いつくことは、不可能だった。必死で追いつがるティガは、無情にもどんどん引き離されていく。次第に小さくなる宇宙船の窓に人影があるのを、彼の目が捉えた。女の子だろうか。少女は、仲間の返り血を浴びておぞましい姿のティガを見て、一瞬怖がるようなそぶりを見せた。それも当然だろう。色とりどりの血が体中に塗りとくられた姿など、誰が見ても恐ろしいに決まっている。だが、少女は顔を背けるようなことはせず、なぜか悲しい表情を浮かべた。

「何故だ、何故悲しむ。俺のこの悲惨な姿を見れば、顔を背けるのが普通だろ。何故、お前が悲しむんだ、教えてくれ。俺にその心を教えてくれ」

ティガの必死の叫びもぬなく、これ以上は追っても無駄だという距離に宇宙船は消えていった。このまま宇宙に行くこともできるだけの能力はある。だが宇宙に行つて誰かいるのか、そこにいつて何か得られるのか。自問自答の答えはわかつているから、ここにとどまっているのだと、ティガは無様な答えを受け入れた。その心のどこかに、自分に悲しみの眼差しで詰める少女の子てが忘れられなかった。あの子は何を伝えたかったのか。今となつては確かめようもないし、教えてくれる者もない。

空も闇に支配されつつあり、太陽の光は極端に減り、空の青さもくすんでいる。そして眼下には、生命のいなくなった大地、跡形もなく破壊された文明、巨人たちの夢と闘争のなれの果て。誰も、ティガを受け止めてくれる者も場所もない。様々な現実がティガの頃を決壊させた。

「誰か、誰か出てきてくれ。何でもいい、罵つても恨んでもいい。とにかく俺の前に出てきてくれ。この心を受け止めてくれ……。俺が、俺が間違っていた。すべてを壊し、奪い去つたのは俺なんだ。」

すまない、本当にすまない。どんな裁きでも受ける。だから、一人でもいいから俺の目の前にいてくれ。頼む……」

ティガの後悔と懺悔の言葉は、風にかき消されていく。だが、その言葉は、彼の心からの贖罪の言葉であった。深い後悔の念からの言葉だった。そこに、虚無のティガと呼ばれた闇の巨人はいない。そこに存在するのは見紛う事なき人間の姿である。どうしようもなく愚かで惨めな、しかしだからこそ今の彼は一人の人間であった。人の心を得て、己の過去と罪に向き合った彼は、ひとしきり泣き叫んだ。消して戻ることのない時間を戻せるのなら、いくらでも叫び、何でもするつもりだった。しかし、そんなことはできるはずもない。どうすればいいか、もうわからなかった。どこに行けばいいのかすらわからなかった。このまま、世界が闇に包まれる運命にこのまま身を委ねよう、そう思い、ティガはゆっくり下降していった。誰に知られず、悟られず、求められず、朽ち果てていくのもいいだろう。その方が俺らしい。そんなことを考え、自分の人生を振り返った。巨人の力を手にした時、溢れる力に吞まれ始めた頃、三人の地獄の道連れを得たこと、三人との修羅の果てに辿り着いた別れ、アナタとガーディーという自分に心にくれた存在との出会い、使命のために己の命をかけることの出来るサトウ・ドウアンの兄弟、そして……、安らぎと温もりをくれたユザレ……。

ユザレの姿や声、肌触りを思い出したティガは、死への恐怖がまた動き出した。この臆病者と自分を罵った彼だが、本当の気持ちにはわかっていなかった。彼は死ぬのが怖いのではない。心から生きたいのである。生きる意味をユザレの里で知らぬ間に教えられ、認識したこともわからないでいる。だから、自分の本当の意思がわからないでいる。彼は、生きる意味、喜びを教えてくれたあの里に行きたいのである。そして、闇に堕ちた自分に光をくれたユザレにまた会いたいのだ。ティガは、本当の自分の気持ちを理解できないまま、本能的に北の地にあるユザレの里に、川の流れに身を任せる木の葉

の様に、力なく飛び去っていった。

ユザレの里では、方舟計画の最終段階に入っていた。特殊なフィールドで滅びの闇から里の民、近隣の里の人々、運び込めるだけの動植物を囲み、完全な滅亡を回避しようという計画である。方舟と言う器ができた今、後は人の移動とフィールドの発生だけを待つばかりであった。人々は、様々なものを方舟に運んでは家に戻り、また様々なものを運び、少しも自分達の存在の証を残そうとしていた。一方、人々の喧騒をよそに、ユザレは祈りの間にこもることが多かった。最後の最後まで巫女として、政治の長としての務めを果たそうとし、自分に課せられた最後の務めへに向かうために、心を鎮めることに勤しんでいた。会う人間も、ユザレを命をかけて守る使命を持つサトウとドウアンだけになっている。

このところ、ユザレは表面はいつもと変わらぬ様子を見せるが、時折見せる物憂げな表情を浮かべ、心なしか目が潤むこともあった。その姿を見る度に、二人の兄弟の不安の種でもあった。今も、祈りをささげているのだが、背中から漂う覇気のようなものが乱れているように思うのは、武人である兄弟だからであろう。

「ユザレ様。差し出がましい事とは思いますが、何か心に思う難題がおありなのでしょうが。いかさか、表情にいつもの輝きはありませんか。」

「兄の言う通りでございます。我々にも、この里の者にも、一番大事な時が訪れます。そして、ユザレ様自身にも……。それゆえ不安なのです。」

祈りをささげていたユザレは、それを中断すると、力のないため息をつき、兄弟を振り返らずに語り始めた。

「そうですね。これからが一番大事な時です。我々にとっても、こ

れから先の世界にとっても。なのに、あなた方に心配をかけるようではいけませんね。私にも努めがあるのに。心配をかけましたが、私の決意には乱れはありません。あなた達もこの後の務めに向けて、心身を整えて下さい。私は少し、森を散策します。生きている森も、もうすぐ見られなくなりますから」

「わかりました。何かありましたらお呼び下さい。すぐに参上いたします」

そう言い残し、兄弟は祈りの間を出ていった。ユザレはゆっくり立ち上がり、外に出て森に向かって歩いていく。歩き方にも力がなく、自分の意思で歩いているように思えなかった。水源が枯れ始めているのか、水の量も減り川幅も急激に狭くなっている。ユザレは石の上に腰をおろしながら、それでも最後まで生き残ろうとする自然の中に身を任せた。そして、無意識のうちに川上に視線を送ってしまうのだった。まるで何かを思い出すかのように、誰かを待ち焦がれているように……。

パキツ。森の中で音がした。枝が折れるような音を聞き、ユザレははっとして森に視線を移した。もうこの辺りには生き物はほとんどいない。森にあるのは木々のざわめきくらいしかない。しかし、何かが枝を折る音は続き、次第に近づいてくる。ユザレは何かを確信して立ち上がり、一歩ずつ森に近づいていった。そして、木陰から彼女が待ち望んでいた存在が姿を現した。

「ティガ」

ティガは、体中が傷だらけでボロボロなり、生気を失っていた。動けない体で、世界中を彷徨し、何日もかけて海を超えてきたのだ。死体が歩いていると言っても過言はなかった。ただ、その目だけは生きていた。かつての様なキラキラした目ではなく、力を失い何かを必死で求めている様な眼だ。そんな彼の視線の先に、彼に安らぎを

与えてくれた存在がいた。

「ユザレ、君に伝えられなかった言葉があった。君に涙を流させ、悲しませたこと、すまなかった……」

「ティガ、それを伝えるためにそんな体で、私に会うために……」

「誰もいないこの星で、なぜか君の事だけはいつも心に焼き付いている。この思いは何のか、俺にはわからないが、君が泣いているあの顔の記憶がここまで俺を連れてきた。なんでだろうな、訳がわからない」

ティガはそういうと、前のめりに倒れ込んだ。闇の戦士達との戦いや、荒廃した星の風景が彼の肉体だけでなく精神までとことん痛めつけていた。そして、ボロボロの体で、自分では理解できない感情に身を委ねて、ここまでやってきたのだ。ユザレは、衣が濡れるのも構わず川に足を踏み入れ、ずぶぬれになってティガの元に駆け寄り、彼を抱き起こしながら自分の許に抱き寄せた。

「あなたは本当に変わっている。理解できない感情に任せて、こんな体になりながら、それでも私に会いにくるなんて。でも、今はそれでいい。わからなくても構わない。今、あなたがここにいます。そして私がそばにいる。それだけは、あなたにとって確かなことだから」

静けさでティガを糾弾した森が、今は優しく静寂で二人を包み込んでいた。ユザレは、ティガに自分の肩を貸しながら、祈りの間へ歩いていこうとしている。体格が違ったため、何度もよろめいてしまいが、自分の手で彼を運びたい、助けたい、その一心で彼女はひたすら歩いていった。

命の温もり

ティガが最初に感じたのは、しばらく残る体の痛みだった。だが、随分と和らいでいる。この里に来るまでは、体の怪我とすり減った精神によつて、体の自由は全く失われ、ここまで来るのに数日を要したほどだった。ようやくここに辿り着き、ユザレの顔を見た瞬間、緊張の糸が切れて意識を失ったところまでは覚えていた。ティガは、自分がどこにいるのか確認しようと辺りを見回した。そこは以前もユザレに看病された祈りの間であることを認識した。それがわかると、何故だかホッとして心が安らいだ。体にはまだ疲労が残っていて、深い眠りに誘おうとする。そして、うとうとしかけた時、扉と仕切りの布をくぐつてユザレが入ってきた。ティガが目覚ましている事に気がつき、

「あら、目が覚めたのね。昨日は驚いたわ。あまり消耗しているものだから心配したけど、その顔色なら安心ね」

と笑みを向け、手に乗せていた食事の載った本を枕元に置いた。そして、体を起こそうとするティガを手伝い、彼の上半身だけは起こすことができた。ティガは、体はまだ痛むが、自分の心が不思議と落ち着いているのに気がついた。虚無の心とは違う、何か満たされているようなそんな感覚が不思議だった。そして、昨日ここに辿り着き伊s機を失ったと、一体何があつたのかユザレに尋ねてみた。「昨日、意識を失った後の記憶が全くない。俺はどうしてたんだ」

ユザレはクスツと笑いながら、ティガの問いに応えて事情を話した。

「あなたが気を失った後、あなたを抱えてここまで来るだけで、そんなに大変だとは思わなかった。普段は、会議やら祈りで体を使っていないからね。川の中で倒れた時は、本当に怖かったけど、何とか

運び込んでほつとしたわ」

「おま、いや、君一人でここまで運んだのか。どうして助けを呼ばなかったんだ」

「助けを呼んだら、サトウ達が色めき立つから。何もあんなに興奮しなくても、落ち着いて話せば、あなたの事は十分わかる人だけど、今は色々あつて気持ちにゆとりがないの」

「……、いや、あいつらの感覚が普通だよ。俺のしてきたことを振り返れば当然だ」

「そこまで思いつめることはないわ。あなたをここに運んだ後、私の姪に薬などを運んでもらって手当てをしたの。大丈夫、姪はわたしの一族の中で一番私によく似て少し元気のいいところがあるから、こういう内緒の事には口が堅いから。あなた、昨夜の昼から今日の朝までずっと眠っていたのよ」

「ほぼ一日寝ていたのか」

ティガは驚いていた。そんなに寝込むほど心が安らいでいたことなど、記憶になかったからだ。それまでは、眠るという行為は情眠をむさぼるような墮落した行為でしかなかった。そして、敵が襲ってくればすぐに飛び起きて戦闘に入るなど、ぐっすり眠ることなど考えられなかった。それほど、今の彼は心にゆとりと安らぎがあるのだ。これが眠るということか、と思いながら、自分の得た不思議な感覚をかみしめていた。

「眠れたなら、少しは何か食べたら。今の里でとれるものはあまりなくて、こんなものしかないけど」

ユザレはそう言い、盆に乗った食べ物をティガに差し出した。確かに地味な食事で、粗引きの小麦で焼いたばそぼそしたパンと、豆類やイモなど素朴な食事だった。ティガは、そんな食事を見て、無性に空腹感を覚え、素朴な食べ物が実にうまそうに見えた。食事など、そこいらにあるものを適当に口に放り込んだりする様なことしかしてこなかった。それが、今は目の前にある貧粗な食べ物に猛烈な食欲を感じていた。自分でもわけのわからない感覚の変化を押しつけ、ティガはパンをとり口に運んだ。非常に硬く、麦の臭いが強いばそぼそした食感だったが、それがうまくて仕方がなかった。これが食する、そして味わうということなのかと、些細なことにティガは心が熱くなった。その感覚をゆっくり味わいたくなり、ティガは少しずつパンをかじっていたが、ある事に気がついた。これほどまでに食糧がひっ迫しているのに、どうして自分の分が確保できたのだろう。ユザレのことだ、自分以外の者の食事を我がものにして、それをティガに渡すことはありえない。もしかして、ユザレは自身の食事を自分に与えているのではないかと、ティガは気がついた。「ユザレ、これは君のものじゃないのか。いくら、何でもそこまでしなくていい。俺はもう十分だ」

「大丈夫よ。少しぐらい食べなくても。こう見えても時には断食もするのよ。食べなくても平気だから遠慮しないで食べて。その体を治さない」と

「いや、それじゃ俺の気が咎める」

「本当に変わったわね、ティガ……。やっぱりあなたは……」

「どうしたんだ」

ユザレは最後まで言葉は言わなかったが、それがとても大事なこ

とであるようにティガは思えた。しかし、ユザレはそれ以上は言わず、顔にもう一度笑みを浮かべ話を元に戻した。

「あなたが遠慮するようなことを口にするなんて珍しいわね。その気持ちを無駄にしちゃいけないわね。なら、二人で分け合いましょ。それなら、納得してくれるわね」

「わかったよ、じゃあ、半分ずつな」

二人は、一緒に決して十分ではない食事を二人で分けて食べあった。その光景は、味を楽しむというより、二人で食事をするその場の空気を味わっているようだ。ユザレは、普段の彼女では決して見せることのない自然な一人の女性の笑顔を浮かべている。ティガは、この場の空気に戸惑い、自分の感情やたち振る舞いに戸惑いぎこちなく感じながらも、表情を崩しユザレと向き合っていた。二人で食事をする、そんな些細なことが、彼らが望んでいたものなのかもしれない。ティガにとっては温もりを、ユザレにとっては安らぎを、それぞれが求めていたものを自然な形で噛みしめていた。

「ティガ、ここまで来るのに何があったの」

ユザレの問いに、ティガはその手を止めた。まだ、生々しい記憶が残っていて、心が痛んだ。心が痛むとはこういうことなのかと思い、自分の行いを振り返った。背負いきれない罪の数々。それでも自分が生きる限り背負いなければいけない罪は、心の中に閉じ込めておくことは今の彼にはできなかった。本当は誰かに話したい、話すことで自分が背負い切れる重さにまでしたい。そう思いながらユザレの顔を見た。特別な表情を見せていなくても、それは無表情とは違った。何故か、そこに引き込まれるような思いを抱かせるユザレの表情を見るうちに、ティガは静かにこれまでの事を話した。遠い自分の過去から話し始め、ルルイエに戻ってからの事、世界中を彷徨い歩いたこと、そして、最後に自分が訪れたいと思った場所

がここ、会いたかったのがユザレだと告白した。自分の思いを口にし、聞いてもらえるうちに、不思議と楽な気持ちになっていく様な気がした。

「邪神に遭遇したのね。この世界の滅びは、あの神がもたらしている。古から存在する実体のない概念の様な存在。例えば体を得てもそれは仮の物。あれに打ち勝つには、人の力だけでは不十分」

「あいつが何なのか、俺にはどうでもいいことだ。俺の行為は、あいつがきっかけを作ったとはいえ、俺自身の意思によるものだ。してしまったことは元には戻らない。犯した罪は消えはしない。どうすればいいんだ……」

「ティガ、あなたのその罪を悔む気持ち、悲しみや苦しみ、それは耐えがたいものよ。でも、それはあなたが人間だからこそ、心の中に取り戻したものの。闇にいた時のあなたは虚無の中にいた。何も感じなかったでしょ。でも、あなたが張り裂けそうな痛み、心が潰さるような重圧を感じるのは、今のあなたは人間だからよ」

「人間の心か。その引き換えに俺は力を失い、自分の心を手を余してこのざまだ。人の存在や心がこんなに弱くてちつぽけだったとはな。惨めなもんだ。でも、俺はそんな弱い存在を不幸に陥れてきた最低だな。生きる価値なんてあるんだろうか」

うなだれ、目がうるんで今にも涙になってこぼれそうなティアの肩にユザレは手を置き、いつもの表情で語りかける。

「ティガ、命の価値があまりに軽んじられる時代であっても、あなたのこれまでの罪は変えようのない事実よ。どんなにあがいても、この先ずっと背負っていくもの。でも、生きている限り、あなたにはまだできること、いえ、役目がある。それを放棄しないで。必ず、その時が来る」

ユザレの強い口調に、ティガは顔を上げた。その瞬間、ユザレと正面から目が合った。その強く澄んだ目に吸い込まれそうになりながら、彼女の言葉を頭の中で反芻した。

「俺に出来る事って何だ。俺の役目とは。ここまで血に濡れて、すべてを破壊した俺の手で何が出来るんだ。教えてくれ」

「それは言えない」

「何故だ。俺はどう生きたらいいか、もうわからない。為すべきことがあるのなら、俺は何でもやる。償えるなら、クズのような俺でも必要とされるなら、この命はいつでも捨てられる」

「あなたは本当に間違いなく人間になった。闇の淵から人の世界に帰ってきた。ティガ、あなたの生きる道や役目はあなたが選び、手にするもの。私は導くことはできる。でも、その道に足を踏み出すのも、何をつかみ取るかも、それはあなたがすべきこと。私は導く、そして見守る。だから大丈夫。あなたの行くべき道を勇気を持って探して選ぶのよ」

ユザレはティガを両腕で包み込んだ。ティガはこれまで味わったことのない安らぎを得た様な、そんな柔らかな抱擁力のある、ユザレの細くも温かさのある腕の中でティガは、少しずつ自分の力で目に進む意思を芽生えさせた。ユザレは腕をほどくと立ち上がり、

「ティガ、私はこれから仕事に行かなければならない。でも、あなたのことは誰にも言わないから。私は、もう何があってもあなたの味方。忘れないでね」

と言い残し、ティガに笑みを向けながら祈りの間から出ていった。そっと腕で包まれたただけなのに、ティガは先程までの様にしたばかり

りを見つめるのではなく、前にある何かを探そうという気持ちが生まれていた。勢力をつけようと残っている食事をすべて食べ切り一息つくのと、外に出てみようという気になった。ここに籠っていることは、自分の心の中にこもること。しかし、外に出ることでは自分ができる償いや役目、そしてすべきことを探さなければ何も変わらないと思う、裏にある森に出てみた。

ユザレと初めて出合い、そして再び巡り合えた場所。だが、その森は闇がもたらす滅びの波動で生気を失いつつある。枯れ木が目立ち、死の沈黙が侵食を始めている。空は澱んだ青に変色し、川も細くなり流れが目に見えて遅くなっている。

「ここにも闇が来ている。死が近づいている……」

生を得たことで死を感じるようになったティガは、川を渡り森の中を歩きを始めた。以前は不思議なほど心を落ち着かせてくれた森は、死を目前にしながらも尚、ティガに生たるものは何かを少しずつティガに伝えていく。そして、ティガはそれを心に刻みつけていく。

ゆつくり森の中を歩くティガ。すると、足に何か引っ張られるような感覚があり、足元を見てみた。するとそこには、本当に小さな赤ん坊の狼が、ティガの衣のすそを口で噛んで、自分に関心を向けさせてようとしているのだ。ティガは、その狼を見下ろしながら、

「お前、俺に何か用があるのか」

と、ぶっきらぼうに答えた。だが、それは関心を向ける気がないのではなく、目の前の小さな命にどう接すればいいかわからない戸惑いの中での精いっぱいの反応であった。

狼はティガに気がついてもらえたことが嬉しいのか、そこに座りこんで尾を振っている。だが、その姿はだいぶ痩せており、長い間栄養を摂取出来ていないようだった。よく見れば、目に輝きがなく生気がないのがわかった。その目で、じっとティガを見つめて、何

かを伝えようとしている。

「俺に助けて欲しいのか」

ティガは、必死で考え狼の子に話しかけた。狼は、ティガに意思が伝わったのを理解し、一層尾を激しく降って喜びを表現している。「ふっ、お前も根なし草か。自分を見ているようで、妙な気持ちだ。気が引けるがユザレに頼んで、こいつの食べ物都合つけてもらうしかないか。さ、行こうぜ」

ティガは狼に手を差し伸ばし抱き上げようとした。しかし、その子は後ろに後ずさり、それでいながらしっぱを振ってティガを見つめ返してくる。予想外の行動に相手の心理を理解できないティガは、困り果てた。こいつは何を考えてるのだろう。からつかているのか、それにしては逃げようともせず、じつと自分のことを目線をそらすに見つめている。

「何がしたいのか言ってくれよ」

いらだちを覚え、投げやりな言葉を行ってしまうが、狼は訳がわからないティガの服の裾を噛んで、また引つ張ってくる。そこで、ティガは試しに狼の引つ張る方向に足を踏み出した見た。すると、狼はその度に喜び、さらに強く引つ張るのだ。どうも、森の奥へティガを連れていきたいらしい。

「わかったよ。ついていくから引つ張るのはやめてくれ。歩きづらくて仕方ない」

自分の意思を理解されたことに喜んだ狼の子供は、引つ張ることをやめ、おぼつかない足取りでティガを先導していく。生まれてそれほど時間が経過していないことや、栄養を十分に摂取出来ていないことで、どこか歩き方が危なっかしいが、時々振り返ってはティガがついてくるか確認して、森の奥へと先導するのだ。

「お前、無理すんなよ。ガキのくせに張り切り過ぎて、後でひっくり返っても俺は知らねえからな」

そんな言葉を投げかけながら、律義にティガは森の奥へと足を踏み入れた。闇の影響で枯れている木が多くなり、空気がよどんでいる。そのせいで、狼の子も息を切らしているが、それに構わず歩き続け、草むらの中に飛びこんでいった。ティガはめんどくさそうに草を掻きわけ、物音のするところを目をやったが、目に飛び込んだものを見て息をのんだ。

そこにあつたのは、二頭の大人の狼の死体と、二、三匹の狼の子供が親の亡骸に寄り添っているのだ。親は、死んで日にちが経過しているらしく、だいぶ遺体が傷んでいる。親が死んだことで、栄養をとれなく子供達は、飢餓状態の危機に陥り、死んでもう母乳を出せない母親の乳房に吸いついている。恐らく、自分をここまで連れてきたのは、この子供達の兄弟なのだろう。そして、ティガをここまで連れて戻って来たということは……。

「お前、この兄弟を助けて欲しいのか。そうなのか……」

ティガは絶句しそうになりながらも、狼に話しかけた。そして、衝撃を受けた。自分も腹をすかせ、生命の危険にあるのに、人知れず朽ち果てそうな兄弟を助けるために、体に鞭打ち、命がけでティガをここまで案内した小さな命。その意思の強さに、ティガは自分の頭を思いつきり殴られた気持ちだった。こんな小さな命ですら、生きるために必死になり、そして自分以外の命を守ろうとする姿。闘争や破壊しかなしえなかったティガにとって、こんなにも小さな命が為そうとした行為は、心に突き刺さると同時に、彼に命の重さ、尊さ、そしてどんなに小さな存在でも持ちえる命の力強さを思い知らせた。その時、ティガは自分の頬が濡れている事に気がついた。いつの間にか彼は涙を流していた。だが、それは自分のつらさから来る涙ではない。あまりに強い意思を持った小さな命への敬意、目

の前の光景に対する感動が、彼に他人のために流れる涙を呼び起したのだ。

ティガは、彼に温かな涙を流させた勇氣ある子供をそっと抱き上げた。狼は、疲れ切ったのか、少しぐったりはしているが、それでも力強い心臓は、命への強い執念を感じさせた。

「お前はすげえよ。こんなにも体が弱りながら、心は俺なんかよりずっと強いんだから。自分の命も危ないのに、兄弟を助けてくれって言うお前の思い、確かに受け取った。だから、お前も死ぬな。みんな死ぬな」

ティガの心に次から次へと熱いものがこみ上げてきた。人としての心を取り戻した彼の心に、熱さが宿りつつあった。涙を流すことのできる感情が蘇っていった。そんなティガのもとに、他の子供たちが集まってきた。自分の命を助けて欲しい、もっと生きたい。その思いを託せるものとして、ティガを選んでくれた。小さな命が助けを求めすがっている。その事実が、ティガには嬉しかった。

「お前達、こんな俺に助けて欲しいって言うのか、信じてくれるのか。どうしようもなくクズな生き方をしてきた俺を、お前達は信じてくれるのか……。わかったよ、俺が助ける。お前達の命を助ける。お前達の親父やお袋が授けてくれたその命、絶対に消させはしない」

ティガは、子供達を抱き上げると森の出口に向かい、祈りの場へ戻っていった。罪は消えない、過ちも取り戻せない。だから、何を為すかを決めねばならない。ならば、命の価値があまりにも軽いこの時代で、少しでも多くの命を助けられるのかもしれない。その手に感じる命の温もりをしっかりと抱きしめ、ティガは何かを見つけつつあった。

時が来る

ティガは狼の子を祈りの間に連れ帰ってきたものの、その後の対処は考えていなかった。とにかく助けてやりたい、その強い思いだけで行動したので、次に何ができるかは頭になかったのだ。食べ物も余ってはいないし、腕の中の子供達は鳴き声を上げて空腹を訴えてくる。

「慣れないことをすると、こうなるよな……」

自分のしたことに後悔があるわけではないが、これまでの彼にしてみたなら「柄でもないこと」をしているため、次の手段が思いつかないのだ。森は生気を失っていて食べ物があるわけがない。となると、里の人が住んでいる方向に行くしかないが、ユザレが身柄を秘密にしている以上、勝手な行動はできない。ましてや、自分はお尋ねものの様な存在だ。のこのこと外に出ていけば、騒ぎが大きくなるし、ユザレにも余計な手間をかけることになる。しかし、抱いている狼の子は食べ物ねだり、ティガを頼って甘えてくる。その様子を見ている内に、ティガのは根負けした表情を浮かべ、

「わかったよ、何とかするよ。その代わり、お前らその鳴き声をやめろ。じゃないと、どうなっても俺は責任はまたないからな。いいな」

と、外に出る決意を固め、子供達に言い聞かせた。すると、子供は皆、急に静まり返り、ティガの胸元で息を潜めている。話せばわかるじゃないか、と心の中で呟きながら、ティガは祈りの間の入口から外に出た。どうやら、祈りの間もそこにつながる通路も洞窟を削って出来たものらしく、壁や脚もとに岩がど出している。明りもなく暗いため、用心して歩かなければならず、ゆっくりと岩の通路を歩き続け、明るい場所に抜けることができた。

明りのある場所に出ると、そこは階段状に連なる腰かけと、中心にある高めの舞台からなる議会場であることが分かった。かなり広い空間で、ここで色々な話し合いが行われていたのだろうと、ティガは思い浮かべた。果たして、ユザレはこのどこに居るのだろうか、そんなことが頭をふと過ぎった。だが、そのわずかな気の緩みが注意力を散漫にさせ、この部屋に誰かが入ってきた事に気がつくのが遅れてしまった。あわてて隠れようとするが、身を隠せるようなスペースがなく、入ってきた人物と意思の疎通を断つことになった。

入ってきたのは十代半ばぐらいの少女で、手には食料を抱えていた。しかし、ここには誰もいないし、奥にはティガしかいないことになっている。まさか、自分の食料を持ってきたのかと、ティガははっとした。そうなると彼女は、ユザレが話していた、姪と言うことか。彼女は、ティガの姿を見て驚いて立ち止まりはしたが、肝が据わっているのか、こちらの詳細を知らないのか、全く動じる気配がない。黙っていても始まらないので、仕方なくティガから声をかけてみた。

「お前、もしかしてユザレの姪か」

ティガの問いかけに、少女は一瞬ムツとしたような表情を見せると、威勢良く返事を返してきた。

「初対面の女に、いきなりお前呼ばわりはないでしょ。しかも、おばさんと呼び捨てだなんて厚かましい。もう少し礼儀をわきまえて欲しいわね、内緒であなたに食事運んでいるのはあたしなんだから」

「

勝気で気の強い音だとティガは面食らっていた。ここまで言われると以前の彼であれば、手を上げるか、二度と口をきけなくするぐらいは平気なのだが、激しい変化の中にある彼はむしろ目の前の少女に圧倒される様な気分だった。

「あたしはミオ、お前呼ばわりは今から直ちにやめなさい。あなたはティガね、そう聞いてるから。はい食事。あれ、その狼は何」

ミオと言う少女は、一方的な自己紹介をしたかと思えば、次の興味はティガの抱えている狼の子に移っている。ひどいじゃや馬だな、と心の中で呟き、彼女と一応会話らしいやり取りに入っていた。

「森で拾ったんだ。親父もお袋ももう死んでいる。助けを求めて森を歩いているところを拾って、ここまで連れてきたんだ」

「まさか、空腹に耐えかねて、食べようとしたんじゃないでしょうね」

「いい加減にしろよ、お前、じゃなかったな、ミオ。食うわけじゃねえよ、その何だ、そいつらが、その、助けてくれって頼み込んだというか。何だかこう、よくわからない気持ちになって、連れ帰ったんだ」

「へえ。伯母さんに聞いたより結構まともかも。ふーん、狼の孤児を助ける、か」

「何だよ、その目は。柄にもないとでも思ってるのか」

「別に。面白いなって」

ミオの目つきは、興味津津の表情でティガを見つめている。一方ティガは、この気の強い少女にどう反撃しようか思いあぐんでいる。その姿は実に滑稽であり、ミオはそれを楽しんでいるのだが、ティガは何が面白いのかわからず、振り回されっぱなしだった。そんなティガに、ミオはもってきた食事を差し出してくる。

「これ、食べれば。空腹じゃ頭がカツカするよ。それにしてもかわいそうに、この子達。よほど長い間、何も口にしていないみたい」

「それで、そいつらに食わせる餌を探しに行くつもりだったんだ」

「へえ、優しいんだ。意外ね。でも、あなたが外に出たら、大騒ぎになるわよ。経歴も大そうなものみたいだし。サトウー達は今すぐピリピリしてるし。それで、この間ひどい目にあっただしょ」

「お前、俺の過去を知っているのか」

ティガの手がびくんと止まり、ミオを見返した。何故、自分の悲惨な過去を知りながら、ここまで堂々と話ができるのか。どこまで胆が座っているのかと不思議で仕方がなかった。

「知ってるよ。伯母さんから詳しく聞いているし。昔から、伯母さんとは気が合うから、今もよく話をしてるの。あなたが来てからのことも、それよりずっと前のことも」

「俺がここに来るずっと前って、どういう意味だ」

「それは伯母さんに聞いて。あたしが言えることじゃないから。ところで、この子達を私が引き取っていいかな。餌の調達もままならなくて大変でしょ」

「それはまあそうなんだが、この里は食糧事情は厳しいはずだ。動物にやる分なんてあるのか」

「里にはないけど、あるところにはあるよ、十分すぎるくらい。方舟には食料も運び入れたし、その分だけ里に備蓄がないの」

「方舟って何だ」

ティガの問いに、ミオはしまったという表情を浮かべた。どうやら、話してはならない事項だったらしく、自分の口の軽さを悔んでいる様子だった。

「あ、聞いてないんだ。まずいなあ、それっておばさんがまだ話すべきじゃないって考えているってことだから、私から言うことじゃないよ。今のことは聞かなかったことにして。その代わり、他のことは答えられる範囲なら教えるよ」

「何だか気になるんだが……。仕方ない、じゃあ話題を変える。お前と、ユザレはどんな関係なんだ。血縁だけじゃなく、他の点でどういう関係を持っているんだ」

「伯母さんと呼び捨てにしないでって言うてるのに。血縁で言えば、私のお母さんと伯母さんが姉妹。私のお母さんは伯母さんの妹。で、私が次代のユザレ」

「次のユザレだって。どういう意味だ」

「世襲なの、ユザレの名も立場も。私の一族は女系の一族。その女系の家族の長女がユザレの名を襲名する。ユザレの名を継いでいる間は結婚はできない。だから、次のユザレは姉妹の娘の長女が受け継ぐ事が多い。ユザレの役目を終えるときがわからないから。死ぬ時、神託があった時など様々。それはいつ来るのかわからない。私も、物ごころついた時には伯母さんはユザレだった。私は役目を知り、その時を来るのを覚悟した」

綿々と連なる家系と共に背負ってきた責任と義務。ユザレはその中で生きているのかと、改めてユザレの大きさや懐の深さを思い知

った。勝手気ままに生きてきた自分が敵うはずがない。そしてこれまでのユザレ、そして次代を担うミオへの見方も変わり、じゃじゃ馬と思っていた彼女は、強い芯を持ったたくましい人間なのだと思いますを改めた。

「お前の伯母さんは、自分とミオが似ていると言っていたが、それがいまいち飲みこめない。だいぶ違う気がするが」

「あたしが伯母さんに似てないって言うんでしょ。でも、私のお母さんが言うには、ユザレを継ぐ前はもつと活発で、朗らかで、表情が豊かで、色々な人と仲良くなれる元気のある人だったって言うてるの。弟が書かせられると、相手が年上の男の子でもかかっていて、野してしまう武勇伝もあるし。かと思えば、色々な男の人から好かれていたみたいだけど、自分が背負う役目のために近寄らせることはなかった。でも、それでも伯母さんに好意を寄せた人たちは悔んだり恨むことはなくて、寧ろ晴れ晴れとした表情をしていたって言う話も聞いた。元気が合って、活発だっていう点が似ているって言われてるけど、私も今の伯母さんの姿しか知らないから、ピンとこない」

ティガは、ユザレの過去を知って、彼女の人となりが少し理解できた気がした。怪我をした自分を助けてしまう包容力、一人だけが人を運びこむ勇気と忍耐力、食事の時にちらつと見せた茶目っ気など、思い当たる節はいくらでもあった。それらを思うほど、彼女に命を助けられた己の幸運に感謝する気持ちが芽生えていた。

「伯母さんによく似ていると思うよ」

「大して知らないくせに。食事のことはあたしがこつそり運ぶね。伯母さん、すごく忙しいから、今夜はここに寄れないかもしれないから。後、この子達はちゃんと世話するから任せておいて」

「それじゃあ、頼む。その方が安心だ」

しかし、子供達はティガから離れたくないのか、鼻をすり寄せてくる。命の恩人に対する感謝の念がそうさせるのだろう。ティガはその行為が照れ臭いながらも嬉しかった。ティガは彼らを優しくミオに引き渡し、語りかけた。

「俺についてきてもどうしようもないんだ。けど、この人についていけば、俺はお前達を助けることができるんだ。捨てるんじゃない、助けたいんだ。絶対に忘れないから、その内また会おうな」

ティガの思いがけないほどの優しい言葉に、ミオは驚いたが、ティガは気付いていないのかそのまま祈りの間へと去っていった。彼の姿は、ミオに強い印象を残したようだ。

「お前達の恩人は、本当に面白いわね。ぶっきらぼうで不器用で、態度も悪い。でも、不思議な優しさがある。伯母さんが前に言っていたこと、本当なのかもしれない。闇の巨人が人間になった。そして次に目指すのは……。伯母さん、私も信じてみるよ、あの言い伝えを」

ティガとミオが話しこんでいた頃、ユザレは里の有力者と共に、居住区から少し離れた場所にある山の麓に来ていた。彼女と有力者が話込んでいるそばには、不思議な構造物が建築されていた。

金属のようできて、光沢はまったくなく、重さもほとんど感じない。加工しやすくても非常に堅牢な物質で作られているのは、広大な面積の視覚の区域を囲み、その角から伸びる4本の柱が中心で交わるピラミッド型になっている。そびえ立っているのは、巨大ピラミッドの骨組であった。その骨組の中では、里の集落とほぼ同じ環境が整えられ、水や食料を始め必要な物資が運ばれ、様々な動物も囲い込まれている。

「何とか、方舟の完成は間に合いましたね」

ユザレは、ピラミッドをなが寝ながら、言葉を漏らした。彼女が気をもんでいたのは、この方舟と呼ばれるピラミッドの建築であった。この方舟は、この滅びの闇から逃れるために様々な人々や動物が乗り込み、生き残るための最後の希望であった。この建築は使われる資材の製作に非常に手こずり、超古代文明の技術を持つてしても困難で、建築が遅れていたのだが、ここにきて調整が終わり遂に完成したのだった。これが完成したことで、人々や物資の移動が急ピッチ行われている。

「強度などに問題はありませんか。旅は長くなりますから大事なことです」

「安全性に問題はありません。一度起動すればエネルギーが尽きるまで崩壊することはないでしょうし、エネルギー切れの後に崩れるまでには数万年単位が必要です」

「その動力が問題ですね」

「サトウーとドウアン、二人の兄弟のエネルギーを使えば、長期の間バリアーを維持できます。ただ、邪魔が入った場合は危険です。バリアは完成しない限り効力を発揮しません。そこが問題です」

ユザレは技術者の説明を聞き、最後の希望となるかもしれない方舟を見つめていた。人類に残された、滅びをもたらす最後の人類の抵抗、それが方舟である。生きている限り希望を捨てず。それが、ユザレがずっと説いてきた教えである。生あるものである以上、望みを捨てずに生き続ける。滅びをもたらすものがあるのなら、それに従うだけでなく、刃向かう力も残されている。ユザレも、里の人びとも、闇に最後抵抗をする意思を持って戦っているのだ。

方舟への乗船の準備を行う人々を見守っているところに、サトウ
ーとドウアンが飛来し、人間態に戻りながらユザレの許に着陸した。
彼らもユザレとの会議に出席する予定だったが、怪獣の侵入の知ら
せを聞き、その掃討に向かっていたのだ。二人はユザレの前に膝ま
づき、事の次第を報告した。

「遅れて申し訳ありません、ユザレ様。怪獣が里の近くまで侵入し
てきましたので、これを征伐してまいりました」

「怪獣は、闇の使者の一種であるシルバゴンかと思います。ゴルド
ラスも近くまで侵入してきております。邪神はこちらの意思を察し、
怪獣を送り込んできているのではないかと思われます」

「ドウアン、あなたの考え通りでしょう。闇は死の沈黙を望みます。
生き残ろうとするわれわれは、反乱分子であるだけでなく、邪神の
望みを妨げるもの。決して許せぬものです。何が何でも我々を抹殺
するため、脅威を送り込んでくるはず。二人には、ここの死守を頼
まざるを得ません」

「それが我らの使命。ユザレ様をはじめ、この里の命を守るのが我
ら兄弟の使命。この命に代えて、弟ともに使命を果たします」

「サトウー、ドウアン、あなた達兄弟の覚悟には感謝します。そし
て、方舟に乗る者のために、あなた達の力は最後まで必要です。場
合によっては死を覚悟する必要に迫られることも考えられます。そ
の時は、あなた方の命を私に頂けますか」

「覚悟しております」

「兄者に同じく。皆の命が守れるなら、我が一つの命など全く惜し
くはありません」

「二人ともありがとう。時がもうすぐきます。それまで、いつまた出陣するかわかりません。よく休んで英気を養ってください」

「はっ」

兄弟はユザレのもとを下がり、居住区へ戻っていった。兄弟は、この里のために、そしてユザレのために、躊躇なく命を差し出す覚悟を持っている。ユザレは、そんな崇高な意思を持つ者の命を踏み台にしなければならぬこの時代が悲しかった。破壊と殺戮が星を支配し、命が恐ろしいほど軽いために、何かを為す度に礎になる命が必要になる。こんなことは終わりにしたいのが、彼女の心からの願いであった。

「技官、方舟のことは十分わかりました。玉座の方は大丈夫ですね」

玉座という言葉に、一瞬だけ言葉がつまり顔が引きつった技官は、目を合わせようとせず、何か言いづらそうに説明をする。

「玉座も完成に至っております。起動実験はしておりますが、生体では行ふ余裕はありません」

「自信がないのですか。それでは困ります。これは方舟と玉座、二つが揃わなければ意味がありません」

「自信はございます。ですが、それによってもたらされることが気がかりで、心安らかにできないのです」

「わかりました。でも、あなたが気に病むことはありません。これはわたしが望んだことであり、しなければならぬことです。これは挑戦ではありません、必然の目的。大丈夫です。為すべきことは必ずなされます、果たします」

技官の戸惑いやどこか後ろめたさの様なものが見え隠れする表情をやきもちを和らげるように、ユザレは穏やかな口調で、しかし強い意志のこもった口調で語りかけた。それを聞いた技官は、目を潤ませながらその場を堆積して、場を離れていった。

ユザレはその場に一人残り、空を見上げて佇んでいた。空は、青空が黒ずんで、どこか歪みすら生じている。邪神が望む世界の完成は近い。しかし、自分達は生きることで一矢報いる、彼女は決意を一層強く決意した。

「私達は決して滅びない。勝利なき私たちが唯一得られるもの、それが敗北なき終末。方舟も玉座も整った。……その時が来る。もうすぐ、その時が」

伝えたい言葉

ティガは祈りの間に隠れるように暮らして数日が経過しようとしていた。傷の治りも早く、体が動くぐらいの体力が回復すると、考えることにも余裕が出てきた。彼の頭の中にあっただのは、ミオが口を滑らせた、「里に食料は少ないが、あるところには十分にある」と言う言葉だった。ユザレですら、日々の食料を切り詰めているのに、ある場所に行けば、狼の子に与えるだけの食料に余裕があるという矛盾。一体、この里は今どうなっているのかという疑問はあるのだが、里にのこの顔を出せる立ち場ではないし、それをやればユザレやミオの立場がない。そこまで思慮が及ぶようになっていくこと自体、驚きではあるのだが、ティガ自身にその自覚がない。そんなことを考えながら暇を持て余しているところに、ユザレがずっと部屋に入ってきた。昨日一日顔を出していないので二日ぶりである。

「随分、体の具合も良くなったみたいね」

二日しか経っていないのに妙に懐かしい気がするので、ティガはどうも自然に話せない。以前ならなかったことだ。

「まあ、体力は元々ある方だからな。あ、それとミオにも会ったよ。よく喋るじゃじゃ馬だ」

「あの子は、昔から口数が多くてやんちゃだから。あなたとも気が合いそうだと思ったけど、どうだった」

「俺を見てもたじろぎもしない。クソ度胸が据わってやがる。あんなのは初めてだ。昔のお前のことも聞いたよ。二人とも似てると言われても何となく納得できるが、実際にお前の姿を見ると、昔はミオと一緒にだとは到底思えん」

「役目は人を変えたり、成長させるものよ。あの子だって、その内
に変わっていく」

「ユザレを継ぐ、ってことか」

「そこまで聞いたの。ほんとに口の軽い子ね」

ユザレは苦笑しながら、火の中に薪をくべ、炎を強めて部屋を暖める。外は闇に覆われ、星も月も見えない。建物の中にも次第に温度が低下しているのがわかるほどだ。火を大きくすると、その近くに腰かけを移動させて座ると、ユザレは少しぐったりして疲れた表情を見せた。巫女としてだけでなく、政治の長としての重責もあるのだから、仕方ないのだろう。普段はその事をおくびにも出さない彼女だが、何故かティガの前では素顔をさらけ出せる。ティガは、床の上寝転がりながら、ユザレの顔に浮かぶ疲れの表情を見つけた。

「ずいぶん疲れているな」

「あなたにも、人の顔色がわかるようになったのね」

「見下すなよ。相手の状態を見極めなきゃ戦えない性だよ」

「そうだったわね、忘れるところだったわ、あなたは戦士ね」

「何か面倒なことでもあるのか」

「確かに簡単なことではないわ。でも、逃げちゃいけないこともある。絶対に」

ユザレの顔は疲れが浮かんでいるが、目の力全く薄れてはいなかった。絶対にと言う言葉を発した時、彼女に目には強い輝きが宿っていた。ティガは、今夜のユザレが随分と口が滑らかになっている様な気がし、思い切って疑問をぶつけてみた。

「ミオが言っていたんだが、食料はあるところにあると言っていた。でも、食事の内容が、随分と切り詰めなきゃいけない。どういうことだ」

ティガの質問に、ユザレはクスリと笑いながら体を起こし、言葉を選びながら話を続けた。

「あの子、そこまで話したのね。しょうがない子ね。でも、私があるの事をお願いしたんだから仕方ないわ。あの子の言う通り、食料はあるところにはある。水ももちろん、様々な資材がそこに運び込まれている。物だけじゃない。人も移動しているし、動物や植物、里にある様々なものがそこに移動している」

「一体、何をする気んだ。そんな大移動、普通の事じゃないし、どんな文明でも見たことがない」

「当然よ。これは空前絶後、例を見ない計画。方舟と言われている計画よ。あなたにも話すつもりでいたから、今話すわ」

「方舟と言っからは船だろ。海がないところでおかしくないか」

「船が行くのは水の上じゃない。時の流れに漕ぎ出すの」

ティガにはさっぱり要領がえなかった。船が浮かぶのは水の上である。海もないし、大勢が乗る様な湖だってありはしないこの里で、方舟という計画が進んでいると言われても想像もつかない。その上、時の流れに漕ぎ出すとは、一体何を意味するのか。興味を刺激され

たティガは体を起こし、身を乗り出してユザレの話に聞き入った。

「方舟と言っても、船の形をしているわけじゃない。形状は四角錐、その根幹になる作りが昨日完成した。この四角錐の骨組みに、強力なエネルギーを張ることで、外部から内部の時の流れを遮断して、独自の時の流れに人を乗せていく。だから、方舟と言われているの」

「今いち、よくわからないな。ここの時の流れと、その中でどう違うんだ」

「方舟の中の時の流れは独自の流れ。外部に惑わされず、一定の流れを維持する。つまり、ゆっくり流れるの。内部の一年が、外の百年になるか、千年になるか、それは方舟に張られる境界次第」

「何で、そんな大がかりな計画をするんだ」

「生き残るためよ」

ユザレは、きっぱりと言い切った。生き残るため、それ以外の言葉はない。それは、他の言葉で飾り立てる必要のないほど、その意思が強いからだ。生き残る、その一心で里の人間もユザレも動いている。そのような強い意志の下で動いたことのないティガは、衝撃を受けていた。そんな強い意志を持って生きる人間の迫力に圧倒されそうだった。驚くティガを見つめながら、ユザレは言葉を続ける。

「ティガ、あなたは邪神に会ったのよね。この滅びの闇は、邪神の意思で動いている。すべてを滅ぼし、いつまで続くのか変わらない沈黙と死と滅亡の世界が迫っている。もう世界は、大半が滅んでいく。それはあなたの目で見てきたでしょ」

「……、ああ。見てきたし、少なからず手を下してきたんだ、わかる」

「もう人類に残された道はない。闇との戦いに、もはや勝利はありえない。でも、今生きている命は滅びたくて滅ぶわけじゃない。みんな生きたいの。そんな思いを無視して、すべてを壊す闇に負けたくはないの。だから、勝利がないなら、せめて敗北だけは拒絶したい」

「生き残ることで、闇に対して負けない道を行くということか。うまくいくだろうか。俺は奴に接触した。その時に感じた思いは、今思い出しても理解しきれない程の底知れない闇を見た、そんな感じだ。自分以外の存在、論理、倫理、一切認めず立ち入らせない。俺達闇の巨人すら、駒でしかなかった。いや、操り人形か。それほど存在に牙をむく以上、邪神は必ず潰しに来る」

「あなたの言う通りよ。でも、皆は死に絶えたくない。生きて命を明日に、そして後世に伝えて、私達が存在した証を残したい。私達は邪神にはもう勝てない。でも、負けないことで私達の意味は残る。その意思が、いつか闇を打ち破ることを信じて」

今ある生しか考えることがなかったティガには、それは想像を絶する覚悟であった。決して叶う相手ではないものに立ち向かう勇氣、未来に意思を託そうとする抵抗は、理解しがたいものであった。しかし、目の前にいるユザレの真剣な表情と強い口調は、ティガの心に迫るものがあつた。そんな彼の心を見透かすように、ユザレは問いかけてきた。

「ティガ、あなたは方舟に乗りたいと思うの」

「どういうことだ」

「言葉の通りよ。私の家系の人間に頼めば、あなたを匿えるし悪い

様には絶対にしない。方舟に乗らなければ、あなたであつてもこの世界では生き残れない。これは、生き残る最後の機会になる。どうする、ティガ」

「……、乗れるわけないだろ」

ティガは、苦しそうな声で答えるしかなかった。今の彼には、過去を振り返り、悔む心が備わっている。自分のしてきたことを考えれば、破壊を繰り返し、仲間にも手かけた自分がどうしてこんな気高い意思のもとに未来に向かって旅立とうとする人々の乗る船に乗り込めるだろうか、そんな思いが心を支配していた。

「散々無法を働いてきて、自分だけ生き残ろうなんて、そんな考えが起きない。乗船資格なんて俺にはない。ここで、過去を振り返りながら朽ち果てるのが、俺に出来る精一杯の事だ。こんなことを考えるなんて妙なことだな」

「それはあなたが、人間になったからよ。心を手にしたから、あなたは過去を振り返り、そんなことを考えられる。船の乗るのは自由意志よ。気が変わるなら、間に合う限りいつでも構わないから」

「船はいつ出るんだ」

「明日の夕方には出るはずよ。移動はもう始まっているから、それまでには、船出ができる」

「ユザレもいくのか」

「私も、未来に向かって旅立つわ。私の意思を未来に伝えなきゃいけない」

「そうか……」

答えをティガは、急に胸が締め付けられるような痛みを感じた。恐らく、残るのは自分一人。巨人の力のほとんどを失ったとはいえ、特殊な体質の自分はしばらくは生き残るだろう。たった一人で、強い意志を持つ人々の旅立ちを見送り、闇の中でいずれ朽ち果てるのを待つしかないだろう。それ以上に、ユザレと会えるのが今夜いっぱいだと思うと、その事の方が苦痛だった。何故、こんなに苦しくなるのかはわからないが、孤独への恐怖より、彼女との別れの方がつらく思えた。こんな感覚を覚えるのも、心と言うもののせいなのだろうか。

「心なんてものを持つと、色々な事が頭に浮かんで仕方ないな」

「後悔しているの、あなたは」

「最初は、何でこんな風に自分自身に振り回されるのかわけがわからず、忌々しいと思った。だが、後悔の念は不思議と浮かばない。妙な感じだ」

「それは、心を持つのが人として必要なことだからよ。沈黙と無に帰す闇から、あなたはいつのまにか心をどこかで手に入れ、そこに色々な感情を刻みこんでいった。驚くほど短期間にね。だから、戸惑うのは仕方ないけど、あなたは人間になっっているの。巨人の力を手に入れた頃は、あなたも人間だったはず」

「そんな昔のことはほとんど覚えていない。巨人の力のせいで、寿命がやたらと長くなって、いつ死ぬんだかわからなくなってるからな。過去なんて無駄に積み重ねた分、意味をなさないし振り返ることもなかった」

「なら、覚えている限りでいいから、昔のことを重い出して私に聞かせて。私も昔のことを話すから。考えてみたら、昔の事をお互い知らないし、話していなかったわね。私が忙しいせいもあるけれど、いいかしら」

「しょうがねえな、覚えている限りのことを聞かせてやるよ」

ぶっきらぼうな答えだったが、どこか喜びが混じった口調で答えたティガは、ユザレと一緒に昔のことを話し合った。互いの知らないことを知り、時には笑い合ったりしながら何時間も話し合った。これが最後に一緒に過ごせる時間だと思うと、話を途切れさせたくなく、次から次へと話題を見つけては朝まで語り合った。

話し疲れたティガは、そのまま横になると眠りについてしまった。しかし、その表情はいつになく安らかだった。そんな彼の寝顔を見て、ユザレは優しく微笑みかけると、彼に布団をかけてやり、部屋から出て行こうとした。その間際、ふっとティガを振り返ると、

「ティガ、私はあなたを信じている。最後までずっとね」

と、言い残しその場を去っていった。その言葉が聞こえたのか、意味をわかったのかはわからないが、ティガは安心した表情で眠り続けていた。

何時間が眠り続けた後、ティガはようやく目を覚ました。今日ですべてが終わり、ユザレとも別れになると思うと、やはりつらいことには変わらない。しかし、初めて深く語り合ったことで、自分の中にユザレの記憶が刻まれ、そのおかげでいくらかつらさは和らいでいた。そばにあった水時計を見ると、もう昼過ぎだった。乗船はほとんど進んでいるはずだ。ユザレと会えるの最後の機会になるだろう。せめて、助けてくれたこと、心と言ったものを自分に与えてく

れた礼だけは伝えたいと思い、思い切って里の方に探しに行つてみることにした。色々と混乱もある中だから、身をさらしても騒ぎになる暇もないだろうと考え、ティガは初めて里の方に足を運んだ。

自然豊かな場所なので、それほど大きな集落ではないと思つていたが、目にしたのは予想以上に高度な技術が集まつた街だった。

それほど高くないが、立派な建物が並んでいる。材質は自然の石に特殊な加工を施しておりなかなか頑丈だ。道には金属性の瓶が置かれており、そこからかなり強い電気を発電しているようだ。恐らく小型だが相当強力な電池なのだろう。乗り物は、力の強い生き物にけん引させているが、これのおかげで空気も汚さずに済んでいる。

見渡す限り、ローテクを少し発展させた程度の物だが、使われている器具はなかなか進んでおり、不思議なクリスタル状の物はかなりの情報記憶媒体らしく、技術者ができる限りの情報を方舟に持ち込もうと最後の仕事に勤しんでいる。人々の衣服も、絹に近い材質なのだが、やはり高度の技術がつかわれているのか、かなり丈夫になっており、あらゆる繊維質のものに使われている。

ティガは、これまで目にした色々な文明の中でも、高度な技術と自然が一体化したこの文明は変わっているものに思えた。この文明も、後数時間もすれば無人となり、やがて闇によって抹消される運命にあるのかと思うと、強い無常感に襲われるのであった。

それほど人は多くないだろうと高をくくっていたが、思った以上に人の往来が激しく、ティガはユザレを見つけたことができないでいた。このまま会えずじまいかと焦りが出始めた時、聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「え、あんた、街に出てきたの」

声の主はミオだった。家族思わしき人々と乗船のための荷物運びの最中の様だ。彼女は、母らしき人に耳打ちをすると、ティガの方に走ってきて、彼を路地裏の目立たないところに押し込んだ。

「あんた、お尋ね者の身でここに来るのは危ないのは知っているで

しょ。大胆にもほどがあるよ」

「こういう混乱している時だから、目立たずに済むんだ。あれがお前の母さん、つまりユザレの妹か。似ているな、やっぱり」

「まあ、姉妹だからそうでしょ。まさか、あたしの家族を見物しにここまで来たわけじゃないでしょうね」

「違うよ。ユザレに礼を言っておきたくてな。色々世話になったし、何も言わないまま別れるのも気が引けてな」

「え、あなたは船には乗らないの」

「乗れた義理じゃないしな。ん、ちょっと待て。俺は、ユザレが船に乗ると思ってここにきたんだ。何で、俺が船に乗らないと、彼女と別れる事になるんだ」

ティガの疑問は当然であった。彼は、自分が船に乗らず、彼女が船に乗るから最後の別れになると考えていたのである。しかし、ミオの言う言葉通りなら、ティガが船に乗るとユザレと別れることになるという論理になる。根本から違うその考えに、ティガの動揺が大きくなった。まさか、ユザレは死ぬ気でこの時代に残るのだろうか。しかし、彼女は未来に自分の意思を伝えると言っていた。この矛盾は何なのか。ティガは、ミオに問い詰めた。

「どういうことだ。話が最初から違っていることになる。お前は俺が船に乗ると思っている。俺はユザレが船に乗ると思っていた。この違いはなんだ」

「あなた、まだ伯母さんから聞いてなかったの。方舟のことは聞いているんですよ」

ミオも、話がかみ合わない事に気がつき、顔に動揺が浮かんでいる。そして、何かを隠しているような表情をティガは見逃さなかった。

「なあ、お前が前に話して秘密にしたことは、方舟の事だけじゃないんだろ。まだ何かあるんじゃないか」

「わかった。やっぱり、あなたにはすべて伝えなきゃいけない。それが私の役目なのね。方舟にはこの里の人々が、未来に自分達の意思と血を残すために乗り込む。それ聞いているよね」

「ああ。そこまではユザレから聞いた」

「実は、あなたに話していないこの里のもう一つの計画があるの。それは、玉座と言われる物よ」

「玉座って言うのは、王とかが座る神聖なものだろ。それを名前にする計画って何なんだ」

「玉座も未来に向かって旅立つものなのは変わらない。でも、根本的に違うのは、一人だけが乗り込み、その意思をそのまま未来に送り込むもの。つまり、代を経るのではなく、この時代に生きた者の意思を未来にそのまま伝えるものよ。そして、その玉座に収まるのが現在のユザレ、つまり伯母さんよ」

ユザレの旅立ちは、彼女一人で行うという事実は、ティガには大きな衝撃を与えた。確かに彼女は嘘は言わなかった。言葉の真意を問わなかったのは自分だ。それを悔んだティガだが、まだわからないことがあった。それを聞かないと、また大きな間違いを犯してしまう。それだけはしたくなかった。

「意思をそのまま送り込むとはどういう意味なんだ。言葉を聞いていると、ユザレではなくその意思のことしか出てきていないが」

「私に言わせないでよ。もう、薄々わかっているでしょ。未来に送り込まれるのは、伯母さんの意思だけ。肉体は時の流れを無視することはできない。体は分解され、意思だけの存在になる。それを技術者は電子化されたもの、巫女の私の家系では霊体になるという。心は時を超えて、形を変えても残り続ける。伯母さんは心だけの存在となって、未来に伝えに行くの。闇が来ることを、そして闇を乗り越えようとする意志が存在したことを」

「……。ミオ、その玉座はどこにある」

「まさか、そこに行くの」

「ああ。俺はまだ彼女に伝えたいことが残っている。彼女には感謝してもしきれないんだ。伝えずに朽ちるのだけは嫌だ。そして、俺の伝えたいことを彼女に記憶していて欲しいんだ。頼む、教えてくれ。間に合わなくなる前に、俺をいかせてくれ」

「……。わかった。あなたには教えないといけないよね。あの西に見える小高い山があるでしょ。山頂は、もう闇の影響で木が枯れているからわかりやすいわ。あの山頂に玉座は設置されている。伯母さんがあそこにして欲しいという願いでね。会いたいなら急がないと。今なら、出発にギリギリ間に合うはずだから」

「わかった。この恩は死んでも忘れない。狼のガキ共の事は頼むぞ。そしてお前も、生き残れよ」

ティガはそう言い残し、西の山に走りだしていた。通行人にぶつ

かつても意に介さないほど、必死に走っている。ミオは、ティガの姿を見送っていたが、なぜか涙がこぼれてくる。

「あいつ、ほんとに馬鹿だよ。心から伝えたいのは感謝じゃないでしょ。あんなに優しくなつて、どんどん変わっていく不思議な奴。伯母さんは、そんなあなたのことを信じて待っているんだよ。必ず、間にあつて。そして、あなたが伝えたいその言葉が、みんなを救うから」

ミオは祈りを込めながら、ティガの行く末に何かを託していた。それが、何かをもたらすのかを信じながら。

ウルトラマン

もはや、それが夜の暗がりなのか、雲によつて太陽が遮られたせいのかもわからないほど、ユザレの里は暗闇に覆われていた。ゴルドラスの侵入で結界に穴が開けられ、そこから怪獣が大挙して襲来したことで、辺りは邪神が放つ滅びの闇が覆いつつあった。里の人々は、全員が方舟となる巨大な金属のフレームの中に入り、闇への抵抗の意思表示である生き残るための船出を待っていた。その方舟のもとに、サトウとドウアンの兄弟が、巨人の姿で着陸してきた。彼らは、巨人の無表情な顔からも二人とも疲労の色を隠せないでいる。

「兄者、さすがに怪獣達の数が多いな。これ以上の戦いは、方舟の出港に支障をきたす」

「ああ。ギリギリの防衛ラインまでは防ぐことはできたが、取り逃がしを出した。だが、これ以上は構っていられない。急いで出港に入るぞ」

二人の巨人は、疲れ切った体を起こし、方舟の金属フレームの内側に入った。そして、体を発光させ巨人のエネルギーを外部に放出し始めた。彼らからあふれ出るエネルギーは、金属フレームに吸収され、そこから白色のバリアーの様なものがじんわりと形成され、次第にピラミッドの形に収束していく。二人の巨人は、必死にエネルギーを出す、あまり質量の大きなエネルギーを出すと、金属フレームに組み込まれた精密機械が破損する恐れがあるので、もどかしいが徐々にバリアを形成するしかない。

「兄者、予想以上に時間がかかりそうだな。邪魔が入らなければいいが」

ドウアンの危惧はもつともだった。方舟の完成が近付くほど、怪獣の侵入件数は増えていった。恐らく、闇がこの建築物の存在に目を付け、刺客を送っているのは疑いようもなかった。その意思を考えれば、出港目前の船を襲撃するのは火を見るよりも明らかだった。隣にいたサトウは、ドウアンの危惧に相槌を打ちながら、自分の体からエネルギーを放出し続け、とにかくバリアーの形勢に集中している。技術者によれば、一度バリアーが形成すれば、たとえどんな攻撃を受けようとバリアは破壊されることはなく、長期間維持される。つまり、バリアーを形成さえすれば、兄弟の勝ちなのだ。それを心の支えに、兄弟はエネルギーを送っていたが、サトウは何かに気がついたかのように、ハッと外に注意を向けた。明らかに、彼には動揺が走っていた。

「いかん。もう追いつかれたか」

サトウは前方にある山を見つめていた。そこから、巨大な足音が近づいてくるのがわかる。二人の兄弟はその意味を察し、焦燥感に駆られた。しかし、どんなに焦っても装置が受容できるエネルギーは限界がある。許容をオーバーすれば、方舟は完全に破壊される。どうすることもできない状況に置かれた二人の兄弟の視界に、足音の主が現われた。闇の勢力で最も量産種族と言える怪獣は二人もよく知っており、サトウは心で歯ぎしりしながらその名を呟くほかなかった。

「ゴルザ……」

ティガは、ほとんど獣道と言える山道を、ひたすら走り続けながら登っていた。心臓は破裂しそうなほど胸の下で鼓動し、肺が悲鳴を上げるほど息を切らしていたが、そんな自分の体の状態を無視して走り続けた。ここで立ち止まれば、永久にユザレと会えなくなる。もう一度会いたい、何かを伝えたい。その心が体を動かし強くして

いた。やがて、山頂近くになり、滅びの力の影響で木々が枯れ、至る所で土や岩が剥き出しになっている。途中で何度も躓き、泥まみれになり血を流してもティガは止まらなかった。こんなものは少しすれば治る。だが、立ち止まれば、ユザレとは未来永劫会えないのだ。それだけは嫌だと、険しい山道を登り続けたティガはようやく頂に立った。下を見渡せば、いつの間にか滅びの闇が里を飲みこんでいた。ここにきて、どういうわけか闇の進行が速い。方舟を逃すまいと言う邪神の意思だろうか。しかし、今のティガはユザレに会いたい気持の方が強かった。その姿を探して歩き続け、少し地面がくぼんだ所に、不思議な球体上の人工物があるのを発見した。見た目からして、最近になってここに置かれたものだと言うのがわかる。そして、その傍に佇む今世界で最も会いたい人の姿を見つけた。

「ユザレっ」

息を切らし呼吸が来るいいのも構わず、ティガは叫んだ。そして、前につんのめりながらも走り続け、ユザレのそばに辿り着いた。しかし、ユザレはティガの気配を感じても振り向こうとしない。

「ユザレ、どうして何も言わずに、そして一人で行こうとする。俺に言う価値がないからか。それとも、自分のすることに誰も立ち入らせたくないからか」

ティガの問いかけに彼女は応えようとはしなかった。しばらく、沈黙が流れた後、少しだけ肩越しに顔を向けたユザレが口を開いた。

「そのどちらでもないわ。ティガ、それならあなたはどうしてもここまで来たの。そんなにボロボロになって、どうしてまた私のもとに来てくれたの」

ユザレの問いに、ティガはすぐに応えることができた。それを思っ

「俺はユザレに救われたんだ。闇の世界で生きてきて、その結果行

き場をなくし、償いのような罪を背負ってどうすればいいのかわからず、世界を彷徨い続けた俺の唯一信じられた存在がお前だった。受け止めてくれたのが世界で一人だけお前だった。なのに、俺は何も出来ていない。せめて礼だけは伝えたかった。この場合、何とさえばいいんだ……、そう、ありがとうと」

ティガは、礼だけは言いたい、その思いだけでここまで来て、それを言うことができた。だが、まだ心に何かがしこりとなって残っている。決して無視ができない、だが言葉に変えられない何か。それを伝えなければと言う思いがどうしようもなく強くなり、自分の心を解きほぐすように語り始めた。

「俺は、初めて温もりを知った。いや、恐怖も悲しみも怒りも、この里に来てようやく取り戻した、いや、初めて知ったと言っているほどだ。ここで、俺は人間になれた。そして、導かれる様に様々な感情を知っていった、自分でもわからないほどに。その時、いつもユザレがいた。その場にいらなくても、ユザレの眼差し、温もり、声が心にあつた。お前が、いや、君がいるから俺がいる。君がいたから俺は人になれた。人とは何か、生きるとは何か、命とは何か、人の思いとは何か。すべて君が教えてくれた」

ティガの言葉をユザレは黙って聞いている。しかし、一言一句聞き逃さず、噛みしめて聞いているのがティガにはよくわかった。確信していた。

「ティガ、続けて。あなたが手にした心の声を私は聞きたい」

「君が俺を人にくれた。だから、この山まで辿り着くことができた。今、俺は自分の気持ちに気がついた。俺は、礼を言いたかったんじゃない。俺は、君に会いたかった。俺を救い、闇から人の世界に戻らせてくれた君に会いたくて、ここまで来ることができた。そんな君を一人で行かせることはない。この時が俺の最期になろうと

一向に構わない。君を見送って果てるなら。君は俺にとってかけがえない存在、何よりも大切な存在。……、自分が君を愛している事によやく気がついた。愛が何かを教えてくれた君を愛している。そんな君を、せめて俺だけは見送りたい。ユザレ、君は一人じゃない……」

虚無の果てにすべてを見失った男が心を取り戻し、優しさや温もり、命の重さを知り、そして愛に行きついた瞬間だった。ティガはようやく自分の本当に気持ちに気がつき、そしてそれを口にすることができた。もう、闇に吞まれてここで死ぬことがあっても後悔はなかった。ユザレに自分の気持ちを言えたのだから。勇気を持って愛を伝えられたのだから。そんな彼の言葉を待ち望んでいたかのように、ユザレはゆっくりと振り向いた。銀色の髪の間から覗く彼女の顔は涙に濡れていた。しかし、以前にティガが見た怒りや悲しみの表情ではない、笑顔と優しさにあふれた一人の人間の顔がそこにあった。

「ありがとう、ティガ。私は、本当にうれしい。あなたのその気持ちで私はやっと救われる」

「救われると言うのはどういう意味なんだ、ユザレ」

「私はあなたが現われるのを待っていた。ユザレと言う巫女になった時から。滅びゆく世界を見つめながら、どうすることもできなかった幼い巫女が、初めて得た神託。不思議な夢だった。光に包まれた存在、まるで人に絶望し見捨てて天に帰った光の巨人の様な存在が私に語りかけてきた。滅びの闇から人を救う存在が必ず現れる。彼は闇から現われる。故に誰よりも闇の深淵を知る。それによって、彼は人の心が何たるかを知る人間になる。そして、闇を知るからこそ光の本質を見つけ、そこに到達する。その存在を導くのが私の命をかけた使命。だから、あの森で初めてあなたの姿を見た時に確信

した。目の前にいるのは闇の中で目を閉じている存在。そして、この人が光が啓示した運命の人だと。だから、あなたを受け入れることができた。人に変わっていくあなたの姿が嬉しかった。あなたは私に希望をくれた」

「俺にとっては、君が希望だ。光だ、ユザレ」

「ありがとう。あなたを導くことが私の巫女としての最大の務めだった。そして、あなたは最後に自分の力で光の意味を知った。人に愛されることを望むより、勇気を持って人を愛することを」

同じ愛でありながら、愛されることを望むことと、自ら人を愛すること。似ているようで、根本から違うその感情を、ユザレは話し続ける。

「愛されることを望むのは、自分が満たされたいと言う思い。故にそれは自己愛になる。自己愛は欲望に変わり、それを満たされたいがために自分の本当に大切なものを見失い、苦しみの中に自分を満たしてくれない存在を憎む様になる。それはやがて闇に向かって行く。でも、人を愛する勇気を持つものは、相手の幸せを祈る。幸福と温もりを伝えるために、愛を持つものはどこまでも強くなり光を放つ。ティガ、あなたはそのことを知っている」

「この気持ちに愛。そして光……」

「そう。あなたがその気持ちに気がつき心に刻んだ時、私の巫女としての役目は終わる。巫女でなくなった私は一人の女。誰を愛することも自由になれる……」

ユザレはそう言い、一歩ずつティガに歩み寄ってゆく。ティガも同じように歩を進める。そして二人の距離が触れるほど近づくと、

ユザレはティガの胸の中に顔を預け、小さな声で思いを伝えた。

「ティガ、私もあなたを愛してる。私に希望を与えてくれて、最後に人を愛することを叶えてくれた。これで私は旅立てる。あなたに気持ちを伝えられたから、あなたが私を愛してくれたから」

ユザレの言葉にティガは応えることができなかった。声を出せば、嗚咽が漏れそうだったからだ。旅立つ彼女に、涙は見せたくない。だから、彼はその腕でユザレの体を包み込み、そして力強く抱きしめた。その腕が、彼の口になんか変わって気持ちを伝えていく。

「初めて会った時のあなたの体は冷たかった。でも、今はこんなに温かい。あなたに会えて本当に良かった。もつと早く会いたかったと思うけど、私達は今だからこそ会わなければいけないかった。ティガ、もう旅立たないといけない。だから、あなたが私を見送って」

「……、わかった」

ティガは腕をほどき、玉座に向かって歩いていくユザレの後ろ姿を見つめていた。玉座は、ユザレの意思を未来に伝えるもの。意思を伝えることで、今生きている人々の思い、闇の存在の警告、そして生き残るために何をすべきかを伝えに行く。それが使命であり、彼女が望んだことだから。ユザレ自身が決断したことだから、ティガにはそれを止めることはできなかった。愛する人が望んだ事を、自分の気持ちを満たしたいがために止めることはできなかった。心は、ユザレを見送ることこそが本当に彼女が望んだことだとわかっていて。しかし、球体上の玉座の中に入り、椅子についたユザレの姿を見ると、それ以上は耐えることができず、玉座に駆け寄り、閉まりかかった扉を受け止め、手でこじ開けてしまった。もはや、ティガは涙をこらえることはできなかった。無様なまでに涙を流し、声をあげて泣き続けた。泣き続けるティガの肩に、ユザレがそつと

手を置き優しく声をかけてきた。

「ティガ、私の事をそんなにも思ってくれるの。こんなに愛してくれるの」

「ああ、そうだ。自分自身でもどうしようもないくらいの気持ちがこの胸にあふれている。だから、君がいない世界で死ぬことがたまらなく嫌なんだ。ユザレの覚悟はわかっているのに、それを見届けるのが一番なのはわかっているのに……」

「ティガ、あなたは死ぬことなんてない。自分の過去の罪を悔んで後悔するあなたの気持ちはわかる。でも、死ぬことでしか罪は償えないと言っの。私は、そうは思わない。あなたは生きて、犯した罪の数だけ償いをする、いえ、命の重さがどうしようもなく軽くなつた時代だからこそ、生きながら償い続けることもできる。あなたには、あなたしかできない償いがある。悔みながら死をただ待つより、いつか倒れ日まで償い続けなさい。その愛を胸に秘めて」

「君がいなくなっても償い続けられるほど、俺は強くいられるだろうか……」

力なく応えるティガの顔を手で起こし、自分の顔を見つめさせながらユザレは語りかけてきた。その顔は、どこまでも優しく輝いている。

「ティガ、あなたは光であり人であるウルトラマン。闇の深さを知るからこそ人の心を認識し、光の意味を理解して、さらなる高みに向かって行く者。私をこんなにも愛してくれるなら、今度は人類全体を愛せるはず。人々を愛し、守り続けることがあなたの償い。あなたの光で、闇の中で絶望に苦しむ人を照らすのよ」

言い終えると、ユザレはティガの顔を近づけ、そつと唇を重ねた。

柔らかで温かい、ユザレそのものをティガは肌で感じ取った。二人にとって最も幸福な時間が脳裏に刻まれた。やがて再び離れた時、二人とも安らかな気持ちで向き合っていた。

「ウルトラマン、それが俺の生き方、償い……」

「そうよ。闇と光を知る者がなれるもの。あなたならきつとできるはず。それに、私達は別れることはない。例え今は離ればなれになっても、遠い時を超えて私達の魂は再び巡り会える。約束する。必ず未来でまた会えるから」

「ユザレの言うことは信じるよ。未来で会おう」

「わかったわ。最後に一つだけ、私の願いを聞いてくれる」

「言ってみるよ」

「私を笑顔で見送って。思いを残したまま、旅立つことはできないから。あなたに見送ってもらえるなら、私は安らかな気持ちで旅立てる」

「わかった。それぐらいできるさ」

「ありがとう、ティガ。未来で必ず会いましょう」

ティガは涙をぬぐい、笑顔を作りながらゆっくり扉から離れた。そして、扉が閉まり玉座は次第に発光を強めていく。その内に全体が浮き上がり、次第に加速しながら天高く昇っていった。玉座はやがて宇宙に飛び立ち、やがて亜光速に入る。玉座の中のユザレは、遙か未来に向けた旅の中で悠久の時を超えて、古代に栄えた人類の記憶と意思を伝えるため、老化を免れない肉体を分解し、意思だけ

の存在となり、玉座の中で生き続け、いずれ地球に帰る時を待つことになる。いつ終わるともしれない旅が始まったのだ。

ティガは、玉座が視界から消えても天を仰ぎ続けた。そして、笑顔も崩さなかった。彼は自分の愛を告げ、互いの気持ちを確かめあい、愛する人を笑顔で見送り、ユザレの最後の願いを叶えることができた。これ以上、何を求めることができよう。愛されることより、自ら愛することを知ったティガに、これ以上望むものはなかった。

ようやく顔を元に戻し、張り詰めていた空気を解いた瞬間、頭上を通過する影に気がついた。あつという間に飛び去ったそれは里の奥、方舟にある方向に降下していった。一連の動きを見つめていたティガの表情は、先程まで涙を流していた顔とは一変していった。表情は引き締まり、目には強い光が宿っている。一切の迷いを棄てた、一人の人間の顔そのものである。

「ユザレ、君が教えてくれた光の意味、それを胸に抱いて俺は戦う。犯した罪に償い続けるため、生きようとする人々を救っていく。彼らに愛を注ぎ、光で照らしながら」

ティガは、懷からスパークレンスを取り出した。手の中にある錆びた鉄製のスパークレンスの表面に亀裂が入り、表面が崩れ去った後には、黄金のスパークレンスが彼の手に握られていた。そして、それを天に向かって掲げ、眩いばかりの光が解放する。光は、ティガを包み、新たな力を与えていく。

ゴルザは方舟に取りつくと、腕をふるいながら方舟の中と外を遮るものを崩そうとする。二人の巨人兄弟のエネルギーで、だいぶバリアーが形成されていたのだが、ゴルザの攻撃で衝撃を受けている場所が、バリアーが破れかかっている。

「兄者、これ以上は限界だ」

「泣き言を言うな、ドウアン。俺達の命が尽きても、このバリアーさえ作ればいいんだ。それまでは、意地でも生きるんだ」

「しかし、奴の攻撃が俺達に届いているんだ。奴が完全にバリアーを破れば、俺達はなぶり殺しだ」

「クソ……。ちつ、こんな時に余計な奴が。上空からメルバだ。邪神め、本気でここを潰す気だ」

上空から飛来するまるでドラゴンのような怪獣・メルバはあっさりと上空から方舟の頂上に着陸すると、嘴を使ってバリアーの破壊を始める。二体の怪獣に衝撃を与えられてはバリアーも耐えきれず、そこに穴が開いてしまった。そこにはサトウーとドウアンがおり、彼らは怪獣達の格好の獲物となり、一方的に攻撃にさらされる。反撃したくても、バリアーを少しでも維持するため、その場を動けない二人はいたぶられる。ゴルザとメルバは、何かの意思に指示されるかのようにバリアーの形成の源である二人を集中して攻め続ける。これ以上は耐えられないほど痛めつけられた二人に、とどめとなる一撃が加えられよ移した瞬間、暗闇の空に光が輝き、メルバを弾き飛ばし、ゴルザを方舟から引き離れた。何が起こったのかわからない兄弟の目の前には、赤と青のラインを持つ光輝く体の巨人の姿が立ちはだかっていた。どこかで見た姿だが、あまりにも姿も雰囲気も変わっているその姿に、兄弟は恐る恐る声をかけてみた。

「まさか、ティガか」

「あの、闇の巨人のティガなのか」

二人の問いに、光の戦士は振り向かず、淡々と、しかしはっきりした口調で答えてきた。自分が誰なのか、何を為すのか、それに迷いが一切ない強い口調で。

「俺はもうティガじゃない。闇の中から人の心が何なのかを知り、そして光の意味を知るもの。そして、俺と同じようにその輝きを持つ者、闇の中で恐怖して震えるものを守護する者。光であり人である存在、ウルトラマンティガだ」

背負いし魂

光を目指す人であり、光を持ちながら生きようとする者を守護する者と宣言したティガは、闇の使いである二体の怪獣に立ち向かっていく。強靱な肉体を誇るゴルザに正面からぶちかましをかけ前進を止めると、胸元に拳を連続して叩き込んでいく。しかし、体力に勝るゴルザはそれを腕で払いのけ、もう片方の腕で殴りかかる。それを肘で弾き飛ばし、相手の腹部に蹴りを見舞った。さすがにこの一撃は利いたらしく、ゴルザは思わず後退する。相手を休ませまいとティガはゴルザを追うが、その間にメルバが舞い降りて、彼らの間に割って入る。突然のメルバの介入に足を止めるティガだったがそこに隙が生まれ、メルバはティガの頭部に鋭く巨大な嘴を振り下ろしてきた。まるで鶴嘴を振り下ろすような迫力に、方舟にいた者たちは息をのんだが、ティガはそれを間一髪で避けると軽快な動きで攻撃をかわし続け、攻撃をかわされ続けることで焦り出したメルバの隙をつき、両手で鋭く首筋に手刀を入れた。そして、ぐらついた相手に体重を乗せたたび蹴りを加え、ゴルザとメルバを衝突させ、二体をダウンさせてしまった。

まさに、今のティガは光を得たことで、虚無のティガと呼ばれた頃とは全く違う強さを得ている。圧倒的な強さを感じない。しかし、どこまでも前を、高みを目指す者の輝きがティガを強く支えている。闇に包まれた世界を貫く最後の希望の光がティガそのものである。そしてそれがウルトラマンと言う存在であった。

方舟の中にいた人々は、驚きの心を持ちながら、ティガの光景を見守っていた。かつて闇の巨人の最強の男と言われたあのティガは、今は光輝く神秘の巨人として姿を現し、人々を守護する者と宣言し、闇と戦っている。里の人々が事情を呑み込めずにいると、彼らの前にミオが進み出て、彼らに向かって毅然とした口調で語り始めた。

「先代のユザレは星の海に舞い上がり、遠い時の彼方に旅立ちまし

た。今より、私がユザレとなり、そして私の初めての言葉を伝えます。あの巨人は、光であり人であるウルトラマン。巨人の石像と人が一体化した者とは一線を画す存在です。闇に身を置きその深淵を知る人間、だからこそ、その者は光と言う輝きに気付くことができる。そして、光と言う高みに目指して歩き始めた時、闇の恐怖を知りながら人として光を手にする存在となる。それがウルトラマンと言う存在です」

ミオの言葉に、民は心を奪われる様な面持ちで耳を傾けていた。方舟と言うものに救いを求めていたとはいえ、迫りくる闇に絶望していた彼らを、ウルトラマンはその姿だけで希望を与え、そして自分達を守ろうと戦っている。その姿を見つめていた長老が、ミオに問いかけてきた。

「ウルトラマンは、何を守るために、何のために現われ、戦うのです」

その問いに、ミオはかつての伯母の姿が生き写しになったかのようなたたずまいで静かに答えた。

「ウルトラマンが守るのは、人の中に宿る光。他者に愛を向け、共に未来への可能性を追い求める者たちの心の光を守る者。そして、光を呼び起こす者。だからこそ、闇を知る人でなければいけない。そして、闇の暗さを知るからこそ自らも光輝き、光を目指す」

ミオの言葉を聞いた人々は、希望と祈りのこもった眼で、ティガを見続ける。そして彼らの思いが光となって、ティガの力へとなっていく。

「あれが救世主、ウルトラマンティガ……」

力強さと軽やかさを併せ持つ調和の取れた型を持つティガは、方舟を無事に船出させようと、それを阻む二体の怪獣に追撃を加える

ため、天高く飛び上がり、今の真の力を込めて上空から蹴りを見舞おうとした。角度、スピード、タイミング、すべてが完璧であった。誰もがこれで決まったと思った瞬間、その希望を打ち砕く衝撃が走った。

空中を降下するティガの胸元に、真つ赤な輝きを放つ熱線が直撃したのだ。熱線はティガの体を焼きながらその体をも吹き飛ばし、ティガの体は激しく地面にたたきつけられた。何事が起こったのかい瞬わからなかったティガだが、すぐに冷静さを取り戻し、闇が自分を倒すためにさらなる増援を送ったのだという事を悟った。ダメージは大きいがそれを悟らせないため、すぐに立ち上がり敵を見据えたティガの目の前には、異形の生物が立ちはだかっていた。

ゴルザやシルバゴン達と基本的に同じ体の構造であるが、外見はいかなる怪獣とも異なっていた。背中には巨大な水晶体の様な突起物が皮膚を突き破るかのように並び立ち、どこか幻想的な輝きを放っている。さらに、体表を覆う鱗は醜悪且つ攻撃的な性格を現している。鱗の一つ一つが針の様に伸びており、ツルギが体を守る鎧と化していて、怪獣はその姿で自分が他者を受け付けず、誰とも共存する意思のない破壊者であることを宣言しているのだ。

ティガは、かつて闇にいた頃の記憶の中からこの怪獣の事を見つけて出していた。

「ラジドッグ、お前もきたか。邪神め、方舟を絶対に出港させたくないようだな。いや、こいつを送ってきたということは、俺を殺すためか……」

ラジドッグ。ゴルザ達と同じように闇の眷族の怪獣である。しかし、彼の出自は他の怪獣とは違った。彼は、普通の生物が闇を取り込み、自分の意思で怪獣化した闇の巨人が獣となった様なものである。闇に自分の意思で従い、さらに強くなり続けることであらゆる生物の頂点に君臨するまでになった、怪獣達の中の帝王と言える存在である。そして、闇にどこまでも染まり続けたその体と能力は、

あらゆる文明を抹消させるほどの破壊的なもので、ティガ達闇の巨人たちですら彼には不可侵を保ち続けるほどの存在であった。ラジドッグは、すべてを拒絶し根絶する、絶対の存在であった。

ゆっくりと足を運ぶラジドッグは足を止めると、倒れ込んでいるゴルザとメルバを睨みつけた。怒りとも、蔑みとも、殺意も取れるその眼光を浴びせられた二体は、ゴルザはひれ伏して体を硬直させ、メルバに至っては激しく体を震えさせながら、足がすくんでしまっている。巨人や文明の前に立ちはだかつてきた二体の怪獣すら畏怖するラジドッグの存在がどんなものか、その光景が示している。

二体の怪獣を精神的に制圧すると、ラジドッグはティガに狙いを定めた。前進を始めティガに迫っていく。ティガにとっては後退はあり得ない。ひたすら前を目指す先に光があるのだから。相手が測り知れない強さであることは知っていても、ラジドッグに向かって疾走し、浴びせ蹴りを仕掛けた。しかし、相手の頭部に攻撃が当たったにも関わらず、ティガの方が体を弾き飛ばされてしまった。体力や防御力に圧倒的に差があるのだ。それだけではなかった。立ち上がったティガに、ラジドッグの鋭い爪が襲いかかったが、目で見るのが精一杯でよけることができなかった。巨体を持ちながら俊敏性を持つその存在は、ウルトラマンに近くもあり、水と油の様な存在でもある。

ラジドッグはティガをダウンさせると、その体を踏みつけ始めた。体重があるので、一発が強烈でティガの体を痛めつけ、殺意を込めて傷つけていく。何度もティガは立ちあがろうとするが、その度に踏みつけられ傷つけられていく。

動けなくなったティガを蔑むような眼で一瞥すると、ラジドッグは狙いを方舟に変えた。前進を始めながら、熱線をバリアー浴びせかけると、兄弟が命を削って作り上げたバリアーは蒸発し、正面がから空きになった。悪鬼の様な形相を見せるラジドッグは、そばにひれ伏しているゴルザを引きずり起こすと、その首筋に自分の牙を突き立てた。激痛にもがき苦しむゴルザの体に闇の力が注ぎ込まれ、

全身の血管が浮き立ち真っ赤な輝きを放ち、手足の筋肉は膨張して肉体そのものが変異し強化されていく。性格の以前より狂乱状態になり、猛狂って方舟に向かっていく。メルバも同様の運命を辿る。ラジドッグに喉笛を破られそこからエネルギーを注入されると、嘴が異様なほどに伸び、翼も血走っているかのように真っ赤になり巨大化する。そして、突風を巻き起こしながら舞い上がると、急降下しながら方舟に向かっていった。方舟の破壊と、生き残りの完全抹殺を目論む強い意志が働いているのだ。

上空からメルバが方舟に突撃をかけようした瞬間、隙をついて起きあがったティガがメルバに体当たりをかけて地上に叩き落とす。そして、接近するゴルザの懷に飛び込み、前進を阻もうとする。そのティガをゴルザは強化されたパワーで殴りつけるが、ティガはじつとそれを耐え続ける。埒が開かないと判断したラジドッグは自ら突撃し、熱線で兄弟を抹殺して方舟の支えを切り崩そうとしたが、熱線が喉元まであがってきたところで、ティガの腕が顎に伸び、熱線の発射角度を上空に向けられてしまった。熱線は空高く伸び、大気圏外まで達するほどの威力だ。その根線を正面から食らっているティガの体はボロボロのはずだが、二体の怪獣をたった一人で押し返そうとしている。しかし、そこに追い打ちをかけるように、ティガに打ち落とされたメルバが怒りの矛先をティガに向け、二体を押さえるティガのから空きになった背中に鋭さを増した嘴を振り下ろしていく。嘴が体に突き刺さり、激痛をティガを襲うが、彼は一歩たりとも後退せず、その場にとどまり続ける。

方舟の正面はバリアーが吹き飛ばされたが、少しずつ兄弟の力で修復されてはいる。それでも外の様子は丸見えの状態である。里の人々は、次第に凄惨さを帯びていくティガの悲壮な状況を見守っている。希望は捨ててはいないが、そのせいでティガの苦しみが増していくことに心が痛み、涙を流す者さえいる。兄弟にとってもそれは同じことだった。光を手にしたとはいえ、この里に縁もゆかりも何もない男が、自らをあそこまで傷つけながら戦う姿に心が熱くな

っていた。このままでは確実になぶり殺しにされるであろうティガの姿に、ドウアンは思わず大声で叫んでしまった。

「もういい、もういいんだ、ティガ。俺達は闇に逆らい、意思を表明した。それでも価値があった。もうお前がそこまで傷つくことはない。何故、そこまで命をかけてこの里の者のために戦うんだ」

いくら敵対していた者同士とはいえ、人の心を持っている者として、これ以上の凄惨な光景は見るに堪えなかった。もう十分に戦ってくれた、皆を守ろうとする気持ちも分かった。だからこそ、これ以上ティガを苦しませることはできないと言うドウアンの本音だった。ティガは、怪獣達に攻撃を受けながら、振り返らずに言葉を返してくる。

「その気持ちだけでもらつとくよ。だが、俺はやめないからな。絶対にここから一歩たりとも後退しない。絶対にだ」

ティガの覚悟は言葉通りだった。先程から猛攻を受け続けながらも、その足は決して後退していない。むしろ、このような状況であるにも関わらず、前進すら試みようとする。その覚悟に、サトゥーも心を揺さぶられた。

「お前の心が変化しつつあるのは、二度目に拳を交えた時に何かは感じていた。それは、お前が心を手に入れつつあると言う前触れだったと今は確信している。しかし、それは俺の想像を超える強さを持っていた。ティガ、お前のその覚悟と意思はどこから来る。何がお前を支えるんだ」

サトゥーの叫びに、ティガは当然というような口調で応える。迷いはない、当たり前だという気迫がこもっている声で。

「俺の背には、背負っている魂がある。友情のために互いに命をかけた者達がいた。里を守るという使命に己の命をかけ、決して迷いを持たなかった者達がいた。闇に迷い込み、光を知らぬまま永遠の

苦しみに引きずり込まれた者達がいた。絶望の闇の中で邪神に抵抗し、その意思を後世につなごうとする民がいる。そして、心をなくした男に愛を教えた女がいた。彼らの魂を背負っている以上、俺はここから後退するわけにはいかない。俺はウルトラマン。この魂を、光を守るために、俺は絶対に負けるわけにいかない」

ティガの言葉は、二人の巨人の魂に共鳴した。その顔には見えなくとも、彼らの心は涙を流している。そして彼らは、この男を決して死なせてはならないと悟った。

「ドウアン、俺は奴を助けるために、いったん外に出る。わずかな時間でいい。一人でバリアーを維持しろ」

「兄者、そう言うと思った。任せてくれ。あいつも方舟に乗せなければならぬ。あいつの魂こそ、後世に伝えるべきものだ」

兄弟は互いに意思を確認し合い、サトウーは外に飛び出そうとした。しかし、それは不可能だった。彼の足はエネルギーを失ったため石化が始まっていた。彼だけではない。ドウアンの体も石化が進み、手の指先まで進行している。

「クソ、奴らのせいで予想以上にエネルギーを消耗した。もう万事休すか……」

サトウーは自分の覚悟も打ち砕かれて、肩を落としていた。ドウアンもどうすることもできないまま、あれほどの魂を持つ男が痛めつけられるのを黙って見守るしかないのかと思い、絶望しかけていた。その時、彼の目に不思議な光景が映った。視線の先にいるティガの体が、まるで脈打つかのように一瞬だがぶれて見えるのだ。目の錯覚かともいもう一度眼を凝らすと、ティガが必死に前進を試みようとする度に、ティガの体にある赤と青のライン、そしてプロテクター部分が膨張するかのように波打ってに光るのだ。

「兄者、ティガの体がどうも妙だ」

「どういうことだ」

「あいつ、一体の体に複数の力を宿しているように思える」

「何だかつ」

サトウーもまた、ティガの体を凝視すると同じ光景を目にした。まるで、ティガの体から何かが吹き出そうとする様な何かが。

「あいつ妙な能力を持っているが、それがあいつを、そして俺達を救うかもしれん」

「どうやら、そのようだ、兄者。やるか」

「おう。ティガっ、いいか、よく聞け、返事はいらん。お前の体には不思議な能力が宿っている。それを引き出すコツを伝える。いいか、イメージだ。大地をイメージしろ。湧き立つマグマを押さえこみ、万物を支える大地の力強さをイメージしてみろ」

ティガは返事をしないまま、今の姿勢を崩さない。しかし、体の赤のラインが光輝き全身を覆い始め、マグマの様な炎が体を多い、真紅の姿にティガを変えた。体から湧きでる力を抑え切れない様子で、ティガは先程まで苦しめられていたラジドッグとゴルザをこともなげにに押し返していき、さらに二体とも突き飛ばしてしまった。そして、後方から強襲するメルバを受け止めると、山の向こう側まで投げ飛ばした。

ティガは自分の力に驚いていたが、制御できないほどの力と熱が体の奥底から噴き出してくるのに耐えきれず、その場にしゃがみこんだ。全身の筋肉が隆起し始め、体のあちこちから炎が噴き出す。

ティガは、片方の腕で一方の腕を押さえこんだ。まるで体が沸騰するような感覚だったが、ティガに恐れはなかった。なぜなら、体を巡るその気配に覚えがあるからだった。

「よう、ダーラム。そこにいたか」

ティガは、仲間たちと戦った際に、全身に返り血を浴びている。血は彼らの感情や思い、魂がこもっている。ティガによつて裏切られ、神殿の人柱にされたことは決して忘れていない。それも背負った上で、償い続ける道を選んでいたのでから。

「お前が俺を許すわけがないよな。裏切りを嫌うお前の友情の考え、否定はしない。だがな、命をかけて互いを支え合い、互いに報いようとした奴らがいたんだぜ、この世界に。お前にも見せてやりたいが、それももう叶わない。だから、いつの日かお前に俺の魂が伝えてやる。何があっても裏切られることのない友情があるってことをな。だから、今は俺に力を黙って貸せ」

ティガは強い意思で、自分の体に血となって息づく思念に語りかけた。やがて、暴走しつつあった力は落ち着きを取り戻し、完全にティガの物となった。

ティガのその様子を隙と見たラジドッグはティガに襲いかかり、爪を突き立てた。しかし、ティガの体は筋肉が隆起し鋼の肉体に変化しており、攻撃を弾き返した。そして、ティガはお返しとばかりに飛び上がると肘を頭に突きたてた。衝撃に意識が飛び、倒れ込むラジドッグの体を受け止めると、軽々とその体を持ち上げ、そのまま脳天から大地に突き刺した。先程までとは比べ物にならない強大な力が、ティガの体に溢れている。

闘争心が極限まで高められているゴルザは、そんなことにお構いなくティガに頭から突っ込んでいった。ティガは、避ける必要はないとばかりに片手だけで頭を押さえこみ、突進を止めてしまう。それでも前進をやめようとしないうるの顎に、ティガの膝が突き刺

さる。顎をカチあげられ、ふらついたゴルザの胸元にめがけて、ティガの拳が突き刺さった。文字通り、拳が胸に突き刺さり貫通した。ゴルザの体は吹き飛ばされ、山肌に激突した。致命傷となってもおかしくない攻撃だったが、究極と言えるほど強化された体ゆえに、まだ立ち上がって戦おうとする。その姿は恐怖でもあり、哀れでもある。ティガは、その様子に終止符をうつべく、両手にマグマの様なエネルギーをためながら胸で凝縮し、灼熱の渦・デラジウム光流を投げつけた。ゴルザはそれを受け止めきれず、体は炎に包まれながら粉碎された。

まず一体を撃破したティガは、さらなる反撃を試みようとした時、山の向こう側から態勢を立て直したメルバが飛び立ってきた。空中からティガを翻弄し、攻撃を仕掛けてくる。ティガは攻撃を避けようとするが、膨張した体のウエイトが仇となり、メルバの速さに追いつくことができない。そこに、今度はドウアンが声を張り上げて言葉を伝える。

「次は、空をイメージしろ。風が駆け廻り、どこまでも高く広がっていくこの空を思い描け」

ティガ言う通りに空をイメージした。自分の図法いっぱい広がる天空を頭に思い浮かべる。それに伴い、今度はティガの体が青く変化していく。体の中に嵐が巻き起こり、渦に引き込まれそんな感覚だが、その感覚にもティガは覚えがある。

「ヒュドラ、お前のことも覚えているぜ。お前の欺瞞は、人を信じることのできない恐怖から来ていることが、今の俺にならわかる。信用できないから、疑うことでしか心の安定を得られない。だが、自分の為すべきことを信じて、命をかける奴もいるんだ。お前から見れば馬鹿な奴かもしれないが、馬鹿げたことにも命をかけられる奴らは自分の事を、仲間を信じられるから命を張れるんだ。彼らの魂、お前にも伝えてやる」

ティガの意思は、体を駆け巡る嵐を抑え込んだ。そしてティガは風と一体化し、空に舞い上がった。空の一部と化したティガの飛行は非常に速く、追いかけるメルバに追い付くことを許さない。機動力で翻弄しながらぐんぐん上昇していく。

「風となった俺にお前は追い付けない。風を切り裂かねば飛べないお前に、風と一つになって空を駆け巡る俺は絶対に捉えられない」

ティガは超音速で上昇し、ある高さで立ち止まるとメルバが追い付くのをわざと待ち受ける。凶暴化しているメルバは、ティガに肉薄すると嘴で突きまくる。しかし、ティガはそれをことごとくかわし、翻弄し続ける。

「遅いな、遅すぎる。風になった俺に、空気の壁は存在しない。どこまでも速くなれる。それを見せてやる」

ティガはメルバに胸元に蹴りを入れて距離を作ると、左右に動き始めた。次第に加速していき、目視することすら難しいほど激しく動き続ける。そして、高速で動き続けた故に残像が発生する。一体、二体と残像は数を増し、メルバの周囲を囲んでいく。どこに本物のティガがいるかわからなくなったメルバを混乱していた。やがて、ティガの残像達は、手刀を構え一斉にメルバに向かって殺到し、手刀を突きいれていく。一撃は軽いが数多く叩きこむことで威力を増す攻撃はメルバの翼を叩き折り、飛ぶための手段を失ったメルバは墜落していく。その下には方舟がある。しかし、ティガあわてることなくメルバを追い懸けていく。そして、ピラミッド状の箱舟に落下する直前ランバルト光弾を発射し、完全にメルバを消滅させた。

再び方舟を守る様に着地したティガの体は、再び赤と青の巨人に戻っている。静かに前を見据える視線の先には、屈辱的な扱いを受け、怒りに燃えているラジドッグがいる。結晶体を真っ赤に発光させ、その熱が陽炎の様に後方に放射される。胸元が真っ赤になり、フルパワーの熱線でティガもろとも方舟も吹き飛ばす、一撃の勝負

にしようとしている。ティガは、それを受けて立つ覚悟で、技の構えに入る。その時、胸部の黄金に輝くプロテクターが脈打った。それが誰の意思で為されているのか、ティガには瞬時に、いや、考える必要のないほど明らかであった。

「カミィラか……」

ティガに愛されることを望み、その情念に引き込まれ、憎しみの激情に苦しみ続けた女。ティガは、その悲劇のもとが自分にあり、そしてどこで間違いを生んだのかわかっていた。

「カミィラ、俺達がどこで間違えてしまったのか、今なら痛いほどよくわかる。すべては、俺が正面からお前に向きあわなかったせいだ。愛されたいと言うお前の気持ちに応えなかったことだ。愛されたいという欲求に呑みこまれ、やがて、それが憎しみに変わっていくお前を俺は何も気になけなかった。すまなかった……。今や俺に出来ることは何もない。だが、俺の魂はお前に償いを果たす。愛されることを待つよりも、自ら踏み出す勇氣こそが愛だと言うことを伝える。いつの日か俺の魂が、俺の光を継ぐ者がお前に光を伝えるだろう。だから、今は俺を生かしてくれ……」

ティガの願いに応えるかのように、脈打つ光は穏やかなものとなり、ティガのエネルギーとなっていく。動こうとしないティガに、ラジドッグはフルパワーの熱線を発射する。大地を焼き、大気を突きぬけながら熱線はティガと方舟に迫る。しかし、ティガに恐れはない。今の彼には、光の強さを信じる心がある。エネルギーを交差させると、腕をし字に組んで光の熱線・ゼペリオン光線を発射する。ラジドッグの熱線とゼペリオン光線が正面からぶつかり合う。やや熱線の方が威力が高いのか、次第に押し始めていく。それでも、ティガは不動の体勢のまま動揺することはない。数々の出会い、取り戻した心とそこに注がれた様々な経験や感情、魂、そしてかけがえのない存在から与えられた愛が、ティガの胸に焼き付いている。そ

れが光輝くたびにティガの技が強大になっていく。やがてティガの光線がラジドッグの熱線を押返していく。そして、一歩ずつ足を踏み出しどんどん押し返していく。完全に力関係が逆転し、ラジドッグは肉体の限界を超え、体のあちこちから炎が噴き出し自壊を始めていく。もはや、勝負は決していたが、ティガにはまだ戦いは終わっていないかった。天に向かって、ティガは叫ぶ。

「聞いているな、邪神よ。お前は人の心をあざ笑った。だが、それと同時に、人が自分の脅威になることを恐れていた。だから、方舟に乗る人々の光を潰そうと躍起になった。お前はもうすぐ闇でこの世を塗りつぶす。だが、お前に勝利はさせない。この方舟に乗る人々の光と魂は、遺伝子となって脈々と受け継がれる。精神もまた受け継がれ、後世の人間に根付いていく。そして、それらを受け継いだ人々が、必ずお前の闇を打ち破る。絶対にだ。この一撃は、人類からお前へ意思表示だ」

ティガは、渾身の力を込めて光線を発射し、それに巻き込まれたラジドッグは光の中に消えていった。すべての脅威を振り払ったティガは、しばらくそこに佇んでいたが、方舟の方に振り返ると自ら近づいていき、巨人の兄弟に話しかけた。

「頼みがある。俺も方舟に乗せて欲しい。この意思と光を伝えていく。生きることと償い続けると、ユザレに約束したんだ。だから、俺はここで死ぬわけにはいかない。方舟に乗せてくれ」

ティガの予想外の真摯な願いに、二人とも一瞬唖然としたが、何も言わなくても一致した答えを出し、サトウが答えを伝えた。「命を張ってここににいる人たちを守ったお前を放り出すのは、皆の意思に、先代のユザレの意思に反する。さつさと、乗れ」

サトウの声には、ティガと言う光であり人である存在を受け入れようと言う決意があった。受け入れなければ、光の意思に反する

だろうという確信があった。ドウアンもまた同じ心であった。彼もティガに声をかける。

「急げ。背後まで闇が迫っている。お前の力が必要だ」

「わかった。感謝する、ありがとう」

ティガはすぐに方舟の中に飛び込んだ。黒い霧が怒涛のように押し寄せてくる。何をすべきか目で問うティガに対し、サトウが説明をする。

「体の中にあるエネルギーを、この方舟の金属フレームに向かって放射するんだ。エネルギーはバリアーに変換され、外界からこの方舟を遮断し、そこで方舟は完成する」

「わかった。任せておけ」

ティガは静かに佇むと、全身から光が発散し、金属フレームに吸収させていく。すると、バリアーは驚くような勢いで形成されるばかりではなく、白色だったバリアーの色が黄金に輝き始める。外界では、バリアーが完全に完成したため、黒い霧はバリアーに弾き返され、方舟は完全に闇から逃れることができた。

三人の巨人はすべての力を出しつくしたことで、石像化が進み全身を覆っている。そこで、ドウアンがティガに呼び掛ける。

「俺達の役目はここで終了だ。石像とのリンクを断ち切れ。でないと、石像に取り残されたまま死ぬぞ」

死ぬ意思はないティガは、石像とのつながりを断ち切り、生身の一人の人間に戻っていく。その際、スパークレンスは石像に残したそこに残すことで、いつか光が継ぐ者がここに辿り着くことを信じてのことだった。三人が人の姿で降り立った時、遥か頭上高くにそびえたつ三体の石像が残っていた。

「兄者、何とか間にあつたな。しかし、これほどすごいバリアーが完成するとは、話に聞いてなかったが」

「まったくだ。この黄金のバリアーに囲まれたこの方舟は、空間的な遮蔽ではなく、時間的な遮蔽を長期間維持できるはずだ。俺は専門家じゃないが、恐らく外界時間でおよそ3000万年……」

「3000万年、恐れ入るな。それを可能にしたのもティガ、お前の、ウルトラマンの力だ」

「よしてくれ。俺一人の力じゃない。この方舟に乗る人々の心の光と、俺の胸の中に生きる魂たちの力のおかげだ」

「まったく変つたよ、お前は。まあいい、立ち話はここまでだ。ドウアン、ティガ、皆の所に行こう」

彼らは、民衆たちの方に歩いていった。歓声と共に、ティガへの畏敬の念と感謝の声が青とお立たない。ティガは、それを受け止めていいのかわからず、戸惑いを隠せずにいる。そこに、聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「まったく、柄にもないことにはてんで駄目ね、あんた」

振り返ると、ティガの視界にミオが飛び込んできた。ユザレを受け継いだ者の荘厳さと、相変わらずの奔放なところがうまい具合に組み合わさっている。

「まったくだ。俺はこんな風に扱われるのは苦手だ。特別扱いはいらないで欲しい」

「安心して、私はそのつもりはないから。あなたはウルトラマンの務めを果たした。次は、人としての務めを果たさないと。その光の

意思、体に刻まれた遺伝子を個性に伝えていくことが勤めよ。人を愛することが光、おばさんからそう聞いたでしょ。今生きる人を愛する、その愛は光となって受け継がれる。そして、巡るめく魂はいつか再び輝きを持って巡り会う」

「まるで、誰かさんそっくりの口調だ。聞いていたみたいだな。わかってるさ、今はあのユザレはいない。だが、魂は必ず巡り合う、遠い未来でな。そのためにも俺は光を伝え、光を継ぐ者を育てていく。ここにいる人たちは皆光を持っている。それを俺は体が朽ち果てても護る。それが俺の永遠の償いだ」

「つらい道だけど、決めたんでしょ。ウルトラマンティガさん、その光を継ぐ者が現われるまで、人々を見守ってね」

ミオはティガにきつい口調でも、優しさある言葉をかけると、石段の上上がり、民に向かって語りかけた。その姿はたくましく、先代のユザレそのものだった。

「民よ、今方舟は時の海に漕ぎ出しました。目指すは3000万年後の世界。それまで、私達は幾世代も代を重ね、血を継いでいきます。我々の記録や記憶、文明はいずれ失われるのは避けられませんが、心の中にある愛と言う光、そして闇にも屈しなかった魂と意思は体に刻まれ、子孫に伝えられます。そして、再び闇が襲いかかった時、我々の遺伝子は再び輝きを放ち、未来を今度こそ勝ち取るでしょう。行きましょう、遠き未来へ。目指しましょう、新たな輝ける世界に」

その声に、民衆は歓声を上げた。この意思を伝えていく、自分達が未来の礎になることを誇りにし、子孫たちを信じて、長い旅に出ることを決意を表明した瞬間だった。

ティガはそれを離れていたところから見守っていたが、脚もとに

小さな気配を感じた。見下ろしてみると、そこには、彼が助けた狼の子供たちが尾を振りながら集まっていた。ティガは彼らの目線に合わせてしゃがみこみ、声をかけた。そこには、かつてのぎこちなさはなく、目には優しさが輝いている。

「お前らも無事に乗船できたか。旅は道連れだ、一緒に長い旅に漕ぎ出すか」

ティガに顔には自然な笑みがこぼれていた。彼らの長い旅が、今始まった。神話の時代は終わった。しかし、時代が残した遺産は受け継がれていくのだ。

神話の遺産は光を継ぐ者達へ

あれからどれだけ多くの時が過ぎたのだろう。光と言うさらなる高みを目指す人々を乗せた方舟は、悠久の時の流れを進み続けた。長い時の中で、人々の命は受け継がれ、代を超えて光は受け継がれていく。俺も、自分の光を伝えていく。俺に愛をくれた女の願いは、人を愛すること。だから、俺もこの現世で人を愛した。そして、人々を愛した。彼女との約束を守るために。

人としての命を最期まで精一杯生きた俺は、一つの償いを終えた。だが、償いは終わらない。俺の犯した罪は限りなく重い。例え、魂になるうとも償い続ける。幾多の世代を重ねて受け継がれる命を、魂として俺は守り続けた。肉体がない以上、彼らの人生には干渉できない。だが、その魂に宿る光、そして遺伝子に刻まれた太古の歴史を紡ぎ、その証となる者達を俺の光は守り続ける。

やがて、方舟は時代という港に辿り着いた。再び命が芽吹き、新しい人類が誕生していた。方舟の人々は、いずれ来る闇の再来の日に備え、新たな人類に光を伝えるため、世界に散っていった。いつの日か、彼らの光が未来を照らすことを信じて。

俺は、それから彼らの末裔を見守り続けた。やがて、俺の意思を色濃く受け継ぐ者たちも現われた。方舟に残した石像に共鳴する者すら現れた。それは、俺の光が受け継がれたと同時に、来るべき日が近いことを意味した。だが、彼らの心が受け継がれて、眩い輝きを放つ日は必ず来る、俺は確信した。

幾多の文明が現われ、消えていった。幾多の戦乱が起こり、命が失われ、疾病が猛威をふるいながら、大きなうねりの後に、やがて静かな平和が訪れる。その繰り返しの中で人類は、苦しみながらも徐々に、わずかではあるが光に一步近づいていった。それは、時には涙ぐましく、時には微笑ましい、人類の営みであり進歩でもあった。俺は、そんな人類がたまらなく好きだった。美しさも醜さも受

け入れて愛することができた。だから、光を持つ者たちを守り、その心が未来につながっていくのを見届け続けた。

かつての超古代文明を凌ぐほどの発展を遂げた人類。しかし、光が守られたと同時に、闇の鼓動が強まり、人々に闇が蔓延していった。かつての文明もそうだった。迫りくる闇に気がつけず、拳句の果てに滅びに身を委ねてしまった。だが、今の彼らは違う。世界に散った光の欠片を持つ者が、闇に立ち向かおうとしている。

俺は、確信した。時がきたと。そして、方舟に戻りその来訪を待った。待ち続けた……。そしてきた。

「お前達が、闇に立ち向かう戦士達は」

彼らは白い衣を守っていたが、武器を持ち、未知なるものに立ち向かう意思が目には宿っている。かつて、人々が希望と意思を持って乗り込んだ方舟に警戒感と恐れが、彼らの顔に浮かんでいる。

「おいおい、そんなに殺気立つなよ。びびることもない。ここはかつて、この星で最も崇高な意思がこもった聖域なんだ。恐れるな。目を開き、本当に戦うべきものを見つけろ。何よりも守るべきものを探すんだ」

人ではない魂である俺には、こうやって彼らの持つ魂に語りかける他に仕方ない。そして、俺には一人の男の姿が光輝いて見えた。俺は、あいつを昔から知っている、いや、お前が俺の光を継ぐ者だ。「こつちへこいよ、ダイゴ」

ダイゴは巨人たちの石像に駆け寄り、圧倒されるような表情を見せている。そして同時に、自分の中にこの石像に対する不思議な抱いているようにも見える。それは当然だ。

「ダイゴ、お前の心に眠る光を解き放て。そして、その体に刻まれた古代の人々の意思が込められた光の遺伝子に身を委ねろ」

やがて、戦士達は撤退を余儀なくされていく。彼らの言葉を聞いた限り、ゴルザとメルバがここに近づいているようだ。やがて、思い出深い方舟が破壊されていく。俺の石像をこの時代まで守り続け、たあの兄弟の石像も破壊された。彼らの念がなければ、俺の石像も風化していただろう。

「罰あたりな奴らめ。しかし、懲りない奴だな、邪神よ。見ていろ、光を継ぐ者の誕生を」

心の声に突き動かされ、ダイゴは武器もなくゴルザ達に立ち向かっていく。いい度胸だ。お前の勇気は、あの方舟に乗って未来へ旅立った人々の心、そのものだ。

「お前の勇気、意思、それが光を持つ者の証だ。そして光を解き放つていけ。そして、お前にふさわしい力、そして、お前の運命がこの光だ」

俺の魂は、ダイゴを光を誘い、そして巨人の石像へと同化させた。「これは俺の力じゃない。お前の光が石像を動かしたんだ。自分の意思でな。行けよ、お前がウルトラマンティガだ」

新たな時代に生まれたティガは、かつての俺の様に闇の眷族に立ち向かっていく。自分の運命、与えられた力に対する戸惑いが、本来の力を削いでいる。だが、それでいい。彼は彼、一人の人間だ。俺の代わりじゃない。

「ダイゴ、お前にとっては過酷な運命が始まった。運命はないと言う奴もいれば、あると言う奴もいる。俺はあると思う。俺の歩みを知ればよくわかるし、俺は衝撃を受けるだろう。まあ、それはいずれお前にも伝わるはずだ。だがな、運命の終着点は決まっただけ、そこに至る道を選ぶことは自由だ。道の途中でどう生きるのも自由だ。お前はお前の道を歩め。そして、運命である人を照らす光のつ

かめ」

ダイゴの過酷な未知が始まった。だが、俺の魂はあいつを守る。過去の人々が託した祈りを叶えるために。そう思いながらダイゴを見守る俺に、懐かしい声が聞こえてきた。

「彼があなたの光を継ぐ者」

その声は懐かしかった。そして、長い時の中でずっと待ち続けた人のものだった。俺は、待ち続けた人の名をようやく呼ぶことができた。

「ユザレ、君も戻ったか」

「幾多の時を超えて、私たちは巡り合う。ティガ、やっと会えた」

俺が見つめる彼女の姿は、もう肉体はなくなってしまうている。彼女の肉体も魂も電子情報になるまで分解され、宇宙を飛び回りながらとうとう戻ってきたのだ。あの頃と俺達の姿は変わってしまった。だが、残った魂、そして俺達の愛はあの頃と変わらない。

「お帰り、ユザレ。だが、君が帰り、俺も光を継ぐ者を見つけたということ、再び決戦の時が近づいていることでもある」

「そうよ。だからこそ、私達はここにいる戦士達を、そして光を心に宿しながら散らばる末裔たち、未来を築く光の子を守っていく」

「彼らには過酷な運命が待っている。だが、俺達は見守ることはできても、彼らには干渉はしない。彼らには彼らの運命や生き方、そして守りたい、愛すべき人がいるのだから」

「そうね。ティガ、あなたの目の前にいる人の顔を見て」

俺は、自分とダイゴの目の間にいる人物に視線を移した。長い黒髪から顔をのぞかせる、戦士達の長。その顔立ちに俺は見覚えがあった。いや、今も目の前にいる。

「驚いたな。ユザレ、君とよく似ている。いや、そっくりだ。きつと、ミオの系譜から君の血も受け継がれていったのだろう」

「運命があるなら、思いがけない悪戯ね。魂だけではなく、光を継ぐ者として末裔が出会うなんて。それに見て、この建物は方舟そっくりよ。本当に何から何まであの頃と一緒。でも、今度はわたしたち二人がいる。光を継ぐ者たちもいる」

「そうだな。彼らには彼らの人生と愛する人がいる。共にそれを見守ろう。そして、彼らが未来をつかみ取る光景を待とう。そして、俺の最後の償いもやってくる。その日まで、彼らと共に歩んでいこう。未来と言う光を手にするまで」

俺達の手は、悠久の時を超えて再び握りあえた。そして、今度は共に未来へ向かって歩き出す。ダイゴ、光であり人であるウルトラマンティガを継ぐ者よ。お前が歩くのは過酷ないばらの道。お前が見るのは光と闇が戦う修羅の世界。だが、お前の背には常に人々の光がある。俺達の魂がある。その光で、未来に向かっていけ。お前の歩く道が未来を切り開く。お前の後ろには俺達の光と意思がある。だから恐れるな。光は愛、それを胸に抱いていけば、必ず次の時代の光に辿り着く。

俺達の残した神話の時代の遺産は、今を生きるお前たちに受け継がれた。光を継ぐ者たちよ、その輝きを絶やすな。その輝きは、人をウルトラマンに変えるだろう。精いっぱい生きて、光を絶やすな。そしていつの日か、俺達を超えて新しい光をつかみとれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345w/>

ウルトラマンティガ legacy of mythology

2011年11月11日15時47分発行